

博士論文

雅語「ものす(る)」の歴史的研究

名古屋大学人文学研究科
人文学専攻日本語学分野・専門

余 飛洋(余 飞洋)

2022年12月

凡例

一、用例番号、図表番号は各章ごとに付す。

一、注は、論文全体で通し番号とし、原則として同頁下欄外の脚注として示す。

一、用例中の表記は原文のままとする。適宜省略することがある。また必要に応じて点線、波線もしくは下線を付す。

一、用例中 () の中に主語など文脈から補える情報を示す。

一、用例の末尾には、順に用例の作品名、調査資料における巻号や頁数を示す。

一、文中において、参考文献は、氏(名)に続けて(年号)の形式で示す。文献の題目・所収などは【参考文献】欄にまとめて掲げる

目次

序章 本研究の目的と構成	1
1. はじめに	1
2. 研究の対象及び方法	1
2.1 「ものす(る)」を研究対象とする意義	1
2.2 調査資料及び方法	1
2.3 時代区分	4
3. 本研究の構成	4
第一章 雅語に関する研究と「ものす(る)」の記述	7
1. 「雅」という意識の成り立ち	7
2. 「雅語」の定義と範囲	7
2.1 調査した雅言/雅語資料の様相	13
2.2 まとめ	20
3. 「ものす(る)」に関する記述	21
参考文献	23
第二章 「ものす(る)」における本動詞用法と他動詞化	26
1. はじめに	26
2. 先行研究と問題の所在	27
3. 自動詞・他動詞の分類基準	27
4. 調査結果	29
4.1 中古の様相	29
4.1.1 自動詞の場合	29
4.1.2 他動詞の場合	34
4.2 中世の様相	36
4.2.1 自動詞の場合	36
4.2.2 他動詞の場合	39
4.3 近世の様相	40
4.3.1 自動詞の場合	40

4.3.2 他動詞の場合	41
4.4 近代以降の様相	42
4.4.1 自動詞の場合	42
4.4.2 他動詞の場合	43
5. おわりに	44
参考文献	46

第三章 中世における存在を表す「ものしたまふ」—「おはす・おはします」「わたらせたまふ」と比較して	49
1. はじめに	49
2. 先行研究	50
2.1 中村(2001)「存在詞「わたらせたまふ」と、その周辺	50
2.2 高橋(2010)「中世王朝物語」における存在詞「ものしたまふ」と存在詞「わたらせたまふ」	50
2.3 問題点	50
2.4 用法の分類基準	52
3. 存在を表す「ものしたまふ」	54
3.1 「空間的存在文」	55
3.2 「限量的存在文」	55
4. 存在を表す「おはす・おはします」	55
4.1 「空間的存在文」	56
4.2 「限量的存在文」	57
5. 存在を表す「わたらせたまふ」	57
5.1 「空間的存在文」	58
5.2 「限量的存在文」	58
6. 考察	59
6.1 存在文の種類の違い	59
6.2 存在文における存在対象の違い	59
6.3 三語の違い	60
6.4 ジャンルによる違い	62

7. おわりに	65
参考文献	66
第四章 「ものす(る)」における補助動詞用法の衰退について	68
1. はじめに	68
2. 先行研究と問題の所在	69
3. 歴史的観点から見る「ものす(る)」の補助動詞用法の変化	71
① 名詞句+「ものす(る)」	72
② 形容動詞連用形句+「ものす(る)」	73
③ 形容詞連用形句+「ものす(る)」	74
④ 副詞句+「ものす(る)」	75
⑤ 動詞連用形句+「ものす(る)」	75
4. 考察	79
5. おわりに	81
参考文献	81
第五章 文体史から見る「ものす(る)」の変化	84
1. はじめに	84
2. 問題点	84
3. 中古の和文作品における「ものす(る)」	85
3.1 ジャンルによる使用	85
3.2 作品別による使用	88
4. 中世の王朝物語と歴史物語における「ものす(る)」	90
4.1 ジャンルによる使用	90
4.2 作品別による使用	93
5. 近世の江戸文学における「ものす(る)」	97
5.1 ジャンルによる使用	97
5.2 作品別による使用	101
6. 近代以降における「ものす(る)」	110
7. おわりに	112

参考文献	113
終章 まとめと今後の課題	117
1. 本研究のまとめ	117
2. 雅語「ものす(る)」が保持された要因	120
3. 今後の課題	121
初出一覧	123

序章 本研究の目的と構成

1. はじめに

本研究の目的は、雅語の研究背景を概観した上で、雅語の一例として「ものす(る)」を研究対象とし、その日本語史上の変化が雅語の変遷の上でどのように位置づけられるのかを明らかにすることである。

その目的を前提として、序章では、「ものす(る)」を事例として取り上げる意義を述べた上で、調査対象とした資料とその時代区分を規定する。

2. 研究の対象及び方法

2.1 「ものす(る)」を研究対象とする意義

本研究では、雅語の一例として「ものす(る)」という語を研究対象とする。その歴史的变化の研究を通し、雅語という位置づけを得た語がどのように現代語まで継承されるのか、その過程と条件を探究したい。「ものす(る)」という語は、上代には用例が見られないが、中古には仮名文学を中心に、中世には王朝物語や歴史物語を中心に用例が多く見られる。近世には、さまざまなジャンルで用例が見られ、幅広く使われているが、使用上にはさまざまな面で偏りも見られる。19世紀には雅語として辞書類に記述がなされ、その後、近代期を経てある用法がなくなったり、意味が縮小したりしているが、現代日本語においても死語とはならなかった。古代から現代まで用例が観察できる事例として注目できる。では「ものす(る)」は古代日本語から現代日本語まで、なぜ生きながらえたのだろうか。「ものす(る)」に対しては、多様な用法の変化、ジャンルの偏りなど多角的な観察が可能である。本研究では、多角的な考察により、どのような用法がなくなり、それがなぜなくなったのか、さらに、運用・用法の上でどの部分が変わり、どの部分が保持されてきたのかを明らかにしたい。本研究で「ものす(る)」の観察を通じてこれらの問題を解明することは、日本語史上の「雅語」の展開を考察する上で有益な示唆をもたらすと考える。

2.2 調査資料及び方法

本研究の調査において使用した検索アプリケーション、デジタルデータベースや、参照した活字資料及び底本は以下の通りである。これらの資料を用い「ものす(る)」

の歴史的变化を考察する。

〈検索アプリケーション〉

JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com/library/>)

国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』 (バージョン 2022. 10, 中納言バージョン 2. 7. 0)

全文検索システム『ひまわり』日本語用例検索・青空文庫所収文学作品

(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/>)

日本古典文学大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>)

漸本大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon>)

見出し語検索 NINJAL-LWP for BCCWJ (<http://nlb.ninjal.ac.jp/search>)

〈デジタルデータベース〉

国文学研究資料館・日本古典籍総合目録データベース

(https://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvDefault.exe?DEF_XSL=default1t&GRP_ID=G0001401&DB_ID=G0001401KTG&IS_TYPE=csv&IS_STYLE=default)

国立国会図書館デジタルコレクション(<https://dl.ndl.go.jp>)

新日本古典籍総合データベース(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/?ln=ja>)

〈活字資料〉

国文学研究資料館翻刻画像データ：『詞葉新雅』『雅言仮字格』『雅俗幼学新書』『源語雅言解』『雅言童諭』『雅俗対覧』『雅語訳解拾遺』『雅俗通載抄』『雅言集覧』、『雅言撮要集』(広島大学図書館所蔵)、『雅言玉鬘』『雅言解』(八戸市立図書館所蔵)、『雅語集説』(筑波大学図書館所蔵)

国立国会図書館翻刻画像データ：『雅言小解』『雅言畧解』『和英語林集成(第二版)』『東雅』新井白石[著], 享保二年(1717)成, 杉本つとむ編著, 早稲田大学出版(1994), 影印・翻刻

『雅語音声考』鈴木胤[著], 文化十三年(1816)刊, 広島大図書館蔵, 翻刻画像データ『雅語訳解』(1986)鈴木胤[著], 『名古屋叢書三編/名古屋市蓬左文庫編』第15巻, 名古屋市教育委員会

『言語四種論 雅語音声考; 希雅』鈴木胤[著], 勉誠社(1979)

『増補雅言集覧』石川雅望[著]; 中島廣足[補], 1965年刊, 臨川書店

〈底本〉

【中古】『新編日本古典文学全集』（小学館）：竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記

【中世】『新編日本古典文学全集』（小学館）：宇治拾遺物語、徒然草、十訓抄、保元物語、平治物語、平家物語、曾我物語、太平記、義経記／『日本古典文学大系』（旧版）（岩波書店）：古今著聞集、御伽草子／『中世王朝物語全集』（笠間書院）：あきぎり・浅茅が露、海人の刈藻、いはでしのぶ、石清水物語、木幡の時雨・風につれなき、苔の衣、恋路ゆかしき大将・山路の露、小夜衣、しのびね・しら露、雫ににごる・住吉物語、とりかへばや、八重葎・別本八重葎、松浦宮物語・雲隠六帖、風に紅葉・むぐら、松陰中納言、夜寝覚物語、我が身にたどる姫君（上）・（下）、夢の通ひ路物語（上）・（下）、物語絵巻集／『水鏡大鏡今鏡増鏡』（國民文庫刊行會）／『續抄物資料集成』（清文堂）

【近世】『洒落本大成』（中央公論社）／『新編日本古典文学全集』（小学館）：好色一代男、好色一代女、好色五人女、男色大鑑、近世俳句集、松尾芭蕉集、近世俳文集、仮名草子集、東海道中膝栗毛、近世説美少年録、西山物語、雨月物語／『日本古典文学大系』（旧版）（岩波書店）：芭蕉文集、歌舞伎脚本集、風来山人集、近世文学論集、川柳狂歌集、近世和歌集、浮世草子集、春色梅兒譽美、折たく柴の記、近世思想家文集、歌舞伎十八番集／『噺本大系』（東京堂出版）：昨日は今日の物語、狂哥咄、千里の翅、白癡物語、立春噺大集、戯言養気集、軽口筆彦噺、会席噺袋、宇喜蔵主古今咄揃、正直咄大鑑、軽口星鉄炮、あごの掛金、落噺懸鎖、杉楊子、初音草噺大鑑、臍が茶、新撰勸進話、臍の宿かえ、はなしのいけす、落噺常々草／『叢書江戸文庫』（国書刊行会）：漂流奇談集成、百物語怪談集成、前太平記、前々太平記、都の錦集、伴藁蹊集、八文字屋集、馬場文耕集、佚斎樗山集、近松半二浄瑠璃集、江戸作者浄瑠璃集、仏教説話集成、近世紀行集成、山東京伝集、滑稽本集、式亭三馬集、近世説美少年録、文化二年十一月江戸三芝居顔見世狂言集、役者合巻集、中本型読本集、近世奇談集成、石川雅望集、浅井了意集、浮世草子時事小説集、森島中良集、馬琴草双紙集、浮世草子怪談集、柳亭種彦合巻集、人情本集、小枝繁集、多田南嶺集、十返舎一九集、竹本座浄瑠璃集（一）・（二）・（三）、豊竹座浄瑠璃集（一）・（二）・（三）、只野真葛集、東海道名所記、原典落語集、福森久助脚本集、西沢一風集

2. 3 時代区分

本研究の時期区分は『日本語学大辞典』¹（「日本語年表」：1077）により設定する。

中古 - 平安期(794～1086)

中世 - 前期(院政期～鎌倉期(1086～1333))

後期(南北朝期～室町期(1334～1603))

近世 - 前期(江戸期・慶長8年～寛延3年(1603～1750))

後期(江戸期・宝暦元年～慶応4年(1751～1868))

近代以降 - 明治・大正・昭和・平成時代(1868～)

3. 本研究の構成

本研究は、以下のような構成となっている。

まず本章序章では、研究目的を設定する。さらに時代区分を設定し、博士論文の構成を説明する。

第一章では、「雅語」という概念について先行論に基づいて概観し、「雅語」の範囲を規定する。また、雅語に関する文献の記述を述べる。

第二章では、「ものす(る)」の歴史的変化を概観した上で、「ものす(る)」における本動詞用法の変化について述べる。「ものす(る)」は中古から中世後期にかけて、代動詞²として、本動詞用法と補助動詞用法の双方が頻繁に使われていた。しかし、近世以降には、本動詞用法としての「ものす(る)」の使用頻度が増加し、近代以降は本動詞用法のみが残されている。その本動詞用法については、以下のような変化が見られる。中古には、本動詞用法のうち、60%以上の用例が自動詞として使われる。特に、存在を表す「ある」や、移動を表す「行く」「来る」「通う」、また「結婚する」「懐妊する」などに当たる意として使われている。他動詞の用例は、「言う」や「思う」など、他動性が弱い用例が多い。しかし、近世から「盗む」や「作る」などの動詞を代用し、他動性が強い他動詞用法が現われ、用例数も多くなる。近代以降、自動詞としての用例は僅かになり、90%以上の用例は他動詞として用いられるようになる。

¹ 『日本語学大辞典』（2018）日本語学会編，東京堂出版。

² 例えば「久しう消息なども物せざりける」（大和物語：260）の「ものす(る)」は「差し上げる」の代用であり、「ほど経て河原へものするに」（蜻蛉日記/上：127）の「ものする」は「行く」の代用である。このように、「ものす(る)」は様々な動詞の臚化表現として用いられる。このような動詞を代動詞と呼ぶことがある。」（小田勝『実例詳解 古典文法総覧』2015：56、和泉書院）

つまり、「ものす(る)」の歴史においては、自動詞用法が減少する一方、他動詞用法が拡大している変化が見られる。このように、第二章では、「ものす(る)」における本動詞用法の他動詞化について述べる。

第三章では、本動詞用法のうち、存在を表す「ものす(る)」の様相について検討する。第二章で述べるように、本動詞用法としての「ものす(る)」においては、自動詞用法が減少する一方、他動詞用法だけは現代日本語に至るまで残されている。その自動詞用法においては、移動を表すものと存在を表すものが中心であった。移動を表すものは近代にも用例が見られるが、存在を表すものは中世後期から用例が減少し、近世期以降ほぼ衰退する。その原因について先行論では、軍記物語で多用される「わたらせたまふ」と交替したとする見方もある(高橋(2010)³)。しかし、中世期には、中古期以来存在を表す「おはす・おはします」も多用される。そこで第三章では、中世における存在を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の用法を調査する。

第四章では、「ものす(る)」における補助動詞用法の消失について記述する。第二章に述べたように、補助動詞用法は、中古から中世までは多く見られるが、近世には減少し、近代以降には見られなくなる。一方、本動詞の「ものす(る)」と同じく移動を表す「行く」「来る」、また存在を表す「ある」「いる」は、本動詞として表す具体的な意味が抽象化し、アスペクトを表す機能的な語へ変化した。すなわち、「-ていく」「-てくる」「-てある」「-ている」などの補助動詞として、動詞連用形に後接する用法を発達させる。しかし「ものす(る)」は、現代語ではテ形接続の補助動詞用法を持っていない。第四章では、「ものす(る)」が持っていた補助動詞用法が失われた問題をめぐって、その過程がどのようなようであったかについて記述し、そのなくなった要因や条件を探る。

第五章では、本動詞用法・補助動詞用法を併せ、文体史の観点から「ものす(る)」の変化を見る。中古日本語の「ものす(る)」は、主に貴人の行動を中心に、様々な動作を代用する。中世においても、ほとんどの用例は、貴人の動作を表している。一方、近世の「ものす(る)」の用例は、「横領する、盗む」の意をぼかして隠語的な用法とし

³ 高橋良久(2010)「中世王朝物語」における存在詞「ものしたまふ」と存在詞「わたらせたまふ」『日本語学最前線』和泉書院, pp. 325-344.

て用いられる。しかし、現代日本語では、「ものす(る)」は「作る、完成する」のような、詩や文章などを作り上げるという意味で用いられるようになる。これらの用法は、それぞれの文体・ジャンルが異なっている。特に「ものす(る)」の用例は、軍記物語・狂言・キリシタン資料などに一切見られなかった。このような点に鑑みると、古代日本語から現代日本語にかけて、「ものす(る)」の意味変化が生じたのは、文体・ジャンルの制約に起因しているという見方から考察を行う。

最後に、終章として、「ものす(る)」における歴史的変化をまとめ、雅語の一語として現代語に保持されている様相を考察することで、雅語史研究の方法論に一つの示唆を与える。また、今後の課題を構想する。

第一章 雅語に関する研究と「ものす(る)」の記述

1. 「雅」という意識の成り立ち

そもそも「雅語」とはどのような概念であろうか。まずこの点について検討したい。吉澤(1927)によると、言語資料の上で「俗」という文字が最初に見えるのは8世紀初めの『常陸国風土記』⁴であるという。一方、明示的に「雅」の意識が捉えられる早い例は、『日本語学大辞典』「雅語」の項目によれば、「8世紀末」である。「8世紀末の藤原浜成『歌経標式』に、歌体の分類に「雅体有十」として「雅」の意識に及ぶ例が挙げられる」という。また、この「雅」は、中国詩学からの影響と考えられ、『詩経』序における「雅者正也」に連なる、正統で正しいことばと解釈できるとされる。

しかし、この頃は雅語と俗語の意識が明確であったとは言い難い。雅語と俗語という意識が明確になったのは、近世からであるという(足立(1977)、金水(2007))。金水(2007)によれば、平安時代は言文一途だったが、その後言文二途の状態になる。また、近世は言文二途の終着点に位置し、そこから雅と俗、時代物と世話物といった対立概念が意識されるようになったという(金水 2007 : 9)。『日本語学大辞典』「雅語」の項目(執筆者：木村義之)によれば、近世には、雅と俗の概念が普遍的になり、古典・文語に用いられる語(雅語)と現実に用いられる口語(俗語)との差が明確に意識され、雅語と俗語の研究が盛んになって、議論が深まっているという。代表的な考察として、『雅言集覧』『俚言集覧』『倭訓栞』『雅語訳解』などのような、雅語と俗語という意識が書名にも明確に表れた文献群が挙げられている。また、湯浅(1991a)によると、近世期には、雅語について、上代語と平安時代以降の語を区別する考え方が生まれたという。

2. 「雅語」の定義と範囲

では、改めて日本語史上「雅語」とはどのような概念であったか考えたい。湯浅(1991a)によれば、「雅俗」の概念は、資料や研究者により異なっているという。また、馬淵・出雲(1999)では、「雅語」は「雅言」ともいうとされている。馬淵・出雲(1999)は、「雅語」は中世以前の用例が知られていないが、「雅言」という語は中世には『玉

⁴ 「荒賊 俗曰阿良夫流爾斯母乃」や「海苔 俗曰乃理」などが用いられる。

塵抄』に用例が見られるとする(「唐ニハ目ノミエヌ者ニ詞書雅言ノコトヲ曲ニ入テウタワシムルソ」〈玉塵抄、巻五〉)。また、『日本語学大辞典』の「雅語」の項目によれば、江戸時代の用語としては、「雅語」と「雅言」の両方が併存していたが、使用頻度から見ると、「雅言」の方がよく使われていたようである。明治期も「雅言」の方が優勢であり、ヘボンの『和英語林集成』第二版(明治五年〈一八七二〉)には、「GA-GEN, 雅言(tadashii kotoba), Correct, genteel or classical language」とある。項目として「雅言」を立て、〈正しい言葉〉と解している。近世における「雅語」と「雅言」に関する研究資料でも、「雅言」という語を使用する資料の方が優勢である。それは、これらの資料は「ものす(る)」のような一つ一つの単語だけではなく、「ものの心へもどる」(『詞葉新雅』)や「ものゆえに」(『雅言解』)のような句以上の定型表現も項目とされているためである。

では、現代において「雅語」はどのように定義、説明されているだろうか。『日本語学大辞典』における「雅語」の項目(執筆者:木村義之)では、「「俗語」と対立的に捉えられる語で、多く文芸的で優美な語をさす。」と述べられている。『日本国語大辞典』では「雅言」での立項があり、「正しくよいことば。優美なことば。洗練されたことば。特に中古の和歌や仮名文などに用いられることば。雅語。」と述べられている。さらに、『日本語学研究事典』における「雅語」の項目(執筆者:内田宗一)では、「雅語」を「古語のうち、歌や雅文などの場で用いうる、雅で洗練された語のこと。雅言とも。日常の口語を意味する「俗語」と対になるもの。原則として和語、特に中古の和歌や仮名文学作品に使用される語を指している場合が多い。」と説明している。これらの辞書記述から見ると、「雅語」は「洗練された語、特に中古の和歌や仮名文学作品に用いられる語」という考え方が一般的である。以上を踏まえて、本研究は「ものす(る)」に関して、「雅言」ではなく、全般に「雅語」という用語で表す。

では、いつごろまでの語が「雅語」の範囲になり、またどのような作品の語が「雅語」とされるのだろうか。これもさまざまな立場がある。先に見たように、「雅語」「雅言」は、近世期に最も自覚的に把握された枠組みであった。まずは近世期における「雅語」「雅言」の範囲を、古典籍の記述から確認する必要があるだろう。

そこで筆者は、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」と「国立国会図書館デジタルコレクション」を用い、「全項目」で「雅言」「雅語」をキーワードとして検索した。結果 77 件が得られた。以下のように示す。

- ・『東雅』〈語学〉新井白石著、享保二年(1717)成立
- ・『雅語解』〈辞書〉著者不明、延宝九年(1681)成立
- ・『雅言俗語翬檜』〈俳諧〉吾山著、安永八年(1779)刊
- ・『詞葉新雅』〈辞書〉富士谷御杖論定、寛政四年(1792)成立
- ・『雅言玉蔓』〈歌学〉加藤景範著、寛政十年(1798)刊
- ・『医事雅言』〈医学〉黒田玄鶴著、成立年不詳
- ・『一斎雅言』〈漢学〉佐藤一斎著、成立年不詳
- ・『一斎先生雅言』〈漢学〉村士玉水著、成立年不詳
- ・『雅言』〈儒学〉佐藤一斎著、成立年不詳
- ・『雅言』〈語学〉著者・成立年不詳
- ・『雅言』〈語彙〉著者・成立年不詳
- ・『雅言伊呂波分』〈語学〉著者・成立年不詳
- ・『欣々雅話』〈噺本〉欣々先生作/魯道序、寛政十一年(1799)刊
- ・『雅言仮字格』〈語彙〉市岡猛彦著、文化四年(1807)刊
- ・『雅言仮字格』〈語彙〉をき園の玉秋著、成立年不詳
- ・『芝翫帖』〈歌舞伎〉別書名『賞賛雅言』『賞讚雅詞』、浜松歌国編、文化十一年(1814)刊
- ・『璃寛帖』〈演劇〉角書『賞賛雅言』、暁鐘成著、文化十二年(1815)刊
- ・『論語雅言』〈漢籍〉董增齡撰、文化十二年(1815)撰
- ・『雅語音声考』〈語学〉鈴木胤著、文化十三年(1816)刊
- ・『希雅』〈語学〉鈴木胤著、文化十三年(1816)刊
- ・『雅語訳解大成』〈辞書〉別書名『雅語訳解并拾遺』鈴木胤編/村上忠順拾遺、文政三年(1820)序
- ・『雅語訳解』〈辞書〉鈴木胤著、文政四年(1821)刊
- ・『古調梯』〈歌学〉別書名『雅言梯』、鶴峯戊申著、文政六年(1823)成立
- ・『雅言集覧』〈辞書〉石川雅望集/関豊脩補、「い」～「か」6冊は文政九年(1826)刊、「よ」～「な」3冊は嘉永二年(1849)刊、以下未刊、写本で伝来する
- ・『雅俗幼学新書』〈語学〉森楓齋編、文政十年(1827)成立
- ・『雅言集覧増補并続編』〈辞書〉保田光則著、天保十～文久三年(1839～1863)成立
- ・『雅言撮要集』〈語学〉源三千嘉著、天保四年(1833)序

- ・『源語雅言解』〈辞書〉別書名『雅語纂解』『源語纂解』、菅原種文著、天保五年(1834)
自序
- ・『雅言成法』〈語学〉鹿持雅澄著、天保六年(1835)自跋
- ・『雅言童諭』〈辞書〉足代弘訓著、成立年不詳
- ・『雅言童諭』〈辞書〉河崎清厚著、天保六年(1835)成立
- ・『雅俗対覧』〈辞書〉斎藤彦磨著、天保八年(1837)成立
- ・『雅言通載抄』〈語学〉城戸千楯抄、天保十三年(1842)自序、文久元年(1861)刊
- ・『雅語俗解』〈辞書〉足代弘訓著、天保十四年(1843)成立
- ・『雅言用文章』〈往来物〉黒沢翁満著、嘉永二年(1849)序
- ・『雅語訳解拾遺』〈辞書〉村上忠順編、安政五年(1858)編者序
- ・『雅言俗解』〈語学〉荒木田興平著、安政五年(1858)序
- ・『雅言俗解』〈語学〉別書名『源氏物語雅言俗解』著者・成立年不詳
- ・『雅言うひなまび』〈語学〉熊谷千邦著、慶応元年(1865)序
- ・『雅言解』〈語学〉鈴木重嶺編、明治十二年(1879)成立
- ・『増補雅言集覧』〈辞書〉石川雅望集/中島広足補、明治二十年(1887)刊 57 冊、明治
三十六～三十七年(1903～1904)刊 3 冊
- ・『雅言集覧増補』〈辞書〉萩原広道著、成立年不詳
- ・『雅言集覧目』〈辞書〉著者・成立年不詳
- ・『雅言解雜稿』〈語学〉足代弘訓著、成立年不詳
- ・『雅言考』〈語学〉小山田与清著、成立年不詳
- ・『雅言考』〈語学〉橋守部著、成立年不詳
- ・『雅言広諭』〈語学〉足代弘訓著、成立年不詳
- ・『雅言集』〈語学〉茜部相嘉著、成立年不詳
- ・『雅言集』〈語学〉奥野昌綱著、成立年不詳
- ・『雅言抄』〈動物〉小野職博著、成立年不詳
- ・『雅言示蒙』〈語学〉福田美楯著、成立年不詳
- ・『雅言清濁』〈語学〉鶴峯戊申著、成立年不詳
- ・『雅言註解』〈語学〉著者・成立年不詳
- ・『雅言通載』〈辞書〉榎並隆璉著、成立年不詳
- ・『雅言提綱』〈辞書〉賀川秀益著、成立年不詳

- ・『雅言摘要解』中村尚輔著、成立年不詳
- ・『雅言の覚書』著者・成立年不詳
- ・『雅言栞』〈辞書〉吉川忠行著、成立年不詳
- ・『雅言拔萃』〈語彙〉著者・成立年不詳
- ・『雅言備忘』〈語彙〉福田美楯編、成立年不詳
- ・『雅言訳注』〈語彙〉著者・成立年不詳
- ・『雅言類聚』〈辞書〉中島広足著、成立年不詳
- ・『源氏類語』〈注釈〉別書名『雅言類語注釈』、足代弘訓著、成立年不詳
- ・『樞堂雅言』〈医学〉箕作阮甫著、成立年不詳
- ・『芥家雅言』〈教育〉著者・成立年不詳
- ・『菁莪雅言』〈漢学〉落合東堤著、成立年不詳
- ・『桐菴雅言』〈医学〉井上玄軾著、成立年不詳
- ・『備前雅言一覽』〈辞書〉正宗雅敦著、成立年不詳
- ・『寛居雅言襍纂』〈語学〉足代弘訓著、成立年不詳
- ・『雅語集説』〈語学〉井上淑蔭編、成立年不詳
- ・『雅語俗解』〈辞書〉荒木田久守著、成立年不詳
- ・『雅語綴字例』〈語学〉辰巳重英著、成立年不詳
- ・『雅語便覧』〈辞書〉江沢述明著、成立年不詳
- ・『雅語訳解』〈語学〉足代弘訓著、成立年不詳
- ・『要句雅語篇』〈天台〉亮英著、成立年不詳
- ・『雅言小解』〈辞書〉佐々木弘綱編、明治十二年(1879)出版
- ・『雅言畧解』〈辞書〉臼井憲成編、明治十三年(1880)序

ここから医学・工芸・動物などのジャンルを除き、画像を検索できる語学資料を選定して調査した。結果として調査対象となったのは、表1に示す20件の資料である。それぞれの序文や凡例から「雅語」の範囲と定義を見る。表1には、調査した資料およびその著者、刊行年、対象とした雅語/雅言の範囲と「ものす(る)」の用例の有無を示す。

表1 「雅語」における資料

資料名	著者	刊行/成立年	範囲	「ものす(る)」 の有無
① 東雅	新井白石	1717 成	古語、歌語 中心	×
② 詞葉新雅	富士谷御杖	1792 刊	和歌中心	×
③ 雅言玉蔓	加藤景範	1798 刊	和歌中心	×
④ 雅言仮字格	市岡猛彦	1807 刊	古書中心	×
⑤ 雅語音声考	鈴木胤	1816 刊	古書、和歌、 仮名文学作品 全般	×
⑥ 希雅	鈴木胤	1816 刊	漢籍	×
⑦ 雅語訳解	鈴木胤	1820 刊	仮名文学作品 中心	○
⑧ 雅言集覧	石川雅望	「い」～「か」1826 刊 「よ」～「な」1849 刊	仮名文学作品 中心	○
⑨ 雅俗幼学新書	森楓斎	1827 成	漢語	×
⑩ 雅言撮要集	源三千嘉	1833 序	和歌中心	×
⑪ 源語雅言解	菅原種文	1834 序	源氏物語	×
⑫ 雅言童諭	河崎清厚	1835 成	不明	×
⑬ 雅俗対覧	斎藤彦麿	1837 成	和歌中心	×
⑭ 雅語訳解拾遺	村上忠順	1858 編	仮名文学作品 中心	×
⑮ 雅俗通載抄	城戸千楯	1861 刊	古書、和歌、 漢籍	×
⑯ 雅言解	鈴木重嶺	1879 成	和歌中心	×
⑰ 雅語集説	井上淑蔭	不詳	和歌中心	×
⑱ 雅言小解	佐々木弘綱	1879 版	和歌、仮名文 学作品	○

⑱ 雅言畧解	臼井憲成	1880 序	古書、和歌、 仮名文学作品、 漢籍全般	○
⑳ 増補雅言集覧	石川雅望集 中島広足補	前 57 冊 1887 刊 後 3 冊 1903～1904 刊	仮名文学作品 中心	○

2.1 調査した雅言/雅語資料の様相

① 『東雅』

『東雅』は、江戸時代の語源辞書であり(杉本 1999)、凡例の「尔雅之書始ふ釋言称訓あり東方上世之言」という文言からは、中国の『爾雅』を参考にしたものであることが分かる。「雅語」については明確に規定されていないが、総論で(1)のように述べられている。

- (1) 天下之言には古言あり今言あり其古言の間におゐてまた其方言あり方言の中に亦をの / \ 雅言あり俗言あり(中略)古もまた中土東南西北の人のごとき其人には雅なるあり俗なるあり大やうはよき人のいふ所は雅言ありいやしきがいふ所は俗言にあらざるものすくなし(略)

このうち「古言」と「今言」については、「古言とは、太古より近古に至るまで、其世々の人のいひし所の語言なり。今言とは、今世の人いふ所の語言也。」と位置づけている。杉本(1999)では、『東雅』は「(1)時代をしること——歴史的考察と、(2)方言をしること——地域的考察、(1)・(2)を通じて(3)雅・俗語の別あること、この三つが研究の基本であることを語っている」という(杉本 1999: 369)。また、『東雅』の「雅語」の範囲は明確に定められていないが、総論で「旧事記、古事記、日本紀、姓氏録、古語拾遺、風土記等に古語を積せしめたり。其余万葉集をはじめて、代々の歌詞を積せし諸家の説、またすくなからず」と述べられ、引用参照した文献が数多くあること、上代文献も含まれていることがわかる。なお、『東雅』には「ものす(る)」が収録されていない。

② 『詞葉新雅』

『詞葉新雅』は「表現のための辞書である」(建部 1964: 32)といわれる。表紙裏に(2)の記述があることから、和歌や和文を作る時の参考用書と考えられる。また、対象

とした言葉に関して、冒頭の「おおむね」に述べられている(3)。その出典とする資料は幅広く、「雅」としての「詞葉」はこれらの資料から集めていることがわかる。内容は俗語をいろは順に並べ、それぞれに相当する雅語を示すものである。「ものす(る)」は見当たらない。

(2) 此書は和歌和文連歌俳諧等に趣向はたちながら詞心のまゝにいひかねたる時その俗語の頭字につきて部分の下を求むへし和歌和文の詞を委しく考てあてたり

(3) 詞は。万葉集。古今。後撰。拾遺をもととし。後々の集の詞をも。おもひえたるままとつたへられ。猶三十六人集。六帖。その外物かたりは。土佐日記。うつほ。源氏枕草子。かけろふ。さころも。さらしななどにとれり。又古事記。日本紀。古語拾遺。遊仙窟等をもてこれを補へり。

③ 『雅言玉蔓』

『雅言玉蔓』は歌学の雅言集であり、序文と本文から「古事記、日本紀、万葉集、三代の集、古今六帖、後撰和歌集」などの資料から雅言を選び出すことが分かる。「ものす(る)」は立項されていない。

④ 『雅言仮字格』

『雅言仮字格』は歴史的仮名遣いの辞書である。凡例に(4)のように述べられ、この辞書は『和字正濫抄』に基づく立場であり、『古言梯』を補訂したものであることが分かる。

(4) 仮名遣いの書ハ契沖法師の和字正濫抄、楫取魚彦か古言梯、此二つの書をおきてハ外になし。ただし初ひ学ひのためにハ古言梯のかた、詞なども多くて、たよりよきを、猶もれたるもおほく、まれ / \ にはあやまれるも見ゆめれば、此書ハそをおぎなひただせるなり

序文と凡例では「雅語」の定義と範囲について言及されておらず、「ものす(る)」の立項もなされていない。ただし序文本文には「ものす(る)」の用例(5)が見られる点が興味深い。

(5) 古言梯にはこらくに古言の証を物しなど此書にはぶきつはたあらたにくはへたる詞どもことく

⑤ 『雅語音声考』

『雅語音声考』は音象徴に起源を持つ和語の実例を説いたものであり(坪井 1979 : 127)、凡例から、語を「鳥獸虫ノ声ヲウツセル言」「人ノコエヲウツセル言」「万物ノ声ヲウツセル言」「万ノ形有様意シワザヲウツセル言」という四種に分けて説明することが分かる。対象とした和語は、万葉集、古今集、俳諧歌、日本書紀、催馬楽、古今著聞集、源氏物語、枕草子などから選んだ語であり、中には語に対して「雅俗ノ不同アルナリ」などの説明も見られる。また本文には本居大平・平田篤胤・伴信友・石川雅望・植松有信らの補説が加えられている。「ものす(る)」は載せられていない。音象徴に起源を持つという条件に合わないためと考えられる。

⑥ 『希雅』

上記の『雅語音声考』は音象徴に起源を持つ和語の実例を説明したものであるが、著者の鈴木胤は音象徴起源の語は万国共通にあるものと考えたとされている(坪井 1979 : 127)。この鈴木胤の考えを踏まえて作られた『希雅』は、漢語の起源について具体的に示そうとしたものである(坪井 1979 : 127)。序文に「此皆ハ漢語ノ音声ノ考ナリ。(中略)雅ハ尔雅ノ雅ニ本ヅキテ。」という記述がある。また、漢籍の「論語、史記、孟子、莊子」などから取り上げた語について説明されている。「ものす(る)」の立項は見られない。

⑦ 『雅語訳解』

『雅語訳解』は雅語を俗語で訳する雅俗対訳の資料である。その「凡例」⁵では、以下のように述べている。

- (6) 今の世の俚言(サトビゴト)は俗語なり。古今集以来の歌、又は詞書の語、又は物語ぶみなどの、今の世に耳なれぬ詞、或は詞は同じけれども、意ばえの異なるなどハ、雅語なり。万葉集以上、古き祝詞の類、又古事記書紀にある、尋常(ヨノツネ)の雅語よりも、猶耳遠き詞は古語なり。是は古学の諸先師の注釈

⁵ 「凡例」の翻刻は、引用した底本『名古屋叢書三編/名古屋市蓬左文庫編』第15巻『雅語訳解』(凡例 : 226)に従う。

によりて、古語訳解といふものを別に著ハすべし。今あげたる雅語の中には、此古語のかはらぬもあり、又は同じ詞ながら意の転りたる、或は文字ごゑ異国語(カラコトバ)のまじりたるなど、古語より見れば、まことハ当時の俗語なれども、今よりミれば雅語ともいひつべし。

『雅語訳解』の凡例によれば、鈴木胤は、上代語を「古語」、古今集以後の語を「雅語」としている。標題の「訳」については、「此雅語を今の俗語にあつるをいふなり」とし、つまりその当時の俗語で雅語を解釈することを標榜する。湯浅(1991b)は、この鈴木胤『雅語訳解』の掲出語について出典を調査し、その「雅語」の範囲が『源氏物語』を中心とすること、一部訓点語を含む『古事記』『日本書紀』『万葉集』の語から、『古今著聞集』『宇治拾遺物語』『増鏡』など中世文献も出典となっていることを明らかにした。本研究の調査範囲内では「ものす(る)」が立項されている最初期の文献である。

⑧ 『雅言集覧』

『雅言集覧』は雅語とその例を多く集めた辞書である。凡例では以下のように述べられている。

- (7) 此書に出しつる雅言どもは、延喜よりこのかた、歌にも用ゐなれたる詞どもなり、ちかき世となりて、あやしく耳なれざる詞どもをとりまじへて、文などつとる人あれど、さるはいみじきひがこどなれば、ことにはさやうのたぐひはうちらぶきて、用ふべきかぎりの詞をのみ、とり出てしるしつけれ

凡例から見ると、『雅言集覧』は、「雅語」を延喜(901～923年)以来の歌や文章に用い慣れた詞とされている。『雅言集覧』における用例は「和歌用例」と「それ以外」に大別できるという(平井(2019))。『雅言集覧』における用例の挙げ方を詳細に観察した平井(2019)は、『雅言集覧』の編纂方針を「『源氏物語』の分析をもとにした辞書作り」と位置づけ、『源氏物語』の用例を含む項目で追加されたその他の用例は、「全て語義解釈を助けるものであるとも言える」(平井2019:74)と言っている。

一方で、平井(2019)により、『雅言集覧』における「雅語」の範囲は、中古の仮名文学作品における用語だけではなく、上代や中世の文献の用例も含まれていることがわかる。『雅言集覧』で取り上げられた「雅語」はいろは順に配列されているが、「な」以降未刊のため、「ものす(る)」の立項は確認できない。ただし、「ものす(る)」の記

述は『増補雅言集覧』で確認することができる。後述するように『増補雅言集覧』では、写本で伝来した項目について〔補〕の字がつかないが、新たに加えられた項目については〔補〕の字がつけられている。『増補雅言集覧』の「ものす(る)」の項目に〔補〕の標示が付いていないため、原本には立項されていると考えられる。

⑨ 『雅俗幼学新書』

『雅俗幼学新書』は1830年代成立の、童蒙のために編集された辞書である。序文に、「以漢字充我之事物厥惟艱哉及節用集者出能合彼我為一」とあり、『日本語学研究事典』の『雅俗幼学新書』項目(執筆者：前田富祺)では、「節用集と漢和辞書とを合わせたような形のものである」とされている。語彙を「天地、時候、神佛、官位、名字、人物、身體、衣服、飲食、器財、動物、植物、数量、言語」という十四部門に分け、いろは順に並べて語義・用字などを説明している。「雅語」の定義と範囲については言及がなく、「ものす(る)」の立項は見られない。

⑩ 『雅言撮要集』

『雅言撮要集』は、凡例がない。序文にも「雅語」の定義や範囲などの説明がない。ただし、「歌」の雅言を抜き出して簡単に説明するものであることが分っている。五十音順に語句を配列し、時に万葉集・日本紀・梁塵秘抄・和名抄・日本靈異記などでの用例使用を説明する。「ものす(る)」は載せられていない。

⑪ 『源語雅言解』

『源語雅言解』は源氏物語を中心とした「雅言」の辞書である。いろは順に雅言を配列し、俗語で説明する。収録されている「雅言」は一つ一つの単語ではなく、「物になきすがた」のような句であり、「ものす(る)」も項目として見当たらない。

⑫ 『雅言童諭』

『雅言童諭』はいろは順に、平仮名で雅語を取り上げ、見出し語の下に片仮名の俗語で説明を載せる辞書である。「いと」のような二言(二音節語)から「いきもつぎあへず」のような八言(八音節の句)まで収録し解説する。「雅語」の定義と範囲については言及がなく、「ものす(る)」の立項もないが、序文に「ものす(る)」の用例が見ら

れる。

- (8) 清厚もとよりふかく心して物せし書ならねばもれたるも遠ひたるも多かりな
ん

⑬ 『雅俗対覧』

『雅俗対覧』は雅語と俗語を対照させた簡便な辞書である。「凡例」には「概ねは上に雅言をあげ下に俗言をおきて中に字をあてつる」とあり、五十音順で上段は雅語、中段は漢字の当て字、下段は俗語という形で並んでいる。この文献では「雅語」は主に歌から取られる語であり、「ものす(る)」が立項されていない。

⑭ 『雅語訳解拾遺』

『雅語訳解拾遺』は鈴木胤の『雅語訳解』を村上忠順が補ったものである。『雅語訳解』と同じように、いろは順に語を配列する。収録されている語は『雅語訳解』と重なる部分もあるが、主に『雅語訳解』に載せていない語が取り上げられている。「ものす(る)」の立項はない。

⑮ 『雅俗通載抄』

『雅俗通載抄』は、榎並隆璉の『雅俗通載』を底本とし、それを抄出・改編し、挿頭・装・脚結の三部四巻とした雅俗用字集である(『日本語学研究事典』・『雅俗通載抄』項目、執筆者：佐藤貴裕)。序文の後に「原書雅言通載引書目」には次のように底本の出典が挙げられている。「ものす(る)」は立項されていない。

- (9) 古事記、日本書紀、續日本紀、日本後紀、日本逸史、続日本後紀、文徳實録、三代實録、舊事記、類聚國史、今集解、日本紀畧、古語拾遺、倭姫世記、内外儀式帳、姓氏録、律、令、格、儀式、内裡式、延喜式、諸國風土記、日本靈異記、西官記、北山抄、江家次第、佛足石歌、神樂、催馬樂、風俗歌、竟宴歌、遊仙窟、新撰字鏡、和名抄、和名本草、菅家万葉、文選、五經古訓、康頼本草和名、大同類聚方、醫心方、神遺方、心醫方、朝野群載、江談抄、東鑑、將門記、新猿樂記、釋日本紀、白氏文集、本朝文粹、史記、漢書、玉篇、真名伊勢物語、梁塵抄、體源抄、秋萩帖、古事談、扶桑畧記、中右記、紀式系圖

⑩ 『雅言解』

『雅言解』は「中世(ナカムカシ)」の詞をむねとし、中に万葉集の類を加え、いろは順に並べて、それぞれを俗言で解釈する資料である。出典は、凡例により知ることができる(10)のようなものがある。項目に「ものす(る)」は見当たらない。

- (10) 萬葉集以下撰集其外の歌集どもハ、古今集ハ古、新古今集ハ新、古長歌ハ長、旋頭歌ハ旋とし、家集ハ貫之躬恒など名をしるせり、伊勢大和狭衣の類一字又二字をしるす、源氏物語は巻との名桐壺箒木などしるしぬ

⑪ 『雅語集説』

『雅語集説』は語学書であり、序文と凡例がなく、語の配列順は不規則である。本文の内容から見ると、古事記、万葉集、袖中抄、後撰集、古今集、和名抄、八雲御抄などを用いて、語について解説していることがわかる。歌の雅語を中心としたものとする。

⑫ 『雅言小解』

『雅言小解』では凡例等において雅語の定義はされていないが、雅語の範囲について、序文に次のようにある。

- (11) 古き詞ハ、わきかたきか多きを、佐々木翁の著はされし、古言小解ハ、古事記 日本紀 萬葉集 祝詞のわきかたきを、つはらに詞をさとされ、又雅言小解は、八代集 歌仙家集 源氏 枕草子などを見るかたへにおきて

『雅語小解』では、雅語を平仮名で示し、解釈としての俗語は片仮名で示す。「ものす(る)」が立項されている。

⑬ 『雅言畧解』

『雅言畧解』の冒頭の、凡例・序文にあたる「ゆえよし」によれば、この資料は(12)のような目的で作られている。よく見られる雅語を簡単に説明する資料である。

- (12) おのれ、はやくより歌の書などをみるうち、痴鈍の心に意得かてなる詞をこれかれぬき、書置つるを、老てハ物わすれがちにて、そを尋ぬるにわかかきしものながら、とみにも見いてす、いといとま入わさなれば、こたひ五十音

尔わかち、常ある詞どもをも集へみやすくせむとて、物せるなり

雅語の出典は明記されていないが、本文の中には、「万葉集、日本紀、和訓栞、和名抄、本草和名、源氏物語、史記」などが見られ、和歌、仮名文学作品から漢籍まで、幅広い資料が使われている。「ものす(る)」が立項されている。序言には、(12)を含め、2例「ものす(る)」の使用が見られる(13)。

(13) 常ある詞の洩たるか多きは、跡より拾遺に物すべくなむ

② 『増補雅言集覧』

『増補雅言集覧』は中島廣足が石川雅望の『雅言集覧』の内容を補ったものである。『増補雅言集覧』の凡例は『雅言集覧』の凡例を翻刻したものであり、その後ろに(14)が付け加えられている。

(14) 原書に揚たる詞の中、もれたるを補ひたるは、其所の首に補の字をおき、またあらたに増加へたる詞には、二重の畫をもてましますしとす

前述のように、「ものす(る)」に関しては「補」の字がないため、もとの『雅言集覧』の写本における「ものす(る)」の内容が収載されていると考えられる。

2.2 まとめ

以上のように、雅言/雅語に関する語学資料を概観した。多くの資料では雅語について明確な定義がなされていない。また、一部の資料(『東雅』『雅俗通載抄』『雅言畧解』など)では、出典引用書として、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『漢書』などが挙げられ、「雅語」と「古語」の範囲が重なっていることがわかる。先行研究で指摘される通り、「雅語」は「俗語」と対立する概念である一方、その内実は漢籍の雅言・歌語・古語にわたっている。

また、多くの資料では「ものす(る)」が立項されていない。その原因を追究すると、一部の資料が漢籍の雅言/雅語を中心とした資料であることが挙げられる。「ものす(る)」は漢文体で記述される作品には用例が見られないため、漢籍の雅言/雅語を中心とした資料には収録されにくかったのだろう。この点について第五章で詳しく述べるが、漢籍の雅言/雅語が主眼にある場合、「ものす(る)」は立項されないと考えられる。

また一方、多くの資料が和歌を中心としたものであったこと、さらに、一つ一つの単語ではなく、定型句を対象とする資料であったことも、「ものす(る)」が収録されなかった要因の一つであると考えられる。「ものす(る)」は和歌における用例が一切ないことから歌語とはいえない。また、「語」であって、定型句ではない。そのため、和歌の雅言/雅語を主に取り上げる資料、文語を操る際に必要な定型句を念頭に置いた資料には確認できないわけである。しかし、本文の中で「ものす(る)」が項目として収録していない資料においても、序文の中では著者自身あるいは序の執筆者が「ものす(る)」を運用している例が複数見られる（(5)『雅言仮名格』、(8)『雅言童諭』、(12) (13)『雅言畧解』）。この点は、「ものす(る)」が近世～近代にかけての文語において継承されていたことの証左であり、大いに注目しておきたい。

3. 「ものす(る)」に関する記述

以下ではさらに、「ものす(る)」を立項している資料の個々の記述を確認する。

① 鈴木胤『雅語訳解』（1821 刊）

- ものす 何スル。何と定め言はずして、前後の事体にて、人のおのずから心得らるゝ事也。但し国によりてハ、今にても物といふ也。

② 石川雅望『雅言集覧』（「い」より「か」にいたる」は 1826 刊、「よ」より「な」にいたる」は 1849 刊）（記述は『増補雅言集覧』による）

- ものす 常に畧していふ詞の

〔源、東屋、六〕 なみ / \ の人にも物し給はねば

〔同、十三〕 扱かの北のかたにはかくと物しつや

〔同、六〕 親など物し給はぬ人なれば

〔同、七〕 形心をすぐれて物し給ふこと

〔同、九〕 誠に北の方の御腹に物し給へど守の殿の御娘にはおはせず

〔同、夕顔、四〕 おこたりがたく物せらるゝを云々 世をはなるゝさまに 物し給へば

〔同、五〕 思ふべき人々の打すてゝ物し給ひにけるなごりはぐくむ人あまたあるやうなりしかど

〔同、卅二〕 例ならぬ御こゝちの物せさせ給ふことや侍つらん

〔同、桐壺、十七〕宮づかへの本意ふかく 物したりしよろこびはかひあるさまに
とこそおもひわたりつれ

〔同、帚木、卅二〕これはたらず又さし過たることなく物し給ひけるかなと

〔同、夕顔、卅〕何かしのあざりそこに物するほどならばこゝにくべきよしのび
ていへ

〔同、蓬生、十五〕いとゞねをのみたけきことにて物し給ふ

〔同、橋姫、初〕年頃ふるに御子もものし給はで

〔同、寄木、七十三〕かしこのしんでんどうになすべきことあざりにものしつけて
侍にき

③ 臼井憲成『雅言畧解』（1880 序）

○ものする 物 するハ^{スル}為也

④ 佐々木弘綱『雅言小解』（1881 版）

○物する 何スル コシラヘル ツクル ユク

『雅語訳解』と『雅語畧解』では、「ものす(る)」の意味記述が「する」もしくは「何する」に留まっている。しかし、刊行年を見る限り、調査範囲内では鈴木胤『雅語訳解』が「ものす(る)」を雅語と位置づける最初の資料であることがわかる。後に刊行された『雅言集覧』に影響を与えた可能性について先行研究には述べられていない。しかし、『雅語訳解』の本文では、「雅語」を訳するにあたって出典の引用とともに、「本居翁云」「鈴屋翁云」「石川雅望云」などの注記が見られることから、当時の国学者の間で、雅語に関して学問的な交流があったことが窺える。

「ものす(る)」に対してまとまった記述が見られるのは、石川雅望『雅言集覧』のみである。解説は少ないが、具体的な用例が多く挙げられ、その使用の実態が示されている。『日本語学研究辞典』では『雅言集覧』を以下のように評価している。

- (15) その豊富な用例と出典を詳しく示している点から、現在でも古語研究の上で欠くことのできない文献である。(中略)文脈的意味に即して挙げられている豊富な用例の故に、本書は近代以降の日本語辞書に大きな影響を与えた。(執筆者：犬飼守薫)

『雅言小解』では、「何スル」以外に、「コシラヘル」「ツクル」「ユク」のような具体的な動作を表す動詞に置き換えた解説がなされており注目できる。第二章で述べるように、近世以降の「ものす(る)」の用例は、具体的な動作を達成する、何らかの結果物を得るという本動詞用法に収斂する。『雅言小解』の記述は、この近世の様相を反映している可能性があると考ええる。

では、「何スル」と記述される「ものす(る)」の代動詞用法は、どのようなものだろうか。「ものす(る)」が代用する動作には具体的にどのような動作があるのか、どのような語でもよいのであろうか、それとも何らかの特徴を持っているのだろうか。また、『雅言集覧』において「常に畧していふ」とされる略されるものとは何だろうか。それらを明らかにする必要があると考ええる。まず、この点について、第二章で検討する。

参考文献

- 足立巻一(1977)「雅言と俗言との葛藤-江戸期言語思想展開の一側面」『言語生活』309, pp20-30
- 金水敏(2007)「言と文の日本語史」『文学 隔月刊』08-06, pp2-12
- 杉本つとむ(1999)「第六章 語源辞書、『東雅』の研究」『杉本つとむ著作選集』6、7 「辞書・事典の研究」八坂書房, pp359-408
- 高橋良久(2010)「中世王朝物語」における存在詞「ものしたまふ」と存在詞「わたらせたまふ」『日本語学最前線』和泉書院, pp. 325-344
- 建部一男(1964)「『詞葉新雅』における里言と雅言」『論究日本文学 宮嶋弘教授追悼号』22, pp32-44
- 平井吾門(2019)「『雅言集覧』の散文用例試論」『近代語研究』21, pp159-177
- 馬淵和夫、出雲朝子(2007)『国語学史 日本人の言語研究の歴史』新装版, 笠間書院
- 湯浅茂雄(1988)「雅俗対訳辞書類の俗語の性格-鈴木胤『雅語訳解』を資料として-」『国語語彙史の研究』9, pp151-178
- 湯浅茂雄(1991a)「国語資料としての『雅語訳解』」『文莫』16, pp1-16
- 湯浅茂雄(1991b)「雅俗対訳資料と語彙研究-『雅語訳解』『古言訳解』を資料として-」『日本近代語研究』1, pp335-354
- 吉澤義則(1927)「雅俗語識別の時期」『国語国文の研究』pp81-88

辞書類

- 『日本国語大辞典』第二版(2000), 小学館
『日本語学大辞典』(2018)日本語学会編, 東京堂出版
『日本語学研究事典』(2007)飛田良文主編, 明治書院
『国語学研究事典』(1977)佐藤喜代治編, 明治書院

雅語資料底本

- 『東雅』新井白石[著], 享保二年(1717)成, 杉本つとむ編著, 早稲田大学出版(1994),
影印・翻刻
『詞葉新雅』富士谷御杖[論定], 寛政四年(1792)刊, 国文学研究資料館蔵, 翻刻画像
データ
『雅言玉蔓』加藤景範[著], 寛政十年(1798)刊, 八戸市立図書館蔵, 国文学研究資料
館翻刻画像データ
『雅言仮字格』市岡猛彦[著], 文化四年(1807)刊, 国文学研究資料館蔵, 翻刻画像デ
ータ
『雅語音声考』鈴木胤[著], 文化十三年(1816)刊, 広島大学図書館蔵, 国文学研究資
料館翻刻画像データ
『言語四種論 雅語音声考; 希雅』鈴木胤[著], 勉誠社(1978)
『雅語訳解』(1986)鈴木胤[著], 『名古屋叢書三編/名古屋市蓬左文庫編』第15巻,
名古屋市教育委員会
『雅言集覧』石川雅望[著]、関豊脩[補], 「い」～「か」6冊は文政九年(1826)刊、
「よ」～「な」3冊は嘉永二年(1849)刊, 国文学研究資料館蔵, 翻刻画像データ
『雅俗幼学新書』森楓斎[編], 安政二年(1855)刊, 国文学研究資料館蔵, 翻刻画像デ
ータ
『雅言撮要集』源三千嘉[著], 天保四年(1833)序, 広島大学図書館蔵, 国文学研究資
料館翻刻画像データ
『源語雅言解』菅原種文[著], 天保五年(1834)序, 国文学研究資料館蔵, 翻刻画像デ
ータ
『雅言童諭』河崎清厚[著], 天保六年(1835)成, 国文学研究資料館蔵, 翻刻画像デー

タ

『雅俗対覧』斎藤彦磨 [著], 天保八年(1837)成, 国文学研究資料館蔵, 翻刻画像データ

『雅語訳解拾遺』村上忠順 [編], 安政五年(1858)序, 国文学研究資料館蔵, 翻刻画像データ

『雅俗通載抄』城戸千楯 [著], 文久一年(1861)刊, 国文学研究資料館蔵, 翻刻画像データ

『雅言解』鈴木重嶺 [編], 明治十二年(1879)成, 八戸市立図書館蔵, 国文学研究資料館翻刻画像データ

『雅語集説』井上淑蔭 [編], 成立年不詳, 筑波大学図書館蔵, 国文学研究資料館翻刻画像データ

『雅言小解』佐々木弘綱 [編], 明治十二年(1879)版, 国立国会図書館蔵, 翻刻画像データ

『雅言畧解』臼井憲成 [著], 明治十三年(1880)序, 国立国会図書館蔵, 翻刻画像データ

『増補雅言集覧』石川雅望 [著]; 中島廣足 [補], 1965年刊, 臨川書店

『和英語林集成』第二版, J. C. ヘボン [著], 1872年版, 国立国会図書館蔵, 翻刻画像データ

第二章 「ものす(る)」における本動詞用法と他動詞化

1. はじめに

古代日本語の「ものす(る)」は、本動詞用法と補助動詞用法を持つ(東辻(1960))。筆者の調査でも、「ものす(る)」の本動詞用法は中古と中世では補助動詞用法より多く使用されるが、それほどの優勢を得られなかったことが確かめられる。しかし近世に入ると、本動詞用法の割合が顕著に増え、近世後期以降にはほぼ本動詞用法だけが残るようになる。その数値の推移を表1に示す。

表1 「ものす(る)」における本動詞用法と補助動詞用法の用例変化

	本動詞	補助動詞	計
中古	589(67.2%)	288(32.8%)	877
中世前期	316(55.8%)	250(44.2%)	566
中世後期	73(61.3%)	46(38.7%)	119
近世前期	48(87.3%)	7(12.7%)	55
近世後期	158(96.9%)	5(3.1%)	163
近代以降	120(97.6%)	3(2.4%)	123

本動詞用法としての「ものす(る)」は、(1)のような、独立動詞としてある動作を代用する場合と、(2)のような、複合動詞の後項と考えられる場合がある(呉 2019)。補助動詞用法としての「ものす(る)」は、補助動詞「-あり」に相当し、述語の連用形に接続する。例えば、(3)は、「ものす(る)」が名詞述語(断定辞ナリ)の連用形句「侍従に」に後接し、「まだ侍従でいらっしやったころ」を意味する。また、補助動詞用法の「ものす(る)」は、(3)のような「-ものしたまふ」の形で、補助動詞「-あり」の尊敬語としても中古で多用されている(中村 1995、金水 2006、小田 2015)。

- (1) 「何もあらむ物賜へ」と言ひにやりたれば、(略)「(略)この焼米は露といふらむ人にもものしたまへ」と言へり。(落窪物語：34)
- (2) 「(略)このごろもあやしき小家に隠るへものしたまふめるも心苦しく、(略)」と聞こゆ。(源氏物語/東屋：86)
- (3) 左兵衛の督の君、侍従にものしたまひけるころ、(大和物語：317)

(1)は、「ものす(る)」が出現する前文脈に、具体的な語句「物賜へ」があり、「もの

す(る)」の意味が「賜う」と規定されるものである(東辻(1960))。(2)の「ものす(る)」は、動作主が動作をした後、その場にじっと留まっていることから、「ものす(る)」が「ある」の代用をしていると考えられる。この二つの用法は、先行研究において、どちらも中古の仮名文学で多用されるとの指摘がある。しかし、中世以降の使用状況については、先行研究では論じられておらず、明らかになっていない。本章では、(1)と(2)のような「ものす(る)」の本動詞用法を、自動詞用法と他動詞用法に分けて時代別に検討する。(3)のような補助動詞用法とその変化は第四章に述べる。

2. 先行研究と問題の所在

松延(1957)は、まず平安時代の物語・日記・随筆の「ものす(る)」を観察し、どのような意味に用いられているのかにより用例を自動詞と他動詞に分け、用例数全体に対する割合を示している。それによれば、中古では、「ものす(る)」の本動詞用法のうち、60%以上の用例が自動詞として使われるという。松延(1957)は中古の「ものす(る)」に関する最初期の記述的研究として注目できる。特に自動詞か他動詞かに注目した先行研究としては唯一の研究である。しかし松延(1957)では自動詞・他動詞の使用傾向や、分類基準などは明示されていない。そこで本研究では、分類基準を明確にして調査を行う。結果を先取りすれば、本章の調査でも、松延(1957)が述べる通り、中古の「ものす(る)」は、自動詞相当の用例が多いことが確認できる。ただし、中世以降の様相についての観察は、管見の限り見当たらない。

3. 自動詞・他動詞の分類基準

本稿では、自他動詞の分類に関しては客観的な指標に従って「項(必須の補語)」の数で判定する。主語に相当する一項のみ取る場合「自動詞」、主語と目的語(直接目的語・間接目的語)を含む二項以上を取る場合、他動詞とする。

自動詞の項名詞句には、動作主であれ、対象物であれ、動作の主体が現れる。「ものす(る)」の用例を見ると、古代日本語では、自動詞用法は大きく「移動を表すもの」、「存在を表すもの」、「その他の意を表すもの」(「懐妊する」「生まれる」「なる」など)に分けられる。

一方、他動詞としての用例が代用する動作は目的語により多種多様でありうるが、古代語では特に、文脈上「言う」や「思う」などに相当する例が大多数を占める。こ

れらは、他動性が弱い動作を表す動詞である。本研究ではまず、この点に注目する。

「他動性」というのは、ある動作において「参加者が二人(動作者と動作の対象)又はそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。(動作者と対象は無生物の場合もある。従って、二人でなく、二つの場合もある。)」(角田 2009 : 77)という動詞の性質の1つである。「他動性」には、動作主の意志性や、対象物に及ぶ変化の有無(強弱)によって、高低がある。角田(2009)は、「見る」「見える」や「聞く」「聞こえる」など、知覚の動詞の場合には、厳密に言えば、何の動作もないとした上で、「何かに向かって行くとしたら、それは、知覚の刺激である。視覚の場合は光であり、聴覚の場合は音波である」(角田 2009 : 68)と指摘している。従って、他動詞の代用として使われているとしても、具体的な動作があるとは限らない。「言う」「思う」といった他動詞に相当する中古の「ものす(る)」の他動詞用法は、このような、他動性の弱い例に限られることになる。

しかし近代以降では「作品をものする」や「小説をものする」のような用例に限られるようになる。「ものす(る)」はどのように現在の様相に辿り着いたのか、本章は「ものす(る)」を自動詞・他動詞に分けた上で、どのような文脈で用いられるかという観点からさらに分類し、それぞれの特性について考察する。

なお、中古・中世において「～ヲ+「ものす(る)」」のように直接目的語が明示される用例は非常に少なく、格表示と補語だけでは自動詞か他動詞か判断しにくい場合が多い。そこで本章は使用資料の解釈、注釈等を参照し、意味の観点も考慮して「ものす(る)」を自動詞か他動詞かに分類する。他動詞的な動き、または他動詞の代用と思われるものについては、直接・間接目的語という観点から「ものす(る)」がどのように変化していくのかを検討するが、他動性という性質の面にも留意して観察していく。

まず全体的な様相を概観する⁶。表2に、本動詞を対象とした各時代の自動詞の用例数と他動詞の用例数を示す。中世までは自動詞用法が、近世以降は他動詞用法が多いことがわかる。この自動詞中心から他動詞偏重へという変化はどのようにしてもたらされたものだろうか。他動詞用法はどのように多くなったのだろうか。また、自動詞用法のうち、どのような類が残ったのだろうか。

結論を先取りすれば、筆者の調査では、近世から他動性が強い他動詞用法が現われ、

⁶ 調査資料は本章末尾の「使用テキスト」「デジタル資料」を参照されたい。

用例数も多くなる。他動詞相当の用例の割合の増大は、他動性という性質の変化として捉えることができる。自動詞用法の変化に関しても、動作の内実や文脈にどのような特徴があるか留意して観察していく。

表2 「ものす(る)」における自動詞と他動詞の用例分布

時代	自動詞	他動詞	計
中古	397(67.4%)	192(32.6%)	589
中世前期	271(85.8%)	45(14.2%)	316
中世後期	53(72.6%)	20(27.4%)	73
近世前期	5(10.4%)	43(89.6%)	48
近世後期	27(17.1%)	131(82.9%)	158
近代以降	5(4.2%)	115(95.8%)	120
計	758	546	1304

4 調査結果

4.1 中古の様相⁷

4.1.1 自動詞の場合

前節で示した分類基準に基づき、「ものす(る)」の用例中、自動詞相当の用法と判定できる用例は、古代日本語では、大きく「移動を表すもの」、「存在を表すもの」、「その他の意を表すもの」(「懐妊する」「生まれる」「なる」など)に分けられる。中古の自動詞として使用される「ものす(る)」の用例の意味を考察した結果、397例のうち、移動の意を表すものが189例、存在の意を表すものが158例、その他の意を表すものが50例であった。その他の意を表すものは「なる」「結婚する」などの意を表している。

4.1.1.1 移動の意を表す「ものす(る)」

影山(2001)によれば、移動動詞には主に「有方向移動動詞」と「移動様態動詞」の2種類がある。

⁷ 中古の用例採取は、国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン2022.10, 中納言バージョン2.7.0, 最終閲覧日2022年10月10日)、Japan Knowledge Lib(「新編日本古典文学全集」個別検索)、国文学研究資料館(日本古典文学大系本文データベース)を使用し、観察を行った。

「有方向移動動詞」は、「何らかの方向性を固有に備えている」、また、それ自体で有界的な起点または着点を持っているかどうかによって、「有界的な有方向移動動詞」と「非有界的な有方向移動動詞」に分けられると言う(影山 2001 : 47)。

「移動様態動詞」は、「移動に伴う様態(または手段)を固有に表すと考えられる動詞」であり、「それ自体では非有界的であり、起点・着点を明示しない限り、いつまでも継続可能な移動を表す」(影山 2001 : 47)。

本章では、移動の意を表す「ものす(る)」を「有方向移動動詞」と「移動様態動詞」に分けた上で、移動の目的地に到着したか否かについて考察する。

先に移動を表す「ものす(る)」の用例分布を表 3 に示す。

表 3 中古期移動の意を表す「ものす(る)」の種類及び用例数と割合

種類	有方向移動	移動様態	計
到達	143(75.7%)		143
未到達	25(13.2%)		25
非到達	21(11.1%)		21
計	189		189

表 3 に示したように、移動を表す「ものす(る)」の用例は、全て「有方向移動」すなわち何らかの方向に向かう意を備えており、その方向に向かって移動することを表す。「移動様態」を表す「ものす(る)」の用例は見当たらない。まずこの点は「ものす(る)」の移動の特徴を反映していると考えられる。

表 3 では、「有方向移動」のうち、目的地に到達したことが文脈上明らかなものを「到達」、到着したかどうか文脈に明示されていないものを「未到達」、何らかの理由で目的地への移動が適わないもの(「ものす(る)」が否定形や不可能形である場合)を「非到達」と分類した。

①「到達」類

目的地へ「到達」したことを表す用例は 143 例(75.7%)ある。(4)は、道綱母の叔母が京より道綱母の家に来た場面である。「ものす(る)」は助動詞「たり」と共に用いられ、移動動作主の叔母が「移動してきて〈今・ここ〉に存在している」⁸という意を表す。移動し目的地へ到着した用例である。

⁸ 小田(2015 : 139)。

(4) 京より、叔母などおぼしき人ものしたり。

(蜻蛉日記/中：233)

②「未到達」類

「未到達」の移動を表す「ものす(る)」は25例(13.2%)ある。(5)は、後文脈の「女いにけり」のところから動作主の女が移動の動作を伴っているとわかる。しかし、目的地「世界」に到着したかどうかは文脈に明示されていない。

(5) 「(略)世界にもものしたまふとも、忘れで消息したまへ。おのれもさなむ思ふ」

といひけり。(略)さて女いにけり。

(大和物語：295)

③「非到達」類

目的地への「非到達」を表す用例は21例(11.1%)である。主に、「ものす(る)」が否定形や不可能形となっている類である。そのうち、11例は動作主が「行く意志」を持っているが、何らかの原因で移動が適わない用例である(6a)。残りの10例のうち6例は動作主が「行かない意志」を表している用例である(6b)。(6a)は、兼家が道綱母のところを宵から行きたいと思っていたが、行くことができなかったと言っている場面である。後文脈は「昔なら馬に乗ってでも来た」という反実仮想を表している。(6b)は、兼家が山寺にいる道綱母を迎えに行く場面である。兼家は自分が行ったのではだめだと思うので、行く気はないと述べている。果たして、道綱母は寺から下りなかった。

(6)a 「宵よりまゐり来まほしうてありつるを、をのこどもも、みなまかり出にければ、えものせで、昔ならましかば、馬にはひ乗りてもものしなまし、なでふ身にかあらむ、(略)」など心ざしありげにありけり。(蜻蛉日記/下：290)

b おのがものせむには、と思へば、えものせず。

(蜻蛉日記/中：238)

上に記した移動を表す「ものす(る)」の用例を見ると、すべての用例が目的地を伴う「有方向移動」であるという点、またそれだけでなく、移動の結果、目的地に到着した「到達」の用例が多い(189例中143例)という点が注目できる。このことから、「ものす(る)」は「達成」という意味的な性質を持つ語と考える。

例えば次のような用例も見られる。(7a)は、道綱母が唐崎に行く場面である。唐崎へ行く道は遠いということを繰り返し述べている。また、途中で馬を休めたり、弁当

を食べたりしてようやく唐崎に着いたことについて述べている。(7b)は祖母大宮が住んでいる所へ夕霧が移動した場面である。大宮が、「大きな木の枝が折れる音もするし、殿の瓦も残らずに吹き飛んでしまうぐらいの激しい風なのに、よくもここに来た」と感心する場面である。このように、移動を表す「ものす(る)」には困難を乗り越えて目的地に辿り着くなどの意味合いも多く含まれ、「達成」という意味的性質を持っていると考えられる。

(7) a 唐崎へとてもものす。(略)行先多かるに、大津のいとものむつかしき屋どもの中に、引き入りにけり。(略)しばし馬ども休めむとて、清水といふところに、かれと見やられたるほどに、(略)「ここにて御破子待ちつけむ。かの崎はまだいと遠かめり」と言ふほどに、(略)さて、車かけて、その崎にさしいたり、

(蜻蛉日記/中：193-195)

b (大宮)「大きな木の枝などの折るる音もいとうたてあり、殿の瓦さへ残るまじく吹き散らすに、かくてもものしたまへること」と

(源氏物語/野分：268)

4. 1. 1. 2 存在の意を表す「ものす(る)」

次に、本節では存在を表す「ものす(る)」について述べる。金水(2006)によれば、存在表現は、大きく「空間的存在文」と「限量的存在文」に分けられる。

「空間的存在文」は、場所と対象を項として取る二項述語を構成する(表層に場所名詞が現れていない場合には、省略されていることになる)。物理的な時間・空間を対象が占有するという特徴を持つ。

「限量的存在文」は、一項述語で構成され、場所名詞句が不要に見えるもの、あるいは想定しにくいものが多い、という特徴を持つ。

この区分に従って、まず、その用例数と割合を表4に示す。存在を表す「ものす(る)」は全158例が採取できる。

表4 中古期存在を表す「ものす(る)」の用例数と割合

種類	空間的存在文	限量的存在文	計
	78(49.4%)	80(50.6%)	158

①「空間的存在文」

「空間的存在文」には、(8a)のような「所在文」や(8b)のような「生死文」などの

種類がある⁹。(8a)は、「こぼれたる家」という場所名詞句が見え、存在の動作主がその家に存在していることがわかる。(8b)は、右近が、「もし夕顔がまだ生きているなら、明石にも負けない寵愛を受けるだろう」と思う場面である。

(8) a こぼれたる家にて、いといたくもりけり。「雨のいたく降りしかば、えまゐらずなりにき。さるところにいかにものしたまへる」といへりければ、
(大和物語：298)

b 心よくかいひそめたるものに女君も思したれど、心の中には、故君ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし、
(源氏物語/玉鬘：87)

② 「限量的存在文」

「限量的存在文」には、(9a)のような「部分集合文」や、(9b)のような「所有文」などがある¹⁰。(9a)は、玉鬘に思いを寄せる人々が大勢いることを表すものである。名詞句「聞こえたまふ人」という部分集合が設定され、「ものす(る)」はその集合の要素についての有無多少を述べている。(9b)の「ものす(る)」は「思うこと」が存在するという意を表す。

(9) a 聞こえたまふ人、いとあまたものしたまふ。 (源氏物語/胡蝶：174)
b (致仕の大臣)「しばしはさても見たまはで。おのづから思ふところものせららんものを。(略)」とのたまはせて、 (源氏物語/夕霧：486)

存在を表す「ものす(る)」を観察すると、中古の段階では「限量的存在文」と「空間的存在文」はそれほど差がない。存在の結果が存続し、所有対象(物)となっている「限量的存在文」に相当する例が「空間的存在文」と同程度見られるということを確認しておく。存在を表す「ものす(る)」の中世以降の様相は第三章で詳しく述べる。

4. 1. 1. 3 その他の意を表す「ものす(る)」

自動詞としての「ものす(る)」において、移動と存在以外の意を表す用例は 50 例ある。うち 41 例は「なる」「懐妊する」などの無意志的自動詞に相当し、9 例は「結婚する」「会う」「仕える」などの意志的自動詞に相当する。(10a)の「ものす(る)」は

⁹ 金水(2006)による分類である。存在文における具体的な分類は第三章に述べる。

¹⁰ 注9と同様である。

「なる・就く」の意を表す。(10b)は北の方が、少将に縁談の辞退を勧める場面である。「なものしたまひそ」は「結婚しなさるな」という禁止の意を表す。

(10) a 「(略)かく申せば、男君の大臣近くものしたまふを申すとぞ思すらむ。(略)」
とぞ言ふ。 (蜻蛉日記/下:278)

b 北の方、「いであなにく。人あまた持たるは、嘆き負ふなり。身も苦しげなり。なものしたまひそ。(略)」とて、 (落窪物語:148)

4. 1. 1. 4 自動詞としての「ものす(る)」についての考察

ここまで4.1.1節に示したことから、中古の自動詞としての「ものす(る)」のには、以下の特徴があることが窺える。

- ① 移動を表す「ものす(る)」を見ると、全ての用例が有方向的な移動を表すものであり、移動の結果が含意される例(「到達」)が75.7%を占める。また遠い場所へ移動したり困難を乗り越えて移動したりすることから、「ものす(る)」は「辿り着く」という意味合いが強く、「達成」という性質を持つといえる。
- ② 存在を表す「ものす(る)」を見ると、「空間的存在文」と「限量的存在文」に相当する例が同程度に多い。「限量的存在文」では、存在の結果が存続し、所有対象(物)となっている点が特徴的である。
- ③ 移動と存在以外の意を表す「ものす(る)」(その他の意)の用例を見ると、中古には、意志的動作より、無意志的動作に相当するものが多い。

4. 1. 2 他動詞の場合

中古の他動詞としての「ものす(る)」は192例ある。目的語の種類により用例を分類した結果を、表5に示す。

表5 中古期他動詞としての「ものす(る)」の目的語とそれに対応する「ものす(る)」の意味と用例数

目的語		「ものす(る)」の意味と用例数 (192例)
日常生活関係	こと、もの、車、焼米、御衣、破子、消息、文など	「する」「食べる」「書く」「作る」 など(97例)

口頭伝達・心理 活動関係	「(話)」、「(手紙)」、 「(歌)」、「(思考内容)」など	「言う」「伝える」「思う」 「詠む」など(76例)
人	皇女、重き病者、使ひなど	「寵愛する」「見舞う」など(15例)
明示されない		(文脈により)「出産する」など(4例)

日常生活関係の目的語を取る用例は97例である。目的語により、「ものす(る)」は様々な意味を表すことができる。(11a)は、直接目的語「魚など」を取り、「ものす(る)」は「食べる」という意で使われる。(11b)は、「表紙、紐などいみじうせさせたまふ/草子ども」が動作の対象であるが、「ものす(る)」はそれを目的語として明示しておらず、動作の受け手(兵部卿宮、左衛門督など)という間接目的語を取る。この場合の「ものす(る)」は「頼む」という意を表す。

- (11) a からく催して、「魚などものせよ」とて、 (蜻蛉日記/中：240)
 b まだ書かぬ草子ども作り加へて、表紙、紐などいみじうせさせたまふ。(源氏)「兵部卿宮、左衛門督などにものせん。(略)」と、
 (源氏物語/梅枝：417)

口頭伝達・心理活動に関する用例は76例ある。そのうち、32例は(12a)のように、具体的な発話・歌・心内文の内容を引用し、「ものす(る)」は「言う・話す」「詠む」「思う」などの意を表す。残りの44例は(12b)のように、(格表示がある場合とない場合があるが)「ものす(る)」が歌を詠むという意味として用いられている例である。

- (12) a 「ここに住みたまひし人は、いまだおはすや。『山人に物聞こえむと言ふ人あり』とものせよ」と言へば、 (堤中納言物語：388)
 b 紫の薄様なりけり。墨、心とどめて押し磨り、筆のさきうち見つつ、こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。されど、あやしく定まりて、憎き口つきこそものしたまへ。(源氏物語/野分：283)

このように、中古における「ものす(る)」の他動詞としての用例を見ると、他動詞と言っても、「言う」「思う」など、伝達動詞・思考動詞という他動性が弱い他動詞に相当する用例が多い。目に見える対象物の状態・位置変化が明確でなく、頭の中で思考内容が生起する、または言葉・伝達内容が位置変化する(移動し、伝達される)用例である。ヲ格名詞句を伴う「ものす(る)」の場合、「○○を思う」「言葉を発する」

という意味での用例はあるが、対象ヲ格を持ち、状態・位置変化を表す典型的な他動詞や、「AをBにV」という直接目的語・間接目的語を備えた他動詞の用法はまだ顕著に現われていない。また、「食べる」の意の「ものす(る)」も食物に及ぼす変化というよりも、動作主の動作そのものに主眼があると言える。動作対象に何らかの影響や変化を及ぼす用例は認められないと言ってよい。

4. 2 中世の様相¹¹

4. 2. 1 自動詞の場合

4. 2. 1. 1 移動を表す「ものす(る)」

本節では、中世における移動を表す「ものす(る)」について考察する。調査・分類は中古と同じ方法で行う。表6に移動を表す「ものす(る)」の種類と用例数を示す。

表6 中世期移動を表す「ものす(る)」の種類及び用例数と割合

種類	中世前期 70 例		中世後期 24 例		計
	有方向移動	移動様態	有方向移動	移動様態	
到達	48(68.6%)		20(83.3%)		68(72.3%)
未到達	16(22.9%)		3(12.5%)		19(20.2%)
非到達	6(8.6%)		1(4.2)		7(7.4%)
計	70		24		94

中世期における移動を表す「ものす(る)」は94例が採取できた。そのうち、中世前期が70例、中世後期は24例である。「移動様態」の用例は中古と同じように見当たらない。また、「到達」の用例は70%以上を占める。「非到達」に関しては、用例採取に用いた資料が少ないため、中世後期に「なくなる」とまでは断言できないが、減少しているのは確かである。また、移動を表す類そのものの顕著な衰退も、中世期の「ものす(る)」が示す重要な様相である。

「有方向移動」としての「ものす(る)」は中古と同じように、何らかの方向に向けて移動し到着したという意を含意する用例の割合が高い。(13a)は、関白が白河院から後涼殿の尚侍の伝言を聞き、急いで後涼殿へ向かって到着した場面である。(13b)

¹¹ 中世の用例採取は、国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン2022.10, 中納言バージョン2.7.0, 最終閲覧日2022年10月10日)、Japan Knowledge Lib(「新編日本古典文学全集」個別検索)、国文学研究資料館(日本古典文学大系本文データベース)、『中世王朝物語全集』(笠間書院)を使用し、観察を行った。

は、姫君の世話役が二月に大弐の北の方になって、近々筑紫へ行くという場面である。文脈には明示されていないが、いずれは目的地に到着するということがわかる内容の用例である。

(13)a (白河院)「後涼殿の尚侍の、聞こゆべきことなんあるを、(略)」とばかりありければ、いかなることにかと思して、急ぎものし給へるに、かの伏見の人のことをぞ、
(いはでしのぶ/巻二:149)

b 「このあなたにもものしたまふ姫君の御後見は、如月の頃ほひより、大弐の北の方になりて、近きほどに筑紫へものせんと出で立ちたまふを、(略)」
とて、
(八重葎:76)

このように、中世期における移動を表す「ものす(る)」は中古と同じように、「達成」という特徴を持っている。注目したいのは、(14)のようなものである。(14)の「ものす(る)」は、呉(2019)が述べるところの、複合動詞の後項として働き、「-来」に相当する例である。このような例が9例見られた。「ものす(る)」の目的地は明示されないが、「この世」という目的地が想定できる。その目的地に到着したという点で「達成」という意味合いが読み取れる。また、世継ぎとなったという点で「結果」も伴っていると言える。

(14) この爲定のはらから、中宮に宣旨にて候ふも、うへの例めかし給ひて、若宣
いでものし給へり。
(増鏡:723)

4. 2. 1. 2 存在を表す「ものす(る)」

存在を表す「ものす(る)」の用例は184例が採取できた。全体的に「限量的存在文」の割合が、「空間的存在文」より多くなっている。表7に中世期における存在を表す「ものす(る)」の用例数と割合を示す。

表7 中世期存在を表す「ものす(る)」の用例数と割合

種類	中世前期	中世後期	計
空間的存在文	66	19	85(46.2%)
限量的存在文	86	13	99(53.8%)
計	152	32	184

①「空間的存在文」

「空間的存在文」の用例は、いずれも場所名詞句を伴う、あるいは場所が想定できる。(15a)は、「伊勢」という場所名詞が見えることから、存在の動作主が長年伊勢に存在していることがわかる。(15b)は、右大將が、母である故前齋院のお墓に参り、「もし母君がこの世に生きているであれば」などと思う場面である。場所名詞句は「この世に」である。

(15a) 伊勢にも年ごろものし給ひしは、院のまことの御子にこそおはしけむに、
(我が身にたどる姫君/下：96)

b まいて、かの母院の御山をさして参り給ひつつ、(略)「さすが、この世にもものし給はんを見捨てては、憂しとても、ひたすらそむきやらざらまし」と思ふは、
(いはでしのぶ：342)

②「限量的存在文」

(16a)は、中將が「今までそのようなことを知っているはずの人もいかなかった」と思う場面である。名詞句「今までさること知るべき人」という部分集合が設定され、「ものす(る)」はその集合の要素について有無多少を述べている。(16b)は、承香殿という人が、故式部卿宮の娘の女御であり、帝からの寵愛も重々しく深く、女宮二人を持っていることを表す。「ものす(る)」は「女宮二所」が存在するという意を表す。「結果(物)を伴う」という「ものす(る)」の性質の表れとみておきたい。

(16a) (中將)「北の方の聞き思さんこともいかが。つつまじう。今までさること知るべき人もものせられぬを」と思す。
(しら露/下：233)

b またそのころ、承香殿と聞こゆるは、故式部卿宮の女御ぞかし。御おぼえも重き方浅からぬが、女宮二所ものし給ふ。
(風に紅葉/上：25)

4. 2. 1. 3 その他の意を表す「ものす(る)」

その他の意を表す 46 例のうち、「なる」「懐妊する」などの無意志的自動詞に相当する用例が 25 例、「就く」「結婚する」などの意志的自動詞に相当する用例が 9 例見られる。中古と同じように無意志的自動詞に相当する例が多いが、注目すべき点は、「懐妊する」「結婚する」という「結果(物)」が伴う用例が 18 例に上る点である。特に「懐妊する」の意を表す用例は 8 例見られる。(17)は、世継がない大將殿が諸山諸寺で祈祷をしていた折に、内侍の督の君が懐妊したという場面である。「ものす(る)」

は「懐妊する」意として用いられる。

- (17) 儲けの君おはしまさぬころにて、山々寺々御祈りあるころ、かくものし給へば、限りなくおぼし喜びたり。大将殿も、男宮にておはしまさんを、今より面ただしくおぼすべし。 (とりかへばや：282)

4. 2. 2 他動詞の場合

中世期他動詞としての「ものす(る)」は65例見出された。具体的な目的語を表8に示す。

表8 中世期他動詞としての「ものす(る)」の目的語

目的語		「ものす(る)」の意味と用例数(65例)
日常生活関係	事、御料、鯉、御葬送、車、装束、法服、消息など	「用意する」「食べる」「差し上げる」など(30例)
口頭伝達・心理活動関係	もの、ことなど	「考える」「言う」など(11例)
人	中納言、子供、姫君など	「出産」「誘う」(10例)
明示されない		(文脈により)「する」など(14例)

(18)はヲ格を取る用例であり、目的語「御消息」が明示され、「ものす(る)」は「書く」「差し上げる」の意として使われる。このような他動性の高い動作を表す用例は僅かである。(19)は再び懐妊した女君が無事出産できるように殿が祈祷を始めた場面である。目的語が明示されていないが、文脈により「出産する」の意と判断できる。

- (18) 御消息をもものし聞こえまほしう思しわたりつつ、 (しら露/下：254)

- (19) いみじかりしことに懲りて、かねてより御心を尽くし、御祈りなどはじめ給ふ。思ふさまにたひらかにものし給はば、 (夜寝覚物語/巻五：371)

このように、中世も中古と同じく、他動性が弱い他動詞がほとんどである。ヲ格名詞句を伴う「ものす(る)」の場合は、「消息を差し上げる」「ことをなす」という意味であり、状態変化や位置変化は表されていない。「出産する」という状態変化がある用例が5例見られるが、動作対象も明示されず、解釈は文脈に依存する。主眼は動作主の動作にある。しかし「結果物」が伴うという特徴は、状態変化を表さない例と表す

例で共通して見られる。

4. 3 近世の様相¹²

4. 3. 1 自動詞の場合

自動詞としての「ものす(る)」の用例は32例見られた(前期5例、後期27例)。うち移動を表す用例は24例あり、19例は「到達」、4例は「未到達」の用例であり、1例は「非到達」の用例である。存在を表す「ものす(る)」は4例であり、それ以外の用例は3例で、「なる」などの変化の意であった。表9に示す。

表9 近世における自動詞としての「ものす(る)」の様相

移動を表す「ものす(る)」		存在を表す「ものす(る)」		その他	計
有方向移動	移動様態	空間的存在文	限量的存在文		
未到達	4	3	1	4	32
到達	19				
非到達	1				
計	24	3	1	4	

(20)は動作主が目的地の「江戸」に行って帰った例であり、移動の動作は完了している。(21)は、「空間的存在文」に相当する用例であるが、複合動詞の後項として「ゐる」の代用をしている。「立つ」は「来」「行く」にも「ゐる」にも前接する動詞であり、(21)の「ものす(る)」が「来」「行く」の意を表す可能性もある。しかし、動作主は弁天さまの前に立っており、動きがなく、じっとして願っていることが文脈から判断できるため、「ものす(る)」は「ゐる」の意を表すと考えられる。

(20) おのれ、江戸にものしけるとき、狂蝶子文麻呂がり、 (白癡物語：237)

(21) 私はいゝなづけのお方の為に、神さんへ願をかけ、弁天さまへ立ものして、男の手にもさはるまひ、三年の内は恋しひ人に、めぐり逢ても一所へは寄ますまいからどふぞして、尋ねあはしてくださいましと、誓ひをたてゝ深いねがひ。 (人情本/春色梅兒譽美：70)

¹² 近世の用例採取は、国立国語研究所(村山実和子ほか)編『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』(バージョン2022.10、中納言バージョン2.7.0、最終閲覧日2022年10月10日)、Japan Knowledge Lib(新編日本古典文学全集個別検索)、国文学研究資料館(日本古典文学大系本文データベース、新編大系本文データベース)、『叢書江戸文庫』(国書刊行会)を使用し、底本の『新編日本古典文学全集』(小学館)、旧版『日本古典文学大系』(岩波書店)、『新編大系』(東京堂出版)を対照しながら観察を行った。

4. 3. 2 他動詞の場合

他動詞としての「ものす(る)」は174例が採取された(前期43例、後期131例)。そのうち、動作が動作対象に及び、それに状態・位置変化が起こったものは53例あり、全用例の30.5%を占める。また、(22)のように、「AをBにV」という形の他動詞としての用法の確例が、近世以降現れることが確認できる。(22)は、「埋れ木」を掘り出し、「硯の箱」に作りかえるという目に見える状態・位置変化が起こる用例である。(23)は、動作対象の「少女の親」が「ものす(る)」という動作の影響を被るという、目に見える状態変化が起こるものである。いずれも他動性が非常に強い用例である。

(22) 多くの人夫して、名取河の水底を浚せ、とかくして埋れ木を掘りもとめて料紙、硯の箱にものし、
(近世俳文集：530)

(23) 「然ればこそあれ少女の親は、両眼片脚を傷られて、廢人になりしのみならず、田文の洞に露宿して、袖乞難て饑に迫るを、(略)」と詰るを成勝推禁めて、「(略)然までしうねくものせられしは、疑ふべく従ふべからず。(略)」と左右齊一諫れば、
(近世説美少年録(3)：347)

また、(24)(25)のような、「金銀」や「款冬花」(=小判または大判)などが直接目的語となって、「ものす(る)」が「盗む」や「手に入れる」の意として用いられる用例が15例見られる。しかも「盗む」「手に入れる」動作の結果として、実際に物が手に入った用例である。これらも他動性が強いといえる。

(24) 「今宵家内に潜入りて、咱はある涯りの金銀をものせん。(略)」俱に納戸に潜入りて、朱之介は那這と、撈りて財囊を引出し、
(近世説美少年録(3)：102)

(25) 「我は背門より潜入りて、阿爺が納戸に秘措ぬる、款冬花をものしてん(略)」元が間に。朱之介は、戸架の内なる小箆笥を、撈りて奪ふ財囊には、金二裏の重みあり。
(近世説美少年録(3)：88-91)

さらに、作品の序文あるいは跋文で、「本を作る」「作品を版木に刻む」などという意で使用される用法も16例見られる。(26)は作品を抜粋し、「桜木に物して、世に広

ふ」という目的を伴った用例である。このような「意志性」の高さは他動性の強さも表しているといえる。

- (26) その中にさる事也とおもふを撰み、山王の桜木に物して、世に広ふせんとや。
(会席嚙袋/序：320)

以上の近世の様相をまとめる。近世の自動詞としての「ものす(る)」の用例を見ると、中古から見られる移動を表す「ものす(る)」が割合を減らしながらも継続して見られる。その一方で、存在を表す「ものす(る)」は6例しか見られない。その原因については第三章で検討する。

「ものす(る)」の表す動作には中古以来、自動詞であれ、他動詞であれ、「結果(物)」を伴う用例が多い。本研究では「ものす(る)」が持つ、このような特性に着目する。

「結果物」は、「意志性」¹³や「他動性」を伴う動作によって生み出されやすい。中世後期から近世にかけて「他動性」と「意志性」が強くなっていることは、「結果物」を伴うという性質の強化と考えられる。「存在」を表す「ものす(る)」が見られなくなることにしても、この性質との関わりで考察していく余地がある。もちろん、「ものす(る)」自体の変化だけでなく、他の要因についても考え合わせていく必要がある。

近世の他動詞としての「ものす(る)」を見ると、中古・中世との大きな違いとして、他動性が強い用例が増えた点が挙げられる。また、中古・中世で多く見られる「言う」「書く」「思う」などの言語活動を表す用例より、「盗む」「手に入れる」「作る」など、意図性が強く、結果物を生じる動作によって、動作対象に何らかの変化や影響を与える用例が数多く見える。

4. 4 近代以降の様相¹⁴

4. 4. 1 自動詞の場合

近代以降の自動詞としての「ものす(る)」は5例見られ、いずれも擬古文で用いられている用例である。うち4例は移動を表すものである。例えば、(27)は場所名詞「佐倉」が到達地として提示されていることから、「有方向移動」を表していることがわか

¹³ 「意志性」は、「自分の意志で、その動作を行う」(角田 2009 : 86)性質のことである。

¹⁴ 近代以降の用例は、国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2022.10, 中納言バージョン 2.7.0, 最終閲覧日 2022年10月23日)、見出し語検索 NINJAL-LWP for BCCWJ、日本語用例検索・青空文庫所収文学作品を用いて採取した。

る。「ものす(る)」は「行く」「通う」の代用であると理解できる。残りの1例は存在を表すものであるが、『増鏡』の引用で(28)、厳密に言えば近代以降の用例ではない。

(27) 風まじり雨はふれどもちらぬかな紅葉はいまそ盛なるらん 佐倉に物する
道にて (太陽 1895-11)

(28) 当時の人の筆に成る“増鏡”にも、他の一女性について。——この大納言(藤原為世)の女、為子の君とて、坊(東宮)のおん時、かぎりなく思されたりし御腹に、一ノ御子(尊良)女三ノ御子(瓊子)、法親王(尊澄)など、あまたもの
し給ふと、見える。(『私本太平記』、1990)

4. 4. 2 他動詞の場合

他動詞としての「ものす(る)」は、115例採取できた。近代以降の全用例の95.8%を占める。そのうち、87例は動作が動作対象に及び、その動作対象に何らかの状態・位置変化が起こったものである。

近世から現れる作品の序文・跋文などでの用法は、(29)のように、近代以降の作品の補記・備考にも用いられ、9例見られる。(30)の「ものす(る)」は、「和歌」という直接目的語を取り、「ものす(る)」は「作る・書く」の意で用いられている。また、「短歌雑誌に投稿している」という結果を伴う。

(29) 編者「題言」によると、フランス訳司「ユウシンメルメットデカシュン」に邦語を教え、問答形式の本書をものす。」

(鮑庵十種 鉛筆紀聞(一)・補記 1869)

(30) お梶さまは和歌など物して短歌雑誌に投稿している人だから、オットリ奥さま然としているけれども、(略)。(坂口安吾・『不連続殺人事件』)

近代以降の他動詞としての「ものす(る)」は、90%以上の用例で直接目的語が示されていることから、他動性が強い用例がほとんどであると言える。また、(29)(30)のように、目的語が「書」「和歌」(その他には「小説」「詩」「芸術」「作品」なども見られる)のような、文芸作品に関するものであることが多く、「ものす(る)」は「書く」「作る」「作成する」などの意を表す。「書く」という意味で用いられる「ものす(る)」は中古・中世にも見られるが、近代期以降に特徴的な点は、動作が動作対象に及んでいることと、具体的な結果物があることである。

5. おわりに

「ものす(る)」の自動詞の使用傾向については、以下のようにまとめられる。

- ① 移動を表す場合は、移動して目的地に到着する予定がある、または到着した用例が多い。また、遠い所へ移動する・困難を乗り越えて移動する・移動ができなくても移動の意志を持っている場合に用いられている。以上の点から、移動を表す「ものす(る)」は「達成性」「意志性」という性質を持っているといえる。中古～中世前期に高い割合を示し、近代以降では擬古文を中心に存続する。
- ② 存在を表す場合は、特定の場所に人(物)が存在している意を表すより、対象(物)の存在を所有として表す傾向が見られる。中世後期以降、用例の減少が顕著である。
- ③ 「懐妊する」「生まれる」「結婚する」などの意としての「ものす(る)」は、中古中世において一定数の用例がある。「結果物がある」という特性において、他動詞用法と共通点を持つ。

また、「ものす(る)」の他動詞用法の拡大については、以下のようにまとめられる。

- ① 中古の「ものす(る)」には言いたいこと・話したいこと・思うことなどを目的語として取り、「言う」「思う」「詠む」などの意を表す。言葉や内容が移動していると捉えら、目に見える具体的なものの移動や状態変化は認められない。ヲ格を取る用例もあるが、他動詞的な対象物への作用が明確でなく、「AをBにV」という他動詞的な格表示が明確な用法はまだ現われない。このような他動詞は他動性が弱い、自動詞用法とも異なる。
- ② 中世も中古と同じように、他動性が弱い他動詞がほとんどである。ヲ格を伴う「ものす(る)」の場合は、「消息を差し上げる」「何らかの事柄を行う」という意味であり、状態変化や位置変化が顕著に表されていない。「出産する」という状態変化がある用例が見られるが、動作対象が明示されていない点で、主眼は動作主の動作にあるといえる。
- ③ 近世に入ると、「AをBにV」という他動詞の構造を備えた用例が現われ、「盗む」「手に入れる」「作る」のような、動作が動作対象に及んでおり、動作対象の状態・位置変化が見られる用例が増える。また「世に広ふ」などの意図を伴い、作品とする・版木に刻むなど、他動性が強い用例が増えている。

- ④ 近代以降になると、ほとんどの用例は「AをBにV」という直接目的語・間接目的語を備えた他動詞用法で使用されている。

まとめとして、「ものす(る)」の自動詞と他動詞及びその用法ごとの各時代にしめる割合を表10に示す。

表10 「ものす(る)」の自動詞と他動詞及びその用法ごとの用例数と各時代に占める割合

種類 時代	自動詞 758 例			他動詞 546 例		計
	移動	存在	その他	口頭伝達活動 心理活動	その他	
中古	189(32.1%)	158(26.8%)	50(8.5%)	76(12.9%)	116(19.7%)	589
中世前期	70(22.2%)	158(50%)	43(13.6%)	9(2.8%)	36(11.4%)	316
中世後期	24(32.9%)	25(34.2%)	4(5.5%)	2(2.7%)	18(24.7%)	73
近世前期	5(10.4%)			1(2.1%)	42(87.5%)	48
近世後期	19(12%)	4(2.5%)	4(2.5%)	5(3.2%)	126(79.7%)	158
近代以降	4(3.3%)	1(0.8%)		5(4.2%)	110(91.7%)	120
計	311	346	101	98	448	1304

「ものす(る)」は古くから自動詞用法も他動詞用法も見られるが、自動詞用法が次第に減少し、他動詞用法が増加するという変化が見える。また、他動詞としての「ものす(る)」は当初、意志性を持ちながらも、具体的な動きを伴わないという点で自動詞に近く、直接・間接目的語を取っても、他動性が弱い言語・心理活動を表すものが主であった。一方、時代が下ると、具体的なA,Bを直接・間接目的語として持つ「AをBにV」という他動詞用法の比重を高めていくという変化が見える。しかし、自動詞にせよ他動詞にせよ、「ものす(る)」の動作は「達成する」「結果物がある」という特性が伴うことは中古から近代以降まで一貫している。中古・中世において、移動を表す「ものす(る)」は、目的を持って移動し、辿り着くという結果を伴う用例が多く見られる。中古・中世期において他動詞として用いられる「ものす(る)」は「言う」「書く」などの他動性が弱い用例がほとんどだが、「言う」動作は「発話」という結果物を伴い、「書く」動作は「手紙」や「詩」などの結果物を伴っている。近世以降は他動性

が強い他動詞の用例が増え、動作が完遂した結果、目に見える/手が触れる結果物を伴っている。このような、「ものす(る)」の「達成する」「結果物がある」という特性には一貫性が見え、むしろ近世以降はさらに明確化・具体化すると言える。

なお、用例を観察すると、作品や文体によっても、「ものす(る)」の使用の偏りが見られる。例えば、和歌での使用が見られず、中古には物語類と日記類で多用されていることが、先行研究(近藤(1995)、中村(1995))でも指摘されている。また、筆者の調査では、中世にはほとんどの用例が王朝物語に現れ、擬古文や説話集などでの使用例も少数見られるが、軍記物語での使用が全くないことなども確認している。文体史という観点から「ものす(る)」の歴史的変化を見る必要もあると考え、この点については、第五章で詳しく述べる。

参考文献

- 小田勝(2015)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
- 角田太作(2009)『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語改訂版』くろしお出版
- 影山太郎(2001)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 近藤明日子(1995)「「ものす」攷」『学習院大学国語国文学会誌』(38), pp. 12-29
- 呉寧真(2019)「動詞連用形に後接する「ものす」」『国学院大学大学院紀要. 文学研究科』(50), pp. 19-33
- 中村幸弘(1995)『補助用言に関する研究』右文書院, pp. 37-49
- 東辻保和(1960)「「ものす」考」『論究日本文学』(12), pp. 28-35
- 松延国子(1957)「「ものす」について：平仲物語前後」『香椎瀉』(2), pp. 18-25

デジタル資料

- JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com/library/>)
- 国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2022. 10, 中納言バージョン 2. 7. 0)
- 全文検索システム『ひまわり』日本語用例検索・青空文庫所収文学作品
(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/>)

日本古典文学大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>)

噺本大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon>)

見出し語検索 NINJAL-LWP for BCCWJ (<http://nlb.ninjal.ac.jp/search>)

使用テキスト

【中古】『新編日本古典文学全集』(小学館)：竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記

【中世】『新編日本古典文学全集』(小学館)：宇治拾遺物語、徒然草、十訓抄／『日本古典文学大系』(旧版)(岩波書店)古今著聞集、御伽草子／『中世王朝物語全集』(笠間書院)：あきぎり・浅茅が露、海人の刈藻、いはでしのぶ、石清水物語、木幡の時雨・風につれなき、苔の衣、恋路ゆかしき大将・山路の露、小夜衣、しのびね・しら露、雲ににごる・住吉物語、とりかへばや、八重葎・別本八重葎、松浦宮物語・雲隠六帖、風に紅葉・むぐら、松陰中納言、夜寝覚物語、我が身にたどる姫君(上)・(下)、夢の通ひ路物語(上)・(下)、物語絵巻集／『水鏡大鏡今鏡増鏡』(国民文庫刊行會)／『續抄物資料集成』(清文堂)

【近世】『洒落本大成』(中央公論社)／『新編日本古典文学全集』(小学館)：好色一代男、好色一代女、好色五人女、男色大鑑、近世俳句集、松尾芭蕉集、近世俳文集、仮名草子集、東海道中膝栗毛、近世説美少年録、西山物語、雨月物語『日本古典文学大系』(旧版)(岩波書店)：芭蕉文集、歌舞伎脚本集、風来山人集、近世文学論集、川柳狂歌集、近世和歌集、浮世草子集、春色梅兒譽美、折たく柴の記、近世思想家文集、歌舞伎十八番集／『噺本大系』(東京堂出版)：昨日は今日の物語、狂哥咄、千里の翅、白癡物語、立春噺大集、戯言養気集、軽口筆彦噺、会席噺袋、宇喜蔵主古今咄揃、正直咄大鑑、軽口星鉄炮、あごの掛金、落噺懸鎖、杉楊子、初音草噺大鑑、臍が茶、新撰勸進話、臍の宿かえ、はなしのいけす、落噺常々草／『叢書江戸文庫』(国書刊行會)：漂流奇談集成、百物語怪談集成、前太平記(上)・(下)、前々太平記、都の錦集、伴藁蹊集、八文字屋集、馬場文耕集、佚斎樗山集、近松半二浄瑠璃集、江戸作者浄瑠璃集、仏教説話集成、近世紀行集成、山東京伝集、滑稽本集、式亭三馬集、文化二年十一月江戸三芝居顔見世狂言集、役者合巻集、中本型読本集、近世奇談集成、石川雅望集、浅井了意集、浮世草子時事小説集、森島中良集、馬琴草双紙集、浮世草子怪談

集、柳亭種彦合集、人情本集、小枝繁集、多田南嶺集、十返舎一九集、竹本座浄瑠璃集(一)・(二)・(三)、豊竹座浄瑠璃集(一)・(二)・(三)、只野真葛集、東海道名所記、原典落語集、福森久助脚本集、西沢一風集

第三章 中世における存在を表す「ものしたまふ」

—「おはす・おはします」「わたらせたまふ」と比較して

1. はじめに

第二章で述べたように、古代日本語の「ものす(る)」は、代動詞として様々な動作を表す。そのうち、主に(1)のような「ものしたまふ」等の敬語形で存在を表す用例は、中世後期から減少し近世期以降ほとんど見られなくなる。その減少の原因について、考察する論考は多くないが、中村(2001)、高橋(2010)は、軍記物語で多用される「わたらせたまふ」に注目する。「わたる」は本来、移動動詞であるが、中世には「わたらせたまふ」等の敬語形で、存在を表していた。高橋(2010)は、(2)のような「わたらせたまふ」が、「ものしたまふ」の用法を引き継いでいるという。一方、中世期の文献には、中古期以来存在を表す「おはす・おはします」も多用されている((3)(4))。

(1) 女宮の御腹には、男にて二人なんものし給ひける。 (石清水物語：10)

(2) 御心地悩ましげにて、上はつと渡らせ給ひて、 (むぐら：176)

(3) これも今は昔、京極の源大納言雅俊といふ人おはしけり。
(宇治拾遺物語：44)

(4) この御腹に、春宮・一品の宮おはします。 (海人の刈藻：14)

(1)の「ものしたまふ」は男君二人の存在を表している。(2)の「わたらせたまふ」は帝が女君の傍に存在していることを表す。(3)は、物語の冒頭文で、「おはす」は源大納言雅俊の存在を表す。(4)の「おはします」は中宮の子として、春宮と一品の宮が存在することを表す。

(1)～(4)の「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」は、それぞれ存在の意を表す。しかし、その存在を表す用法は同じだろうか。本章は、中世における存在を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」を調査し¹⁵、それぞれの存在を表す用法の特徴と相違点を明らかにする。これにより、「ものしたまふ」の衰退の原因について示唆を得ることを目的とする。

¹⁵ 調査資料は本章末尾の「使用テキスト」「デジタル資料」を参照されたい。

2. 先行研究

存在を表す「ものしたまふ」と「わたらせたまふ」について、先行研究としては中村(2001)と高橋(2010)が挙げられる。

2. 1 中村(2001)「存在詞「わたらせたまふ」と、その周辺」

中村(2001)は、「ものす(る)」が「あり」の意を担う場合は、ほとんど「ものしたまふ」の形に限られ、また、「あり」の意の「わたる」についても、すべてが「わたらせたまふ」という形であるといつてよいという(中村 2001 : 23)。さらに、中古における「わたる」は、専ら「わたりたまふ」や「わたらせたまふ」などの形で、貴族の移動を表すと指摘した上で、「わたらせたまふ」が、中世に至って存在を表すようになり、『保元物語』『平治物語』『平家物語』の中で圧倒的に「あり」の尊敬表現として用いられている実態について解説している(中村 2001 : 24)。

2. 2 高橋(2010)「中世王朝物語」における存在詞「ものしたまふ」と存在詞「わたらせたまふ」

高橋(2010)は「中世王朝物語」を中心に、存在を表す「ものしたまふ」と「わたらせたまふ」について考察した論考である。中古において用いられた「ものす(る)」は、中世に至ると、あまり使用されなくなり、特に、軍記物語ではその用例を確認できないという(高橋 2010 : 334)。「ものしたまふ」は中古の仮名物語で頻用されたが、時代を中世に移すと、「中世王朝物語」である程度まとまった使用が確認できるものの、その勢力は衰えているとする。これは「ものしたまふ」の衰退でもあるが、軍記物語が出自かと思われる存在詞「わたらせたまふ」が「ものしたまふ」に代わって使用され始めたことによる(高橋 2010 : 341)。

2. 3 問題点

中村(2001)、高橋(2010)はともに、中世において存在を表す「ものす(る)」が減少したことを指摘する。さらに高橋(2010)は、その減少に関して、存在を表す「わたる」の使用が一要因であると考えている。これら2つの先行論がその根拠として挙げるのは、まず形の面から見た共通点である。「ものす(る)」が「あり」の意を担う場合、ほとんどが「ものしたまふ」という二語連合の形に限られ、「わたる」が「あり」の意を

表すのもほとんど「わたら・せ・たまふ」という三語連合の場合であるという。つまり、「ものす(る)」「わたる」はともに「～たまふ」という敬語形で存在を表すという点で共通している。中村(2001)・高橋(2010)はともに、この点に着目して「ものしたまふ」「わたらせたまふ」を「存在詞」と位置づける立場を取っている。また、高橋(2010)によれば、存在を表す「ものす(る)」は中世期から減少しつつ、軍記物語には用例がない。一方、存在を表す「わたる」は中世期から現れ、ほとんど軍記物語の中で使われているという。この軍記物語の様相が「存在詞」において「わたらせたまふ」が「ものしたまふ」に交替したとみる大きな根拠となっている。

しかし、「ものしたまふ」「わたらせたまふ」を「存在詞」と位置づけるのは適当であろうか。筆者の観察では、「ものしたまふ」「わたらせたまふ」は「存在」だけではなく、「移動」を表す用例も多い。例えば中古における「ものしたまふ」の用例は、508例のうち、補助動詞用法が281例、残りの本動詞用法227例のうち、「存在」を表すものが143例¹⁶、「移動」を表すものが46例、その他の動作(「食べる」「言う」など)を表すものが38例ある。これに対し、中村(2001)・高橋(2010)では、「ものす(る)」「わたる」の観察において、補助動詞用法・本動詞用法の双方とも「存在」の範疇に収めている。つまり、(5)のような補助動詞用法としての「ものす(る)」も「あり」相当であり、「存在」を表すものとして考察されている。

(5) 伊衡の宰相、中將にものしたまひける時、 (大和物語：412)

このような「ものしたまふ」と「わたらせたまふ」が「あり」相当であること、また「あり」の尊敬語であることについては異存がないが、「存在詞」としてその用法を継承したとみることには疑問も感じる。しかし、まずこの点については判断を留保し、本章では本動詞用法に限定して用例を精査したい。

また、ジャンル・文体別の状況に関しては、軍記物語での様相が鍵となっていることが先行研究からわかるが、その他のジャンルの状況は必ずしも明らかでない。軍記物語の「わたらせたまふ」が「ものしたまふ」の用法を受け継いでいるのか否かについては、より幅広いジャンルでの検討も必要であろう。

¹⁶ 中古における「存在」の意を表す「ものしたまふ」の場合は、「空間的存在文」68例(47.6%)、「限量的存在文」72例(50.3%)、うち58例は「所有文」である。

2. 4 用法の分類基準

① 存在か移動かその他か

本動詞用法に限って観察をする上で、まず用法の分類基準を示す。本章においては、「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」が「存在」を表すか、「移動」を表すか、その他の動作を表すかが重要である。まず、基本的には文脈から判断する。文脈の中で存在の場所が明らかであり、かつ主体に移動の動作が認められない場合は「存在」と判断する。また、移動や存在に関わる場所名詞句の格標示の様相から判断する。中古和文において移動が行われる場所の格標示について調査した松本(2020)によれば、移動が行われる場所は経路と移動領域に分類でき、「経路の格標示は主に「を」が、移動領域の格標示は主に「に」が担っていた」(松本 2020 : 17)と述べる。よって、場所名詞句が「を」格標示されている場合は「移動」と判定できる。

本研究では松本(2020)に従い、「移動の完了後に、移動が行われた場所とは別の場所へ移動したことが明示、含意されている場合」を、移動が行われた場所を「経路」とし、「別の場所への移動が明示、含意されない移動の場合」、移動が行われた場所を「移動領域」とする(松本 2020 : 20)。「に」格は存在の場所も、移動の着点や方向も表すが、この判断基準に合致する場合は、「に」格標示の場合も「移動」とする。なお、松本(2020)によると、「中世には、「に」が担っていた移動領域の格標示を次第に「を」が担うようにな」ったという(松本 2020 : 17)。「わたる」の用例でも、「中世王朝物語」では「に」格で移動の着点や方向、移動領域を表す用例が少なくないが、「軍記物語」では「に」格を伴って移動を表すものは少なく、「へ」「を」格が「わたる」と共起して移動を表す用例が多く見られる。

② 存在文の下位分類

観察において特に注目するのは、存在文としての使い分けである。例えば、先の(1)は人と人の所属関係を表す「存在」であり、(2)は人がある場所にいるという「存在」である。同じ「存在」を表しても、それぞれの内実は異なっている可能性がある。存在文に対して下位分類を設定し、その歴史的変化を考察した金水(2006)によると、同じ存在の意を表しても、「厳密に「いる」しか用いられない種類の存在文と、有生の主語を取っていても「ある」が許容される種類の存在文がある。」(金水 2006 : 13)

金水(2006)は、(1)のような存在文を「限量的存在文」、(2)のような存在文を「空間

的存在文」と呼ぶ。さらに、「空間的存在文」は、「所在文」、「生死文」、「実在文」、「眼前描写文」に分けられ、「限量的存在文」は、「部分集合文」、「初出導入文」、「所有文」「リスト存在文」に分けられ、それぞれ使い分けがあるという。端的に違いをまとめると以下のようなものである。

「空間的存在文」のうち、「所在文」は、(6)のような、物理的な空間、あるいは時間を対象として占有することを表すものである。「生死文」は、(7)のような、有生の対象物の生死を表す存在表現であり、「この世に」「あの世に」等の場所表現が含意あるいは明示されたものである。「実在文」は、「生死文」に類似した表現で、存在対象が現実世界でのものではなく、「神様／宇宙人／幽霊」などの存在を表すものである。例えば、(8)はその一例である。「眼前描写文」は、(9)のような、眼前の状況を描写するものである。

- (6) 「父の渡らせたまふ所へ疾う疾う参れ、といふにてこそあれ。(略)」と教へければ、(石清水物語：163)
- (7) この御行方を知り侍らんと思ひ給へれど、世におはしまさば、さりとともつひに聞き奉るやうも候ひなまし、(浅茅が露：274)
- (8) 仏神は世におはしけるものをと、喜びあへり。(あきぎり/上：38)
- (9) こなた近き御簾押し張りて、殿はおはする。(いはでしのぶ：301)

「限量的存在文」のうち、「部分集合文」は、(10)のように、主として連体修飾節を用いて部分集合を言語的に設定し、その集合の要素の有無多少について述べるものである。「初出導入文」は、(11)のように、物語の展開上、登場人物を導入するために特に動機づけられた「限量的存在文」である。「所有文」は、(12)のように、所有者と所有対象の関係を表す数の有無多少を述べる文である。「リスト存在文」は、(13)のような、存在対象を数え挙げていく表現で、集合の要素の有無多少を述べる所有文と近い関係にある。

- (10) 「何事もみな口惜しく、あせゆく世の末なれど、かかる人のものし給ひけるよ」と驚かれて、(とりかへばや：68)
- (11) これも今は昔、中納言師時といふ人おはしけり。(宇治拾遺物語：35)
- (12) その頃、東宮よりほかには若君などもものし給はで、(夜寝覚物語：348)
- (13) この君たちもとりどりにあたらしけれど、内裏には中宮、故中宮などおはし

本章は金水(2006)における存在文の分類を参照し、本動詞用法として「存在」を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の用例を採集しそれぞれの存在を表す用法の内実を明らかにする。

3. 存在を表す「ものしたまふ」

中世における本動詞としての「ものす(る)」の用例は 389 例あり、そのうち、存在の意を表す用例は 184 例ある(対して、移動の意を表すもの 95 例、その他の意を表すもの 110 例)。その特徴の一つは、96.7%の用例が敬語形で用いられることである。

「ものしたまふ」という形としての用例は 154 例、「ものせらる」は 11 例、「ものしはべり」は 7 例、「ものせさせたまふ」は 6 例、単独の「ものす(る)」が存在の意を表す用例は僅か 6 例である¹⁷。

表 1 中世における存在を表す「ものしたまふ」の用例分布

種類		用例数と割合	計 184
空間的存在文	所在文	78 (42.4%)	85 (46.2%)
	生死文	7 (3.8%)	
	実在文		
	眼前描写文		
限量的存在文	部分集合文	17 (9.2%)	99 (53.8%)
	初出導入文		
	所有文	82 (44.6%)	
	リスト存在文		

表 1 を見ると、最も多いのは「限量的存在文」の「所有文」44.6%であり、ついで「空間的存在文」の「所在文」42.4%である。この 2 類で 87%と大半を占める。また、「空間的存在文」では「実在文」「眼前描写文」、「限量的存在文」では「初出導入文」「リスト存在文」の用例が見出されなかった¹⁸。

¹⁷ 「(略)まことに心苦しく、さやうなる人などもものせねば、迎えへきこえて後見奉らまほしく覚え侍りしかど、(略)」などと、(苔の衣：51)は、「ものす(る)」が単独で存在の意を表す用例であり、「所有文」に相当するものである。

¹⁸ 「実在文」「眼前描写文」「初出導入文」「リスト存在文」は、「おはす・おはします」においても

3. 1 「空間的存在文」

「空間的存在文」のうち、「所在文」は78例あり、「生死文」は7例にとどまる。いずれも場所名詞句が伴う、あるいは場所が想定できる。(14)は、存在の対象が、提示された場所名詞「ここ」という物理的空間を占有することを表す「所在文」である。(15)は、場所名詞句「この世に」が明示されている点で、有生の対象物の生死を表す「生死文」であると判断できる。

(14) 「雪見にまかり歩きつるついでに、ここにものせさせ給ふと承りて来つる」
と言はせ給へれば、 (海人の刈藻:20)

(15) まいて、かの母院の御山をさして参り給ひつつ、(略)「さすが、この世にも
のし給はんを見捨てては、(略)」と思ふは、 (いはでしのぶ:342)

3. 2 「限量的存在文」

「限量的存在文」に当たる「ものしたまふ」の用例は99例あり、そのうち「所有文」にあたる用例は82例である。「部分集合文」である用例は17例ある。(16)の「ものしたまふ」は、承香殿が「女宮二所」を子供として所有する意を表す。(17)は、連体修飾節「さること知るべき人」という部分集合が設定され、その集合の要素について有無多少を述べている。

(16) またそのころ、承香殿と聞こゆるは、故式部卿の女御ぞかし。御おぼえも重
き方浅からぬが、女宮二所ものし給ふ。 (風に紅葉/上:25)

(17) (中将)「北の方の聞き思さんこともいかが。つつましよう。今までさること知る
べき人もものせられぬを」と思す。 (しら露:233)

4. 存在を表す「おはす・おはします」

次に、「おはす・おはします」の様相を確認する。分類は三節と同じ方法で行う。表2に存在を表す「おはす・おはします」の種類と用例数を示す。

数パーセントずつであった。存在を表す「ものしたまふ」においてその用例が確認できないのは、用例数の母数が少ないことによる可能性も考慮する必要はある。ただし、中世だけではなく、中古においても「存在」の意を表す「ものす(る)」には同様に、この4類型の用例が見つからない。全158例のうち、「所在文」61例、「所有文」64例、「部分集合文」21例、「生死文」12例である。よって、「ものしたまふ」の「実在文」等の例が見られなかったことは、用例の絶対数が少ないことに起因する傾向でなく、「ものす(る)」自体の特徴と考える。

表2 中世における存在を表す「おはす・おはします」の用例分布

種類		用例数と割合		計 1871	
		おはす	おはします		
空間的存在文	所在文	404	574	978(52.3%)	1250(66.8%)
	生死文	146	98	244(13%)	
	実在文	3	8	11(0.6%)	
	眼前描写文	5	12	17(9%)	
限量的存在文	部分集合文	20	16	36(2%)	621(33.2%)
	初出導入文	22	7	29(1.5%)	
	所有文	290	258	548(29.3%)	
	リスト存在文	3	5	8(0.4%)	

中世における存在を表す「おはす」893例、「おはします」は978例を採取した。「おはす・おはします」は全ての存在文の種類が含まれている。また、「空間的存在文」の割合が66.8%と多く、「限量的存在文」は33.2%にとどまる。

4.1 「空間的存在文」

「空間的存在文」のうち、「所在文」は978例、「生死文」は244例、「実在文」は11例、「眼前描写文」は17例ある。(18)は、「所」と「三条高倉」という場所名詞句が提示されていることから、「所在文」であると言える。(19)は、「この世に」という場所名詞句が想定できる点から、「生死文」であると判断できる。(20)は「実在文」であり、(21)は「眼前描写文」である。

(18) 先坊のおはします所は三条高倉なれば、這ひわたるほどなり。

(浅茅が露：182)

(19) 中宮は、心づきなく思し召さるれど、母のおはせばこそはめざましからめ、

(零ににごる：21)

(20) 「神・仏のおはしまさば、(略)」など、

(小夜衣：136)

(21) 幼心地にも、女御の御さまの日ごろ人にすぐれてうつくしうなつかしと見きこえつる宮よりも、なほ目もあやなるを、つくづくとまもりきこえ給ふを、(略) (大将)「あなたにおはすると、いづれかまさりて見奉る」とのたまへ

ば、

(風に紅葉：43)

4. 2 「限量的存在文」

「限量的存在文」では、「部分集合文」が36例、「初出導入文」が29例、「所有文」が548例、「リスト存在文」が8例見られた。(22)は、「失ひ給ひける女御」という連体修飾節が設定されている点から、「部分集合文」であると言える。(23)は、物語の冒頭文で導入するための「初出導入文」である。(24)の「おはす」は、「御子二人」が存在するという意を表しており、「所有文」であると判断できる。(25) ((4)の再掲)は、複数の所有物を列挙する「リスト存在文」である。「リスト存在文」に当たる「おはします」の用例は、全て(25)のような、親族関係者を列挙するものである。

- (22) 三千人の妃も、武士どもを語らひて失ひ給ひける女御もおはしますや、かかるためしも世になき事ならず、(小夜衣：184)
- (23) これも今は昔、法輪院大僧正覚猷といふ人おはしけり。(宇治拾遺物語：112)
- (24) 「娘やおはする」と宣へば、「しか侍り。御子二人おはするが、男は国にとまりて、姫君はこれになん」と、(石清水物語：29)
- (25) この御腹に、春宮・一品の宮おはします。(海人の刈藻：14)

5. 存在を表す「わたらせたまふ」

最後に「わたらせたまふ」の様相を観察する。

表3 中世における存在を表す「わたらせたまふ」の用例分布

種類		用例数と割合	計 107
空間的存在文	所在文	70 (65.4%)	81 (75.7%)
	生死文	9 (8.4%)	
	実在文		
	眼前描写文	2 (1.9%)	
限量的存在文	部分集合文	3 (2.8%)	26 (24.3%)
	初出導入文		
	所有文	23 (21.5%)	
	リスト存在文		

表3は存在を表す「わたらせたまふ」の種類と用例数を示すものである。中世における「わたる」の用例は1700例近くの用例を採取したが¹⁹、存在を表す「わたらせたまふ」の用例は僅か107例であった。中世期の「わたらせたまふ」には確かに存在の意を表す用例が認められるが、移動の意を表す用例がほとんどであるという点で、「ものしたまふ」とも「おはす・おはします」とも異なる。

存在を表す用例のうち、75%以上の用例は「空間的存在文」で、「実在文」「初出導入文」「リスト存在文」の用例は見当たらない。また、確かに中村(2001)が指摘している通り、存在の意として使われている用例では、ほとんどが「わたらせたまふ」の形である。その他、「わたり候」「わたらせおはします」などの形も見られる。「わたる」単独で存在を表す用例は見当たらない。

5.1 「空間的存在文」

「空間的存在文」としての「わたらせたまふ」には、「所在文」が70例、「生死文」が9例、「眼前描写文」が2例見られる。(26)は、場所名詞句「按察の二品のもと」が提示されており、「所在文」であると判断できる。(27)の「わたらせたまふ」は、目の前の人物の空間的存在を表す「眼前描写文」である。

(26) 按察の二品のもとにわたらせたまふ今御所とかや申す姫君、
(とはずがたり：318)

(27) 館の内に、我が妹のわたらせ給へるを、いと心得ずながら、人々をして、我が御庵へ入れ給ひぬ。
(松陰中納言：115)

(26)の所在文、(27)の眼前描写文のどちらの「わたる」も、「に」格名詞句によって存在場所が明示されている。軍記物語の「所在文」では、「法皇のわたらせ給ふ五条内裏に参って」(平家物語：152)のように「主体の+「わたらせたまふ」+場所」という構文が見られるようになる。これは「王朝物語」には見られない構文である。

5.2 「限量的存在文」

¹⁹ いずれの作品においても、「わたる」1700例近くのうち、「わたらせたまふ」、「わたり候ふ」が合計413例である。そのうち存在を表す例が107例であり、補助動詞用法の例が69例、移動を表す例が231例である。その他「V-わたらせたまふ」の用例は、「存在」「移動」を表すもののほか、「見わたる」「思しわたる」「悩みわたる」などのような、動作の継続を表すものがほとんどである。

「限量的存在文」には、「部分集合文」が3例、「所有文」が23例ある。(28)の「つが」は、「病」のことで、「天皇にはご病気もおありにならない」の意である。「所有文」である。

(28) 二月廿一日、主上ことなる御つがもわたらせ給はぬを、

(平家物語/巻四：265)

6. 考察

表1～表3から分かるように、「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」はいずれも同じく存在の意味を表すが、その用法には大きな違いが見える。

6.1 存在文の種類の違い

「おはす・おはします」は、存在文の下位類を網羅している。それに対して、「ものしたまふ」「わたらせたまふ」はともに「リスト存在文」、「実在文」、「初出導入文」の用例が見られず、「ものしたまふ」は「眼前描写文」の用例も見られない。また、「わたらせたまふ」は8割近くが「空間的存在文」に偏ること、「ものしたまふ」の場合は、「所在文」と「所有文」で大半を占めること、とりわけ「所有文」の割合が最も高く、結果として「限量的存在文」の占める割合が半分以上に達する点が特徴的である。

6.2 存在文における存在対象の違い

「所有文」に相当する「ものしたまふ」の用例は、82例である。そのうち、57例は(1)のような、「人」の所有、親族関係の所有を表すものである((12)(16)など)。残りの25例は(29)のような、物事の所有、または人の性質などの所有を表す。「おはす・おはします」の場合は、親族関係の所有も、物事や性質などの所有もともに見られるが、用例数にはそれほど差がない。一方、「所有文」の「わたらせたまふ」の場合は、人の所有を表す用例は3例しかなく、人の性質や事柄などの所有を表す例に偏る。例えば(30)では、「わたらせ給ふ」で「やすい御心」の(非)所有を表す。

(29) 「(略)かかることどもものし給はましかば、誰が御為もいかに思ふさまにて生ひ立ち給はまし。(略)」など、 (苔の衣：253)

(30) 保元以降は、乱逆打ちつづいて、君やすい御心もわたらせ給はざりしに、入道はただ大方を取りおこなふばかりでこそ候へ。 (平家物語/巻三：241)

また、「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の3語には、「所在文」に相当する用例にも違いが見られる。(31)は、「神達」の所在を表す用例である。このような、「神、観音」などの存在は、ほぼ「おはす・おはします」で表されている。「わたらせたまふ」には1例だけ「菩薩」の存在を表すものがあるが((32))、「おはす・おはします」が表す「所在文」とやや異なり、普賢菩薩と虚空蔵菩薩の像が持仏堂に存在することを表している。中世期の「ものしたまふ」にはこのような神仏の存在を表す用例が見当たらない²⁰。

(31) 八百万代の神達、この月に出雲の大社に参り集まり玉ふ。己が国々におはしますべからずとて、諸の神達、我が国々にはおはしまさず。故に十月を神無月とは申すなり。 (太平記/卷二十五:231)

(32) 幼少の時より崇め奉りける普賢、虚空蔵の渡らせ給ひける持仏堂に入れ奉りて、様々に勞り奉り給へり。 (義経記/卷六:312)

6.3 三語の違い

ここで6.1、6.2で見た三語の違いが何に起因するのか、考えてみたい。

まず、「おはす・おはします」は、そもそも、「いる・ある」の尊敬語である。だからこそどのような種類の存在文も用例が見られると考えてよい。次に「わたらせたまふ」は、本来、移動動詞である。存在を表す場合も、移動の結果という含意があり、ゆえに「空間的存在文」の比重が大きいのだと考えられる。では、「ものしたまふ」の場合、その独自性は、どこにあるだろうか。

ここで思い起こしたいのは、第二章で述べたように、「ものす(る)」が結果を伴う人間の動作を代用する動詞であるという点である。「ものす(る)」は自動詞用法である場合、「存在・移動・その他(結婚する、懐妊するなど)の動作を中心に用いられることを、第二章で明らかにした。一方、他動詞用法である場合、「言う・書く・作る・盗む」などの意を代用する。また、「ものす(る)」の表す動作には、「達成する」「結果物がある」という特性が伴い、このことが中古から近現代まで一貫している。移動の意を代用する場合には目的地に到着する、または到着したことを表す²¹。「言う」「書く」の

²⁰ 中古でも同様に、この種の用例は見当たらないことが確認できる。

²¹ 中古における「移動」の意を表す「ものす(る)」では、189例のうち、「到達」を表す用例は143例(75.7%)である。中世の場合は、中世の場合には、80例のうち、「到達」が57例(71.2%)見られる。

ような動詞の代用では発話・伝達内容が相手に届くことを表す。他の動作の用例は少ないが、「盗む」の意で用いられ、「盗む」動作の結果として実際に「金銀」を手に入れた用例がある。

この「結果(物)が伴う」という性質は、「ものす(る)」が代用する動作に一貫して備わっていることになる。例えば、「言う」であれば「発話情報」というものが伴い、「書く」であれば「手紙」というものが伴う。また「移動」であれば目的地に「到着する」結果が伴い、「盗む」であれば「金銀」というものを手に入れた結果物が伴う。存在を表す「ものす(る)」の場合にもこの「結果(物)が伴う」という性質が現れていると見る。「所有文」のなかに、親族の存在を表すものが特に多いのは、動作主がある人を所有し、「親族」という関係性の伴うことを表すからであると考えられる。

これを踏まえてさらに、「空間的存在文」における「実在文」と「眼前描写文」の用例が見当たらないことについて考えてみたい。「実在文」は、金水(2006)が述べるように、「神様／宇宙人／幽霊」などの存在を表すものである。「ものしたまふ」に「実在文」の用例が見られないのは、「ものす(る)」が、結果を産み出さない「神」や「幽霊」などの行為を表す動詞ではなく、人間の、結果を伴うリアルな動作を代用する動詞であるためだろう。また、「眼前描写文」では、眼前の存在を描写するため、発話者と存在する対象が同一の発話場面(同じ時間・同じ場所)に存在することが必要である。代動詞「ものす(る)」は主体の「存在」をあえて臙化して言及する表現であり、存在を表す「ものしたまふ」もこのような発話場面の同一性を持たないため、「眼前描写文」の用例がないと考える。さらにいえば、そもそも「眼前描写文」や「実在文」などの存在文タイプは全体から見ても非常に周辺的なものである。存在を表す「ものしたまふ」は代用表現として存在文の主要なタイプにのみ進出したという見方もできるだろう。

存在を表す「わたらせたまふ」の用法は、その用例が本来、移動動詞としての「わたる」の用法から派生した存在用法であるとされる。中村(2001)は早く『源氏物語』に、動作主が移動して結果的に存在するという用例があると指摘している(中村 2001: 27)。中村(2001)によると、(33)は「ちょうど源氏も来合わせていらっしゃった時なので、その贈物を女別当がお目にかける」という場面で、移動の結果、存続する存在が表されているという。

(33) 殿も渡りたまへるほどにて、かくなむと女別当御覽ぜさす。

このように、発話者が存在主体(「わたる」の動作主)の場所へ移動する(あるいは、存在主体が発話者の場所へ移動する)場合、動作主の存在、すなわち移動の結果の存続が、発話場面において把握される。「わたらせたまふ」の「眼前描写文」の用例は、いずれもこのような条件で用いられていると考えられる(用例(27)など)。一方、「ものしたまふ」の場合、結果(物)を伴うという意味的性質に即して、到達先が明確な移動は表すことができ、その到達先が眼前でない場合は「所在文」として用いることができるが(用例(14)など)、到達先が「眼前」の用例はない。臙化の代動詞という性格が「ものしたまふ」の「所在文」の多さと「眼前描写文」に用いられないという制約に結びついていると考える。一方、「わたらせたまふ」にはそのような制約がないために「所在文」としても「眼前描写文」としても運用可能であったと考えられる。

次に、「ものしたまふ」における「限量的存在文」の様相について検討する。3節の表1で示したように、存在を表す「ものしたまふ」において、「限量的存在文」は全体の半分以上を占める。しかし、「初出導入文」と「リスト存在文」の用例はない。つまり「部分集合文」と「所有文」で用例の半分以上に及んでいるということである。

「限量的存在文」は、前文脈に既存する特定の対象(「所有文」)あるいは特定の集合(「部分集合文」)を前提とし、その存在を表す存在文である。3節で見たように、「ものしたまふ」は「所在文」「所有文」が多い。ある特定の貴人の存在を表すことから「所在文」が多く、ある特定の主体との関係において対象の存在を表すことから「所有文」に偏るといえるのではないか。

一方、「リスト存在文」は、存在対象を数え挙げていく表現である。「リスト存在文」のように、前文脈に既存する特定の対象ではなく、新たに発話場面に導入される対象の存在は「ものしたまふ」では表現しにくいのだと考える。また、「初出導入文」は金水(2006)が述べたように、物語の展開上、登場人物を導入するために特に動機づけられた特殊な表現である。そのため、3語のうち、「ある・いる」の尊敬語である「おはす・おはします」にのみ担いうる存在表現であると考えられる。

6.4 ジャンルによる違い

この3語についても一つの異なりは、ジャンルによる違いである。今回使用のテ

キストによる用例の有無多少を表4に示す。

表4 存在を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の用例分布

	ものしたまふ	おはす	おはします	わたらせたまふ
王朝物語	174(94.6%)	539(60.4%)	519(53.1%)	23(21.5%)
歴史物語	8(4.3%)	106(11.9%)	243(24.8%)	7(6.5%)
御伽草子		8(0.9%)	29(3%)	8(7.5%)
日記・紀行	1(0.5%)	1(0.1%)	21(2.1%)	6(5.6%)
説話・随筆	1(0.5%)	66(7.4%)	74(7.6%)	
軍記		173(19.4%)	92(9.4%)	63(58.9%)
計	184	893	978	107

表4から分かるように、存在を表す「おはす・おはします」はジャンルを問わず幅広く使われている。一方、存在を表す「ものしたまふ」はほぼ「王朝物語」専用と言える様相である。筆者の調査では、軍記物語だけでなく、その他のジャンル(狂言、キリシタン資料など)にも一切用例が見られなかった(「ものしたまふ」だけではなく、「ものす(る)」自体の用例が得られない)²²。

「ものす(る)」は本来、平安時代の仮名文、特に貴族の生活を描写する雅文作品(『源氏物語』『蜻蛉日記』など)に多用されている。「中世王朝物語」や「歴史物語」は『源氏物語』という和文体の作品に大きく影響を受けているとされ、だからこそ「ものしたまふ」は中世王朝物語にも多用されていると考えられる。一方、軍記・説話という文学ジャンルは、いずれも中古の漢文体作品に影響を受けたものである。例えば『日本古典対照分類語彙表』によれば、『平家物語』の漢語の割合は『源氏物語』より高くなっている²³。その漢語は平安時代の仮名文学作品に用いられるもの、記録語文に用いられるもの、日本漢詩文に用いられるものが『平家物語』に受容されているという(佐藤(1966))。また、『太平記』の場合は、多くの漢籍や仏典などの影響を受け(増田(2001))、『平家物語』に比べれば、「直訳的な漢文調で、生硬な感じをさへ与へる」(佐

²² 調査資料は、『日本語歴史コーパス』に収録されている作品であり、底本は、大塚光信編(2006)『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』(清文堂出版)、『天草版平家物語』Nifon no cotoba to historia uo narai xiran to fossuru fito no tame ni xeua ni yauaraguetaru Feiqe no monogatari. (Shelfmark:Or.59.aa.1)(大英図書館蔵)、『天草版伊曾保物語』Esopo no fabulas:Latinuo uaxite Nippon no cuchito nasu mono nari. (Shelfmark:Or.50.aa.1)(大英図書館蔵)である。

²³ 『平家物語』における漢語延べ語数が23831語であるのに対し、『源氏物語』における漢語延べ語数は10528語である。(『日本古典対照分類語彙表』:4)

藤(1966))という。『御伽草子』の場合は、擬古文的な作品であって「和」の性格を持つと考えられるが、存在を表す「ものしたまふ」の本動詞としての用例はない。ただし、補助動詞としての用例は確認できる((34))。「ものしたまふ」そのものは衰退傾向にあるが、和文体ゆえに補助動詞用法を保持しているものと考ええる。

(34) ほゝ笑みて、「さても / \ ありがたき御よしみにぞものし給へ。(略)」と手をつきて居る。 (福富長者物語:386)

「ものす(る)」が軍記物語に見られない理由は、「ものす(る)」の「和」「雅」の性質がこれらの作品に合わないためと考える。中世の「ものす(る)」は擬古文としての性格が強い和文・雅文体での使用が特徴として認められ、その条件でのみ中世期に命脈を保っているといえる。詳しくは第五章で検討する。

これに対し、存在を表す「わたらせたまふ」は、中村(2001)・高橋(2010)の指摘の通り、ほぼ「軍記物語」に集中している。本研究の調査結果でも107例中63例が「軍記物語」の用例である。このことから、存在を表す「ものしたまふ」が「軍記物語」で使われていない様相は、確かに「わたらせたまふ」との「交替」にも見える。しかし、中世期に「ものしたまふ」が衰退する一方、「わたらせたまふ」は本来の移動動詞「わたる」の性質をもとに、空間的移動から空間的存在を表す用法が生じた。その結果、「ものしたまふ」の用いられない和漢混淆文としての軍記物語で顕著に実現したと考えるのが合理的である²⁴。

また、6.3節で述べたように、「わたらせたまふ」の用法は、本来、移動動詞としての「わたる」の用法から派生した存在用法である。「中世王朝物語」において存在の意を表す「わたらせたまふ」が見られるのは、中古の用法を受け継いだ類と位置づけられよう。「ものす(る)」は擬古的な和文・雅文体としての性格から和漢混淆文の軍記物語へは継承されなかった。一方「わたる」は和漢混淆文などのジャンルの制約がない。そのため、存在を表す「わたらせたまふ」は軍記物語のなかで発達した。しかし、全体的に見ると、軍記物語の中で存在を表す表現で最も多いのは「おはす・おはします」である。軍記物語で存在を表す「わたらせたまふ」が偏在するように見えるのは、「ものしたまふ」と交替したというよりも、あくまで制約のないジャンルで運用され

²⁴ なお、軍記物語においては、「おはす・おはします」にも移動を表す例が見られるが、180例と、「おはす・おはします」全体の用例数からすると少ない。

た結果が顕著に捉えられた様相と考える。

7. おわりに

以上、本動詞用法に限定して考察した結果、存在を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の用例には違いがあることがわかった。その違いは、それぞれの語彙的な独自性を反映したものであり、ジャンルの制約で対立的に用いられたものと考えられる。

まず存在を表す「おはす・おはします」は、「いる・ある」の尊敬語であり、作品ジャンルの制約もない。そのため、「空間的存在文」と「限量的存在文」における全ての種類で網羅的に使用されている。

次に「ものしたまふ」の場合は、「限量的存在文」の用例が55%近くあることが特徴的である。また、和文・雅文体での運用に限られるという制約を持ち、軍記物語というジャンルには用例が見られない。加えて、「空間的存在文」のうち「所在文」「生死文」、「限量的存在文」のうち「所有文」「部分集合文」という四つの下位分類のみに用例が見られる。これは、「ものす(る)」自体に「結果(物)が伴う」「人間のリアルな動作を描写する」「特定の人や集合の存在を表す」などの特性があることから説明づけられる。

最後に「わたらせたまふ」の場合は、「空間的存在文」が用例の75%以上を占めることが特徴的である。これは、その存在用法が、本来の移動動詞「わたる」が持つ空間的移動の結果の存続という性質から生じたものであり、空間的存在を表す用法に偏るためと考えられる。ジャンルという観点では60%近くの用例が軍記物語に用いられている。ただし、軍記物語においては、敬意を伴う存在表現は「おはす・おはします」の用例が圧倒的に多い。それに対し、存在の「わたらせたまふ」は御伽草子などの和文体の文献にも見られる。中世期に存在の「ものしたまふ」が王朝物語を除いて廃れているのは独立して、運用上文体的制約のない「わたらせたまふ」は和漢混交文の特徴を持つ軍記物語の中でも顕著に運用されたのだと考える。

この結果から、「ものしたまふ」の減少の要因について、「わたらせたまふ」との交替から説明する見方には再検討を要する。「ものす(る)」の衰退については、「ものす(る)」の特性とその変化、存在以外の用法の消長、補助動詞用法の衰退、「ものしたまふ」敬語形の衰退などの観点から考察する必要があると考える。これに

ついて第四章で述べる。

参考文献

- 安部清哉編(2020).『シリーズ〈日本語の語彙〉3 中世の語彙—武士と和漢混淆の時代—』朝倉書店.
- 金水敏(2006).『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.
- 呉寧真(2019).「動詞連用形に後接する「ものす」」『国学院大学大学院紀要. 文学研究科』(50), 19-33.
- 佐藤喜代治(1966).『日本文学史の研究』明治書院.
- 高橋良久(2010).「「中世王朝物語」における存在詞「ものしたまふ」と存在詞「わたらせたまふ」」『日本語学最前線』和泉書院. 325-344.
- 中村幸弘(1995).『補助用言に関する研究』右文書院.
- 中村幸弘(2001).「存在詞「わたらせたまふ」と、その周辺」『國學院雑誌』102-11, 23-37.
- 増田欣(2002).『中世文藝比較文学論考』汲古書院.
- 松本昂大(2020).「中古和文における移動動詞の経路, 移動領域の標示」『日本語の研究』16(3), 17-33.
- 宮島達夫 [ほか] 編(2014)『日本古典対照分類語彙表』笠間書院.
- JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com/library/>)
- 国立国語研究所(2020)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2022. 10、中納言バージョン 2. 7. 0)

使用テキスト

【中世】『新編日本古典文学全集』(小学館): 宇治拾遺物語、徒然草、十訓抄、無名草子、とはずがたり、保元物語、平治物語、平家物語、曾我物語、太平記、義経記／『日本古典文学大系』(旧版)(岩波書店): 古今著聞集、御伽草子／『中世王朝物語全集』(笠間書院): あきぎり・浅茅が露、海人の刈藻、いはでしのぶ、石清水物語、木幡の時雨・風につれなき、苔の衣、恋路ゆかしき大将・山路の露、小夜衣、しのびね・しら露、雫ににごる・住吉物語、とりかへばや、八重葎・別本八重葎、松浦宮物語・雲隠六帖、風に紅葉・むぐら、松陰中納言、夜寝覚物語、我が身にたどる姫君(上)・(下)、

夢の通ひ路物語(上)・(下)／『水鏡大鏡今鏡増鏡』(國民文庫刊行會)

第四章 「ものす(る)」における補助動詞用法の衰退について

1. はじめに

第二章では、古代日本語「ものす(る)」には、本動詞用法と補助動詞用法の二つの用法があることを述べた。本動詞用法としての「ものす(る)」は、中古から中世まで、(1)のような独立動詞として、あるいは(2)のような「複合動詞」の後項として、「移動」の意、「存在」の意を表す用例がほとんどである。近世以降は、「物した物を物するは重罪人の今木傳七。」(韓人漢文手管始：343)のような隠語的な用法や、「一篇の新体詩をものしたことのある事実を」(岸田国土・『「追憶」による追憶』)のような文語的な用法で僅かに存続している。

以上の変化は、本動詞用法に関する変化である。その一方で、補助動詞用法にも大きな変化が認められる。(3)のような補助動詞用法は、中古から中世までは多く見られるが、近世以降は減少し、近現代には見られなくなる。

- (1) ほど経て河原へものするに、(蜻蛉日記/上：127)
- (2) 式部卿宮聞こしめして、「(略)人わろくて添ひものしたまはむも、人聞きやさしかるべし。(略)」とのたまひて、(源氏物語/真木柱：358)
- (3) 左兵衛の督の君、侍従にものしたまひけるころ、(大和物語：317)

本動詞用法の変化(「ものす(る)」の場合、「他動性」の強化)と、補助動詞用法の変化(衰退)は何か関連性があるだろうか。

他の動詞の事例を考えてみる。例えば、本動詞の「ものす(る)」と同じく移動を表す「行く」「来る」、また存在を表す「ある」「いる」は、本動詞として表す具体的な意味が抽象化し、アスペクトを表す機能的な語へ変化した。すなわち、「-ていく」「-てくる」「-てある」「-ている」などの補助動詞として、動詞連用形に後接する用法を発達させてきた。

小島(2001)は、古代語のある語(「行く・来る・置く・見る・居る」など)が現代語でテ形の補助動詞として用いられるようになる場合は、次の三つの条件が揃っているという。以下は引用である。

- ① 古語でも、形としてはテ形²⁵がある。
- ② 古語で複合動詞の後項として補助的な用法がある。
- ③ テ形²⁶も複合動詞も両方ある程度の用例がある。

しかし「ものす(る)」は、以上の三つの条件が揃っているにもかかわらず、現代語ではテ形接続の補助動詞用法を持っていない。まず、①の場合の「ものす(る)」の例文を(4)に挙げる。②の場合の「ものす(る)」の用例は、(5)のようなものである。また、③については、例えば『日本語歴史コーパス』で動詞テ形+「ものす(る)」の用例を検索すると74例得られる(中古のみ)。一方、直接他の動詞に後接する「ものす(る)」の用例を検索した場合得られるのは40例である(中古37例、中世1例、明治以降2例)。

(4) 「この人につきて、いとしのびてものしたまへ」といへば、来たり。
(平中物語：511)

(5) さうざうしくおぼゆるままに、前齋宮のおとなびものしたまふをだにこそあ
ながちに扱ひきこゆめれば、
(源氏物語/薄雲：428)

ではなぜ「ものす(る)」では、中古に持っていた補助動詞用法が失われたのだろうか。本章は、この問題をめぐって、「ものす(る)」の語誌における補助動詞用法の変化の意味するところを考えたい。補助動詞用法が失われる過程がどのようなものであったかについて記述し、そのなくなった要因や条件を探りたい。

2. 先行研究と問題の所在

「ものす(る)」の補助動詞用法を中心に論じた研究には、中村(1995)と呉(2019)がある。中村(1995)は、『源氏物語』の地の文における「ものす(る)」の「まだ少将にものしたまひし時」というような用法について、「ものしたまふ」は断定助動詞「にあり」の尊敬表現構成要素として用いられているという(中村1995:41)。また、次の①～⑧の用法に当てはまる「ものす(る)」は、独立性が低く、補助動詞と呼ばれるべきものであるという。本研究でもこの見方に従う。

²⁵ 小島(2001)におけるテ形とは、動詞がテへ接続する形式を指す。

²⁶ 注25に同じ。

- ① 断定助動詞「に」(係・副助詞介在) + 「ものし給ふ」
- ② 形容詞 + 「ものし給ふ」
- ③ 形容動詞 + 「ものし給ふ」
- ④ 補助活用型助動詞(「べし」「ず」「やうなり」など) + 「ものし給ふ」
- ⑤ 断定助動詞「に」・形容詞・形容動詞・助動詞「やうなり」(助詞「て」介在) + 「ものし給ふ」
- ⑥ 動詞連用形(助詞「て」介在、係・副助詞介在) + 「ものし給ふ」
- ⑦ 動詞連用形(助詞「つつ」介在) + 「ものし給ふ」
- ⑧ 副詞(「はなばなど」など) + 「ものし給ふ」

呉(2019)は、同じく『源氏物語』を対象とし、動詞連用形に後接する「ものす(る)」を調査した研究である。動詞連用形に後接する「ものす(る)」の場合は、補助動詞である可能性だけでなく、代動詞である可能性もあるため、判断が難しい。そこで呉(2019)は、動詞連用形に後接する「ものす(る)」について考察するに当たって、『源氏物語』において「ものす(る)」に前接する動詞を下記の四種類に分けている。

グループⅠ：移動動詞「来」「行く」だけに前接する動詞

グループⅡ：「ある」だけに前接する動詞

グループⅢ：「来」「行く」にも「ある」にも前接する動詞

グループⅣ：通常語形のない動詞

結論として、呉(2019)は、グループⅠの動詞に後接する「ものす(る)」を、動作主の移動があって「-来」「-行く」の代用とみなしている。グループⅡの動詞に後接する「ものす(る)」は、動作主に移動の動作がなく、じっとして「-ある」の代用とみなせるとする。グループⅢの動詞に後接する場合の「ものす(る)」は、動作主に移動の動作があるかないかで、「-来」「-行く」の代用か「-ある」の代用かに分けられるという。グループⅣの動詞に後接する場合の「ものす(る)」は、動作主に移動の動作もなく、「じっとしている」とも解釈できない用例であれば、動作の存続を表す補助動詞用法と認めている。呉(2019)の判定基準は明確であり、動詞連用形に後接した「ものす(る)」の補助動詞用法を抽出する上で示唆的である。

中村(1995)、呉(2019)ともに『源氏物語』を対象とした研究であるが、本章では、「ものす(る)」の補助動詞用法の史的様相を考察したい。動詞連用形に後続する「も

のす(る)」については呉(2019)の基準を、その他の上接語については中村(1995)に従って用例を抽出する。

3. 歴史的観点から見る「ものす(る)」の補助動詞用法の変化

本節では歴史的観点から補助動詞としての「ものす(る)」の意味用法について考察したい。使用テキストを本章末に示すが、「ものす(る)」の用例分布には資料による偏りが見える。上代には見られず、中古では仮名文学作品を中心に使用され、中世では王朝物語を中心とした和文のみで用いられる。軍記物語・キリシタン資料・狂言などの資料に用例が確認できない。本章では、用例があるものとないものに分けて掲出している。採取できた用例は1903例であり、その中で、補助動詞用法としての「ものす(る)」は599例であった。それを前接語句によって①～⑤のように分類した。用例数の分布を表1に示す。なお、この五つの分類における用法は、いずれも本動詞「ものす(る)」の用法と違い、独立性が低く、前接句に付属した用法である。

- ① 名詞句+「ものす(る)」
- ② 形容動詞連用形句+「ものす(る)」
- ③ 形容詞連用形句+「ものす(る)」
- ④ 副詞句+「ものす(る)」
- ⑤ 動詞連用形句+「ものす(る)」

表1 「ものす(る)」における補助動詞用法の用例変化

前接要素	時代						
	中古	中世前期	中世後期	近世前期	近世後期	近代以降	計
①名詞句	98	96	18	1			213
②形容動詞連用形句	45	36	5			1	87
③形容詞連用形句	72	82	19	1	3	2	179
④副詞句	3	2					5
⑤動詞連用形句	70	33	5	5	2		115
計	288	249	47	7	5	3	599

中村(1995)が述べるように、『源氏物語』では「に(て)ものしたまふ」などの形で「に(て)あり」に相当する用法が多用されている。①②③④がこれに相当する。この「に(て)あり」は、「…という状態・資格である」という意を表すもの(小田 2015: 84)

である。したがって、「ものす(る)」の場合、「に(て)ものしたまふ」で「…という状態・資格である」意を表すものである。

動詞連用形句に後接する⑤の「ものす(る)」の用法は、事態の局面、なかでも継続や存続を表す「-あり」相当のアスペクト的な用法である。①～⑤いずれも、補助動詞「あり」との関係性がうかがわれる。そこで、補助動詞「ものす(る)」の考察に当たっては、「あり」との関係性を考えながら、前接要素の「状態・属性」に着目していく。

① 名詞句+「ものす(る)」

まず、名詞句+「ものす(る)」の用例数の変化を見ていく(表2)(比較のため、前接要素が同じ形での本動詞としての「ものす(る)」の用例数も挙げる。以下同様)。

表2 名詞句+「ものす(る)」の用例変化

	補助動詞	連用形句+本動詞
中古	98	289
中世前期	96	203
中世後期	18	48
近世前期	1	19
近世後期		92
近代以降		104
計	213	755

吉田(2019)では、中古から中世にかけての断定表現「にてあり」「なり」「にあり」の前接名詞を精査し、Ⅰ「一時的・属性」((6))、Ⅱ「恒常的・属性」((7))、Ⅲ「恒常的・実体」((8))の用例があるとする。また前接名詞にⅠⅡⅢの用例があることを断定表現の認定基準としている。これを踏まえて、名詞句(名詞+ニ(テ))に接続する「ものす(る)」の用例を観察した。すると、Ⅲの用例も見られるが、特にⅠとⅡの用例が多く、そのほとんどが「ものしたまふ」の形で主語の身分や状態、親族関係などを表していることがわかる。これらⅠ～Ⅲに当てはまる「ものす(る)」は断定表現「(に・にて)あり」の機能に相当すると考えられる。(6)の「ものす(る)」は「中将でいらっしやった時」という一時的な状態を表し、(7)の「大君」は恒常的に「春宮」の「御母」であり、「ものす(る)」はその恒常的な属性の断定を表している。(8)の「たれ」は、代名詞である。代名詞は「指示するものが何であるか(つまり実体)だけを示

すので、名詞の種類の中で最も実体を表す側面を強く持つものである」(吉田 2019 : 258)という。よって、代名詞に後接する「ものす(る)」はⅢ「恒常的・実体」の断定表現に属する。

- (6) 伊衡の宰相、中將にもものしたまひける時、 (大和物語 : 412)
 (7) 大君は当帝の后にて、春宮の御母にもものし給ふ (石清水物語 : 11)
 (8) 御供なる人に、「さるにても、たれにてもものし給ふぞ。いかなる人とも知り奉らでは。いかでかくまでも」と問ひければ、 (石清水物語 : 47)

また、表 2 から分かるように、近世以降にはこのような名詞句に接続した「ものす(る)」の補助動詞用法と認められる用例が見当たらなくなる。

② 形容動詞連用形句+「ものす(る)」

形容動詞連用形句+「ものす(る)」の用例は、中古 45 例、中世 41 例(近世はなし、近代の 1 例は擬古文)、総計 87 例採取した。表 3 に用例変化を示す。

表 3 形容動詞連用形句+「ものす(る)」の用例変化

	状態/属性形容動詞	感情形容動詞	補助動詞総計	連用形句+本動詞
中古	37(82.2%)	8(17.8%)	45	9
中世前期	32(88.9%)	4(11.1%)	36	5
中世後期	4(80%)	1(20%)	5	1
近世前期				2
近世後期				10
近代以降	1(100%)		1	2
計	74	13	87	29

中古の 45 例のうち、37 例(82.2%)が状態を表す形容動詞と共起する用例で、残りの 8 例(17.8%)が感情を表す形容動詞と共起する用例である。中世前期では、36 例のうち 32 例(88.9%)、中世後期では 5 例のうち 4 例(80%)が状態を表す形容動詞に後続する。(9)の「ものす(る)」は「ことに(格別である)」という状態の持続を表している。(10)の「ものす(る)」は「弱々しげに」という状態の持続を表している。形容動詞連用形句に接続する類②の場合は、名詞句に接続する①と同じように、「ものす(る)」が断定表現の「なり」に接続し、補助用言となっている(中村 1995 : 42)。中世

後期以降ほぼ廃れる点でも同じ様相を示している。

(9) 花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことにものしたまふ。
 (源氏物語/若菜下:193)

(10) かく弱々しげにものし給へば、
 (風に紅葉/下:91)

③ 形容詞連用形句+「ものす(る)」

形容詞連用形句+「ものす(る)」の用例は、中古 72 例、中世前期 82 例、中世後期 19 例、近世前期 1 例、近世後期 3 例、近代以降 2 例、総計 179 例見られた。表 4 に用例の分布を示す。

表 4 形容詞連用形句+「ものす(る)」の用例変化

時代	状態/属性形容詞	感情形容詞	補助動詞の総計	連用形句+本動詞
中古	68(94.4%)	4(5.6%)	72	21
中世前期	73(89%)	9(11%)	82	7
中世後期	15(78.9%)	4(21.1%)	19	2
近世前期	1(100%)		1	5
近世後期	3(100%)		3	15
近代以降	2(100%)		2	3
計	162	17	179	53

中古では、68 例(94.4%)の用例が、(11)のような、人や物事の性質・状態を表す属性形容詞とともに使われるものである。(12)の「ものす(る)」は「心強う」という状態の持続を表している。中古の補助動詞の例のうち 4 例(5.6%)の用例は、(12)のような、人の感情や感覚を表す感情形容詞とともに使われるものである。この形容詞連用形句に接する類③の用法では、名詞句に接続する①の場合と同じく、「ものす(る)」が断定の助動詞「なり」に後接し、形容詞の補助活用部分になっているという(中村 1995: 41)。

中世では、前期 89%(73 例)、後期 78.9%(15 例)の用例は、属性形容詞とともに使われる用例である。例えば、(13)の「ものす(る)」は「幼い」という状態の持続を表している。一方、感情形容詞とともに使用される用例は、中世前期では 9 例(11%)、後期には 4 例(21.1%)現れる。近世になると、全ての用例が属性形容詞とともに使われるようになっている。(14)の「ものす(る)」は「用心深く」という状態が保たれて

いることを表している。

- (11) 「まだ若うものしたまひけるは、女どもはこれにや似たる」とのたまへば、
(落窪物語：73)
- (12) 父宮聞きたまひて、「(略)さて心強くものしたまふ、いと面なう人笑へなる
ことなり。(略)」と聞こえたまひて、 (源氏物語/真木柱：370)
- (13) 「(略)春宮にこころざし聞こえ給ふな。それはいまだ幼くものせさせ給ふ。
(略)」と責め給ひて、 (海人の刈藻：16)
- (14) 薄情や日属は万のうへに、用心深くものし給ひし、大人の氣質に似げもなく、
(近世説美少年録(2)：217)

④ 副詞句+「ものす(る)」

補助動詞用法とされる用例には、(15)のように副詞に接続する例が僅かに見られる。「ものす(る)」の接続する「はなばなど」は『日本国語大辞典(第二版)』によれば、「明るく派手な美しさであるさま、陽気で活発であるさま、生活や境遇が豊かで満ちたりているさまなどを表す語」であって、様態副詞と言える。(15)は、「はなばなど」という状態の持続を表している。このような様態副詞に後接する「ものす(る)」は、「存在」でも「移動」でもなく、またその他の具体的な動作も想定しにくい。中村(1995:44)によれば、この用法は、「これ(引用者注：前接する副詞)に陳述性を付与している用法」で、「ものす(る)」の独立性が稀薄であるという。副詞句に後接する「ものす(る)」には、その他に「つくづく」と「ものす(る)」も見られる。このような用例は中古に3例、中世に2例と極めて少ない。近世以降は見られなくなっている。

- (15) 宮たちの御裳着の日、磨きしつらはれたり、はなばなものしたまふ殿のや
うにて、 (源氏物語/花宴：363)

⑤ 動詞連用形句+「ものす(る)」

補助動詞用法のうち、最も多いのが動詞連用形句に後接する「ものす(る)」である。考察に入る前に、「動詞連用形+ものす(る)」と「動詞連用形+助詞+ものす(る)」の構文について検討したい。(16)は、動詞連用形句に後接する補助動詞としての「ものす(る)」の用例である。前項動詞(V1)連用形と後項動詞(V2)「-ものす(る)」の間に、「つつ」が介入している。他にも、「ながら」などが介入する用例がある。このよ

うな構文をどのように考えたらよいのか。

- (16) 大将たちよりはじめておりたまふに、衛門督、人よりけにながめをしつつも
のしたまへば、(源氏物語/若菜/下：154)

青木(2013)は、古代語の「動詞連用形+動詞」は基本的に「動詞句+動詞」という構造であると述べる。また、古代語における「V1 連用形+V2」のV1とV2の関係は、現代語と同じ「語」としての緊密性を有しないとして、「だからこそ、古代語ではV1とV2の間に係助詞が介入することも起こり得たわけである」(青木2013:232)という。接続助詞「つつ」「ながら」なども介入するということである。このような「句」的な関係が次第に「語」的な関係へと変化するのは中世室町期頃であり、テ形補助動詞の発達も中世鎌倉・室町期以降において起こっているという。

以上の見方を踏まえ、「動詞連用形+ものす(る)」と「動詞連用形+助詞+ものす(る)」の類を合わせて、「動詞連用形句に後接する「ものす(る)」」として考察する。この類型に当てはまる用例を全て考察対象とし、その上でさらに、呉(2019)に従い、本動詞と補助動詞に分類する。

では具体的な用例を見ながら考察していこう。中古における動詞連用形句に後接する「ものす(る)」の用例は148例であった。そのうち本動詞が78例、補助動詞が70例である。本動詞としての「ものす(る)」に前接する動詞は、「とぶらふ」「出づ」など動作動詞が多い²⁷。一方、補助動詞としての「ものす(る)」に前接する動詞は(17)の通りである。動作動詞より、状態動詞と共起する用例が多い。(18)の「ものす(る)」は「あり」の状態の持続を表している。(19)の「ものす(る)」は「思ひ染む」という状態の持続を表している。

- (17) 補助動詞「ものす(る)」の前接動詞(中古)：ある(4件)、思ひ染む・思ふ(3件ずつ)、おとなぶ・とどむ・うちながむ・心得・す・もてなす・隠る・思す・似る・とまる・なる・あきる(2件ずつ)、思ひ定む・生く・消え入る・負く・うちすつ・とく・よしづく・足らふ・見すつ・怨ず・答ふ・忍ぶ・成り出づ・

²⁷ 中古における本動詞としての「ものす」に前接する動詞の内訳は「とぶらふ(12件)」、「出づ(6件)」、「忍ぶ(4件)」、「書く・取る・つく(3件ずつ)」、「経・思ふ・する・乗る・入る・伝える・語る(2件ずつ)」、「のぼる・騒ぐ・聞き付く・立つ・かかる・語る・追ふ・まさる・尽くす・まぼる・持つ・よろこぶ・おしはかる・来・通ふ・なずらふ・迎ふ・棄つ・まじなふ・籠る・過ぐ・なる・添ふ・好む・進む・移ろふ・問ふ・渡る・思し止む・つくろふ・集む・思す・す・隠ろふ(1件ずつ)」である。

たぐふ・語らふ・痴る・出づ・もてしづむ・静まる・うけばる・まさる・変
る・あいだる・あらはる・和む・うちとく・従ふ・聞こゆ・たわむ・心おく・
生き出づ・もどく・すぐる・思しすつ・埋もる・軽む(1件ずつ)

(18) (柏木)「(略)女御、后もあるやうありてものしたまふたぐひなくやは。(略)」
とのたまへば、 (源氏物語/若菜下：220)

(19) 女は、いと恥づかしと思ひしみてものしたまふも、ねびまされる御ありさま、
いとど飽かぬところなくめやすし。 (源氏物語/藤裏葉：441)

中世においては動詞連用形句に後接する「ものす(る)」の用例が 84 例採取できた。
うち本動詞用法が 46 例、補助動詞用法が 38 例である。本動詞としての「ものす(る)」
に前接する動詞は「出づ」「率る」など中古と同様に動作動詞が多い²⁸。

補助動詞としての「ものす(る)」に前接する動詞連用形句の動詞の内訳は、(20)の
通りである。状態動詞と共起する用例も多いが、継続的な動作を表す動詞と共起する
用例の割合が増えている。(21)の「ものす(る)」は、「語らふ」という動作の継続を表
している。

(20) 補助動詞「ものす(る)」に前接する動詞：(中世前期)すぐる・ながらふ・思
ふ・居る・語らふ(2件ずつ)、いづ、生き出づ・なる・渡る・去る・添ふ・
なぞらふ・世づく・合はす・思ひ消ゆ・取り持つ・並ぶ・慰む・うちとく・
隠る・かへる・聞こえ合ふ・過ぐ・弾きすさぶ・きく・出づ、す、沈む(1件
ずつ)、(中世後期)慕ふ・ひそむ・違づ・ゆづる・あり(1件ずつ)

(21) 雨うち降りてしめやかなれば、うち語らひてものし給ふほどに、暮れ行くに
は、 (海人の刈藻：96)

近世には動詞連用形句に後接する「ものす(る)」の用例が 31 例見られた。うち本
動詞としての用例が 24 例、補助動詞としての用例が 7 例である。補助動詞としての
「ものす(る)」に前接する動詞連用形句の動詞は「言ふ(2件)」「打ちかく・うつぶす・
集む・よぶ・かく(1件ずつ)」である。いずれも動作動詞と共起する用例である。(22)

²⁸ 中世前期における本動詞としての「ものす(る)」に前接する動詞の内訳は、「出づ(17件)」、「率る
(4件)」、「添ふ・籠る・す(2件ずつ)」、「思ふ・続く・聞ゆ・いざなふ・忍ぶ・迎ふ・訪る・渡る・
紛る・通ふ(1件ずつ)」であり、中世後期は「忍ぶ(2件)」、「とどむ・渡る・す・過ぐ・具す(1件ず
つ)」である。

は、動作主につらく思うことがあり、そのことについてひたすら喋っている場面である。動作主の移動の動作がなく、じっとしているわけでもないため、「ものす(る)」は補助動詞として「言ふ」という動作の継続を表しているといえる。近現代に入ると、補助動詞用法はなくなっている。

(22) やはらの師にわぶることありてひたすらいひものすれど、

(徳和歌後万載集：422)

ここで、改めて補助動詞用法の「ものす(る)」に前接する動詞について検討する。表5に、「ものす(る)」に前接する動詞の種類を示す。表5を見ると、「ものす(る)」に前接する動詞が状態動詞から動作動詞へと変化しているのが分かる。

表5 動詞連用形句+「ものす(る)」における前接動詞の種類

	状態動詞	動作動詞	補助動詞の総計	連用形句+本動詞
中古	34(48.6%)	36(51.4%)	70	78
中世前期	13(39.4%)	20(60.6%)	33	39
中世後期	2(40%)	3(60%)	5	7
近世前期		3(100%)	3	6
近世後期		4(100%)	4	17
近代以降				6
計	49	66	115	153

中古から近現代までの変化を見ると、動作動詞の使用が中世から増えており、状態動詞の使用がなくなっている。中古では、「ものす(る)」に前接する動詞連用形句における動詞が、状態動詞が34例(48.6%)、動作動詞が36例(51.4%)である。中世前期には、状態動詞が13例(38.4%)、動作動詞が20例(60.6%)になる。中世後期には、状態動詞が2例(40%)、動作動詞が3例(60%)になる。近世以降は、全ての用例が動作動詞と共に使われるようになっている。本動詞としての「ものす(る)」に前接する動詞は、ほとんどが動作動詞である(脚注27・脚注28参照)。なお、動詞と共起せず、独立動詞として単独で用いられる「ものす(る)」は近世以降から用例が増える。その代用する動作は動作対象に変化を与えるという特徴を持つ((23)「金子が盗まれた」の意味)。角田(2009)では、動詞の自動性の程度の高低は「状態>動作>変化(引用者注：動作主の行為による対象物の変化)」のようになっているという。「ものす(る)」

の場合は、全体的に、他動詞化という変化が見られる(第二章)。

- (23) 只「彼金子をものせん」とて、辛くして小箆筥なる、財囊を撈り得て抜出す
に、 (近世説美少年録(3):97)

4. 考察

以上、「ものす(る)」の補助動詞用法について歴史的変化を調査した。本節では3節までの観察を踏まえ、「ものす(る)」の補助動詞用法が失われた要因を探る。3節からわかるように、補助動詞としての「ものす(る)」の減少は中世後期からである。ではこの時期の「ものす(る)」には、どのような変化が起こったのか。

まず、①名詞句+(に(て))「ものす(る)」の用法が、「名詞句+に(て)あり」に相当することに注目したい。つまり、「ものす(る)」は、断定の助動詞「なり」の連用形「に」に接続助詞「て」等を介して後続する補助動詞「-あり」を代用し、「ものしたまふ」の形で、敬語形をなしている。しかし、12世紀中期から後期には、断定表現「にてあり」が文法化し、補助動詞「あり」はその一部となった(吉田(2019))。さらに、院政期の「にてあり」は、「にて」が「で」に変化するとともに、連体形・終止形同化により「-あり」が「-ある」に変化し、断定の意を表す「である」が形成されたという(山口(2002))。このような補助動詞「-あり」の衰退(機能語の一部への変化)と共に、「-あり」を代動詞や敬語動詞に置き換えること(敬語化)も、できなくなったのではないか。これによって、敬語形で多用される補助動詞「ものす(る)」も、「-あり」の代用ができなくなった結果、衰退していったと考える。

②形容動詞連用形句+「ものす(る)」の場合も同様に考えられる。名詞句+「にてあり」の衰退と同じ時期に、ナリ活用形容動詞の連用形「-に」に接続助詞「て」が接続した「にて」は「-で」へ、終止形「にてあり」は「である」へ変化した(浅川・竹部(2014))。つまり、補助動詞「-あり」の衰退(機能語の一部への変化)は補助動詞「ものす(る)」の衰退を招いた大きな要因と考えられる。④副詞句+「ものす(る)」の消失もこの変化の中で理解することができるだろう。

一方、動詞句に接続する類⑤、形容詞連用形句に接続する類③の衰退は、①名詞句・②形容動詞連用形句・④副詞句に接続するタイプの衰退にやや遅れる(表1)。③⑤の衰退には、①や②と同じく「あり(ある)」の機能変化が関与すると言っても、特に存続という機能の変化が関与していると考えられる。それは、状態や動作の継続というアス

ペクトを表す「てある」の確立である。青木(2013)は、テ形補助動詞の発達は、いずれも中世鎌倉・室町期以降に起こっているという。「てある」の成立もこの時期である(神永(2015))。①②④の類の衰退にも、③⑤の類の衰退にも、補助動詞の「あり」が機能語「に(て)あり」「てあり(てある)」の一部になるという変化が関与した、ということである。つまり、「ものす(る)」が代用していた「動詞」が形態的な資格を失い、その結果、補助動詞「ものす(る)」の衰退につながったと考えられるのではないだろうか。

また、補助動詞としての「ものす(る)」の用例のほとんどが「たまふ」や「はべり」など、敬語とともに使われる用例であるという点も重要である(本動詞の場合は、50%近くの用例が敬語を伴わない)。補助動詞「ものす(る)」計 599 例のうち、敬語を伴わずに用いられる用例は僅か 11 例(中古 7 例、中世 1 例、近世 1 例、近代 2 例)である。また、敬語を伴う用例においては、特に動作主尊敬の「たまふ」を伴うものが 90%以上を占める。では、「たまふ」の使用は補助動詞としての「ものす(る)」の変化、とりわけ衰退に関与しているのだろうか。この点を考えるために文体ジャンルの面から用例の推移を改めて整理してみよう(表 6)。

表 6 からわかるように、補助動詞としての「ものす(る)」の用例は、ほぼ「物語」というジャンルに大きく偏っている(本動詞の場合は、中古では「日記」(『蜻蛉日記』のみ)、近世では「読本」、近現代では「小説」というジャンルを中心に分布する)。3 節で述べたように、補助動詞としての「ものす(る)」は、動作主の動作の持続、あるいは状態・属性の持続を表している。これらの用例は、ほとんど中古の『源氏物語』や中世の「王朝物語」「歴史物語」で用いられ、貴人の動作を表している。「物語」以外の使用はごく少なく、中世以降は擬古的な文章の中で稀に見られる程度である。中世以降、貴人の生活が描写される物語類が少なくなり、補助動詞としての「ものす(る)」は、貴人の動作や状態の持続を表す環境を失ったといえる。

深町(1987)によれば、尊敬の補助動詞「たまふ」は、平安時代には貴族社会の女性を中心に多用され、特にその傾向が『紫式部日記』や『更級日記』などに顕著であるという。しかし、中世末期には、「たまふ」の衰弱が一般化し、『天草版平家物語』では「たまふ」が消滅していると述べている。つまり、貴人の生活を描写する物語類の減少と、「たまふ」の衰退があいまって、「ものしたまふ」という表現の使用も衰退したと考える。

表6 ジャンルごとにおける補助動詞としての「ものす(る)」の使用

時代	ジャンル	用例数
中古 288例	歌集	
	説話	
	物語	283
	日記・紀行	3
	随筆	2
	軍記	
中世 296例	歌謡	
	説話・随筆	3
	日記・紀行	1
	王朝物語	264
	歴史物語	25
	軍記	
	狂言	
	キリシタン資料	
	物語評論	2
	御伽草子	1
	能	
	抄物	
	近世 12例	狂言・狂言記
近松浄瑠璃		
咄本		5
仮名草子		
浮世草子		
洒落本		
滑稽本		1
人情本		
黄表紙		
読本		4
連歌・俳諧		
歌・歌論書		2
歌舞伎		
随筆		
近代以降 3例		小説
	雑誌	2
	教科書	
	ブログ	
	国会会議	

5. おわりに

本章では、「ものす(る)」の補助動詞用法の史的様相を観察し、衰退の原因について考察した。古代語の「ものす(る)」には、「ある・居る・行く・来る」などの動詞と同じように、古語でテ形に後接する用法や、複合動詞の後項として使用される補助動詞用法があった。「ものす(る)」のテ形接続用法も複合動詞用法も両方ある程度の用例があったが、「-てもものす(る)」という形で補助動詞用法を発達させることはなかった。その衰退の原因について、本章では、①「補助動詞「あり」の衰退」、②「作品ジャンルの制約」、③「尊敬の補助動詞「たまふ」の衰退」という3点を指摘した。補助動詞「あり」を代用することで表していた「ものす」の補助動詞としての機能・用法は、「である」「てある」の成立で失われ、必要性がなくなっていた。また、「ものしたまふ」の存在意義は、敬意の対象となる貴人の状態の叙述を、「ものす(る)」

を用いて間接的に表現するところにあった。ゆえに、「貴人の生活を描写する物語類というジャンル」の減少、すなわち「たまふ」が多用される文体の狭まりとともに、補助動詞としての「ものしたまふ」の使用も衰退したと考えられる。いずれもさまざまな角度からの検証が必要であるが、今後の課題としたい。

なお、「ものす(る)」という語の使用は、近世期以降も特定の文体・ジャンルで存続する。第五章では、本動詞用法・補助動詞用法を問わず、文体史の観点から「ものす(る)」の変化を考察する。

参考文献

青木博史(2013)「複合動詞の歴史的変化」『複合動詞研究の最先端-謎の解明に向けて-』影山太郎(編), pp. 215-241, ひつじ書房

- 浅川哲也、竹部歩美(2014)『歴史的变化から理解する現代日本語文法』おうふう
- 小島聡子(2001)「平安時代の複合動詞」『日本語学』20-9, pp. 71-78
- 小田勝(2015)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
- 神永正史(2015)「中世末のテアル文にみられる完成の用法について」『日本語の研究』11-02, pp. 1-15
- 呉寧真(2019)「動詞連用形に後接する「ものす」」『国学院大学大学院紀要. 文学研究科』(50), pp. 19-33
- 角田太作(2009)『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』くろしお出版
- 中村幸弘(1995)『補助用言に関する研究』右文書院
- 深町幸子(1987)「『平家物語』における「る・らる」「給ふ」について」『九州大谷国文』(16), pp. 56-67
- 山口堯二(2002)「「である」の形成」『京都語文』09, pp. 47-87
- 吉田永弘(2019)『転換する日本語文法』和泉書院

辞書・検索コーパス

- 『日本国語大辞典』第二版(2000) 小学館
- JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com/library/>)
- 国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2022. 10, 中納言バージョン 2. 7. 0)
- 全文検索システム『ひまわり』日本語用例検索・青空文庫所収文学作品
(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/>)
- 日本古典文学大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>)
- 漸本大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon>)
- 見出し語検索 NINJAL-LWP for BCCWJ (<http://nlb.ninjal.ac.jp/search>)

使用テキスト

- 【中古】『新編日本古典文学全集』(小学館): 竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記

【中世】『新編日本古典文学全集』(小学館)：宇治拾遺物語、徒然草、十訓抄／『日本古典文学大系』(旧版)(岩波書店)古今著聞集、御伽草子／『中世王朝物語全集』(笠間書院)：あきぎり・浅茅が露、海人の刈藻、いはでしのぶ、石清水物語、木幡の時雨・風につれなき、苔の衣、恋路ゆかしき大将・山路の露、小夜衣、しのびね・しら露、雫ににごる・住吉物語、とりかへばや、八重葎・別本八重葎、松浦宮物語・雲隠六帖、風に紅葉・むぐら、松陰中納言、夜寝覚物語、我が身にたどる姫君(上)・(下)、夢の通ひ路物語(上)・(下)、物語絵巻集／『水鏡大鏡今鏡増鏡』(国民文庫刊行會)／『續抄物資料集成』(清文堂)

【近世】『洒落本大成』／『新日本古典文学全集』(小学館)：好色一代男、好色一代女、好色五人女、男色大鑑、近世俳句集、松尾芭蕉集、近世俳文集、仮名草子集、東海道中膝栗毛、近世説美少年録、西山物語、雨月物語／『日本古典文学大系』(旧版)(岩波書店)：松尾芭蕉集、歌舞伎脚本集、韓人漢文手管始、風来山人集、近世文学論集、川柳狂歌集、近世和歌集、浮世草子集、春色梅兒譽美、折たく柴の記、近世思想家文集、歌舞伎十八番集／『噺本大系』(東京堂)：昨日は今日の物語、狂哥咄、千里の翅、白癡物語、立春噺大集、戯言養気集、軽口筆彦噺、会席噺袋、宇喜蔵主古今咄揃、正直咄大鑑、軽口星鉄炮、あごの掛金、落咄顛懸鎖、杉楊子、初音草噺大鑑、臍が茶、新選勸進話、臍の宿かえ、はなしのいけす、落噺常々草／『叢書江戸文庫』(国書刊行會)：漂流奇談集成、百物語怪談集成、前太平記、前々太平記、都の錦集、伴藁蹊集、八文字屋集、馬場文耕集、佚斎樗山集、近松半二浄瑠璃集、江戸作者浄瑠璃集、仏教説話集成、近世紀行集成、山東京伝集、滑稽本集、式亭三馬集、近世説美少年録、文化二年十一月江戸三芝居顔見世狂言集、役者合巻集、中本型読本集、近世奇談集成、石川雅望集、浅井了意集、浮世草子時事小説集、森島中良集、馬琴草双紙集、浮世草子怪談集、柳亭種彦合集、人情本集、小枝繁集、多田南嶺集、十返舎一九集、竹本座浄瑠璃集(一)・(二)・(三)、豊竹座浄瑠璃集(一)・(二)・(三)、只野真葛集、東海道名所記、原典落語集、福森久助脚本集、西沢一風集

第五章 文体史から見る「ものす(る)」の変化

1. はじめに

第二章において観察したように、中古の「ものす(る)」は、主に(1)のように、貴人の行動を中心に、様々な動作を代用する。中世においても、ほとんどの用例は、貴人の動作を表している((2))。一方、近世の「ものす(る)」には、(3)のように、「横領する、盗む」の意をぼかした隠語的な用法も出現する。しかし、現代日本語の「ものす(る)」は、「作る、完成する」のような、詩や文章などを作り上げるという意味で用いられるようになる((4))。

(1) 例のほどにものしたれど、そなたにも出でずなどあれば、居わづらひて、この文ばかりを取りて帰りにけり。
(蜻蛉日記：117)

(2) 「(略)このものせさせたまふ病者、誰にか」と言ふにも、
(とりかへばや：49)

(3) 目が見へるものを(北八)「そんならおいらがものしたものも、ものしやアがつたにちげへはねへ」
(東海道中膝栗毛：447)

(4) これほどの素晴らしい小説をものしたスー・ハリソンでしたが、持ち込んだ先々で出版を断られその数は16社に登ったそうです。

(Yahoo!ブログ、2008、趣味)

(1)～(4)の用例は、それぞれの運用される文体・ジャンルが異なっている。では、古代日本語から現代日本語にかけて、「ものす(る)」に生じたこのような意味変化は、文体・ジャンルの使い分けが関わっているのだろうか。そこで本章では、文体的な観点から「ものす(る)」の用例を調査する。

2. 問題点

まず、文体的な観点から「ものす(る)」の歴史的変化を述べる必要性を説明する。第二章では、「ものす(る)」を本動詞用法と補助動詞用法に分け、その用例数の変化について調査した。その結果、「ものす(る)」の本動詞用法は中古と中世では補助動詞用法より多く使用されるものの、それほどの優勢ではなかったという様相を明らかにした。近世以降、本動詞用法が増加し、近現代に至るとほぼ本動詞用法だけが残る

ようになっている。また、第二章ではさらに本動詞用法を中心として、自動詞と他動詞に分けて考察を行った。結果として、本動詞としての「ものす(る)」は文献に用例の現れる中古期以来、自動詞用法と他動詞用法とが見られるが、自動詞用法が次第に減少し、他動詞用法が増加する変化が見えることを確認した。

次に、第三章では、存在を表す「ものしたまふ」の用例が中世後期から減少し始め、近世以降ほぼ衰退することがわかった。その衰退する原因を明らかにするため、中世における存在を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の比較研究を行った。特に注目したいのは、存在を表す「ものしたまふ」だけではなく、「ものす(る)」自体の用例が軍記物語・狂言・キリシタン資料などに一切見られなかったことである。この点について、それぞれの語彙項目の個性も反映していると思われるが、ジャンルの制約にも起因していると考えられる。

さらに、第四章では、「ものす(る)」における補助動詞用法の消失について考察した。その衰退の原因について、以下の3点を指摘した。

- ①「補助動詞「あり」の衰退」、
- ②「作品ジャンルの制約」、
- ③「尊敬の補助動詞「たまふ」の衰退」

以上のように、「ものす(る)」に関する歴史的変化を観察すると、いずれの観点においても、資料性の違い、ジャンル別の使い分けと大きな関係性があることがわかる。第一章で見たように、中古和文で頻用された「ものす(る)」は近世期には雅語として位置づけられた。用法を変化させながらその「雅語」としての位置づけがなされた経緯、現代語まで残されてきた過程については、文体・ジャンルの観点に関連付けながら検討する必要があると考えられる。

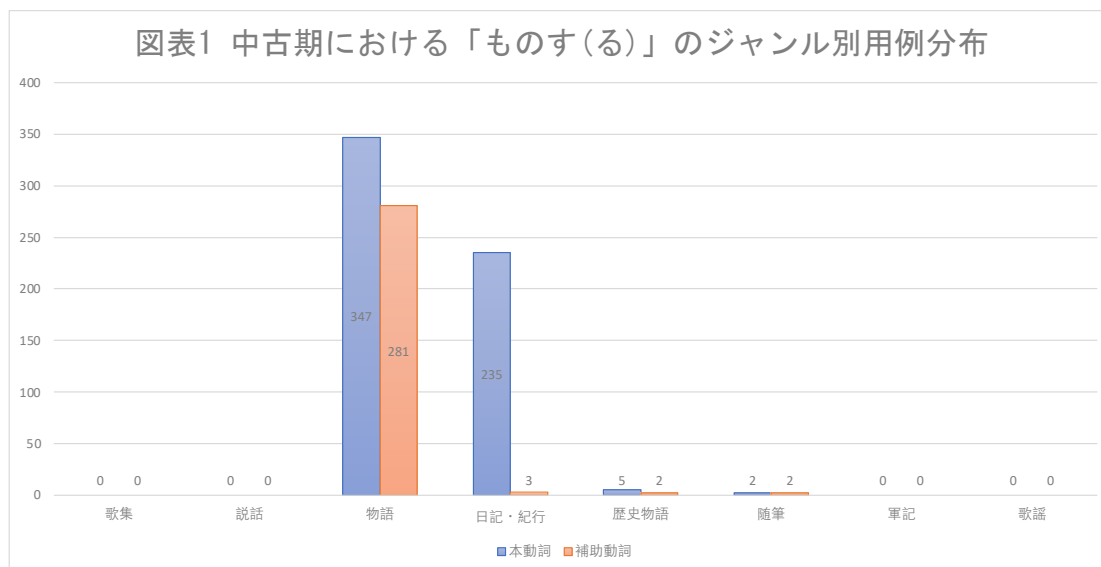
3. 中古の和文作品における「ものす(る)」

3.1 ジャンルによる使用

本節では、中古の和文作品を中心に「ものす(る)」の使用についてまとめていく。図表1に、ジャンル別²⁹に「ものす(る)」における用例分布を示す。ジャンルにより、大きな偏りが見られる。

²⁹ ジャンルは『日本語学大辞典』、『日本語学研究事典』、『日本語歴史コーパス』(CHJ)、ジャパンナレッジ(<http://japanknowledge.com/library/>)などにより分ける。

図表1 中古期における「ものす(る)」のジャンル別用例分布



なお、上代には、「ものす(る)」の使用が確認できない。上代の文献は和歌、宣命、記紀歌謡などに偏っており、このことが上代に「ものす(る)」の用例が得られない一因として挙げられる。

図表1から、中古における「ものす(る)」の使用は、歌集・説話・軍記・歌謡に確認できず、「物語」と「日記」という二つのジャンルに集中していることがわかる。上代の文献資料は和歌、宣命、記紀歌謡などに偏っており、上代に「ものす(る)」の用例が得られない一因として、上代文献の偏りという点が挙げられる。中古における「ものす(る)」は、仮名文学散文作品だけに偏在するとも言えよう。このことは、近世における、和歌の雅語を中心とした辞書・語彙資料に、「ものす(る)」が立項されていないことにも影響している。

歌集・歌謡に「ものす(る)」の用例が確認できない理由は、「ものす(る)」が歌語ではないためであると考えられる。和歌集における和歌だけではなく、物語や日記などの作品で詠まれる和歌にも、「ものす(る)」は現れない。また、「ものす(る)」は、代動詞であり、代用する動作を直接言わずに、あえて臙化する婉曲表現である。和歌は韻文作品であるため、比喻などの修辞法が使われるが、対人的な待遇表現や臙化する表現は必要ないのではないかと考える。

では他のジャンルではなぜ用例の確認ができないのだろうか。まず、説話について考察する。調査範囲の中で、中古の説話に該当する作品には、『日本霊異記』と『今昔物語集』がある。『日本霊異記』について『日本語学研究事典』は、(5)のように述べ

ている。『今昔物語集』については(6)のように述べている。

- (5) 中国の『冥報記』や『金剛般若経集験記』にならって選述せられた日本の仏教説話集。(中略)和化漢文による最古の説話集である。本文は語序・措字上不整な一種の変体漢文で記録されていて文章・文体上の価値がある。

(『日本語学研究事典』: 697、『日本靈異記』項目、執筆者: 吉田金彦)

- (6) 巷間に流布している説話を直接採用したものもあろうが、ほかにいろいろの仏典・史書・伝記・説話集などから集めたものも多く、『三宝感応要略録』『法苑珠林』『経律異相』『冥報記』『大唐西域記』『過去現在因果経』『孝子伝』『日本国現報善悪靈異記』『日本往生極楽記』『本朝法華験記』『地藏菩薩靈異記』『三宝絵詞』などが出典として指摘されている。これらの漢文の出典から説話を抜き出し、それを翻訳するに当たり、(中略)文体は和漢混淆文の形をとり (『日本語学研究事典』: 831、『今昔物語集』項目、執筆者: 佐藤武義)

つまりこの二つの説話集は、文体において「変体漢文」の要素を持ち、「漢文の出典から」抜き出された「和漢混淆文」と考えられている。一方、軍記物の『将門記』について、先行論では(7)(8)のように評価されている。同じく軍記物の『陸奥話記』については、(9)(10)のように述べられている。

- (7) 正規の漢文体ではなく、変体漢文とか和臭漢文とか呼ばれる特異な漢文体
(加美 2000 : 12)

- (8) 本文は和臭の強い変体の漢文で書かれ、作者の漢文的素養が問題視される
(『日本語学研究事典』: 699、『将門記』項目、執筆者: 志立正知)

- (9) 『漢書』に限らず、『後漢書』『宋史』『史記』『論語』『文選』『荘子』などに依拠すると思われる箇所を例示し、(略)また、兵書の影響も大きい
(高山 2000 : 205)

- (10) 本文は真名書きで、『将門記』に比べると、はるかに正統的な漢文体で綴られており、漢籍の引用が多く、場面や人物の描写・造形においても、漢籍の強い影響が指摘されている。

(『日本語学研究事典』: 700、『陸奥話記』項目、執筆者: 志立正知)

これらの資料の共通点は、漢籍・漢文の強い影響下に成立し、「変体漢文」「和臭の

強い変体漢文」「漢籍の引用」「正統的な漢文体」としての文体的特徴を備えていることである。以上のように、中古における「ものす(る)」は、仮名文、すなわち「和文」以外の文章には使えないとも言える。中古期においては、「ものす(る)」は「和文」で使用されるという制約が強く、漢文や変体漢文、和漢混淆文のような「漢文体」の影響が強い資料には使われていない。

3. 2 作品別による使用

3. 1 節で述べたように、中古の「ものす(る)」の用例は「物語」と「日記」という二つのジャンルに集中している。では具体的な作品別の使用頻度はどうであろうか。表 1 に「ものす(る)」の使用頻度を示す。

表 1 中古作品の総語数³⁰と「ものす(る)」の使用頻度³¹

作品名	総語数	「ものす(る)」	相対頻度×10,000
蜻蛉日記	47264	231	48.87
源氏物語	445715	551	12.36
落窪物語	54586	47	8.62
大和物語	23091	17	7.36
平中物語	12403	6	4.83
堤中納言物語	15696	5	3.18
讃岐典侍日記	7772	2	2.57
大鏡	35633	7	1.96
土佐日記	6685	1	1.49
紫式部日記	17442	2	1.14
竹取物語	10316	1	0.96
和泉式部日記	10891	1	0.91
伊勢物語	13825	1	0.72
更級日記	14660	1	0.68
枕草子	66037	4	0.60

³⁰ 中古における作品の総語数は『日本語歴史コーパス』(CHJ)による。

³¹ 作品の配列順は「相対頻度」の降順による。数値は便宜的に「相対頻度」×10,000 で示す。以下同様。

表1からわかるように、『蜻蛉日記』『源氏物語』において「ものす(る)」の用例が多く、他の作品に比べると使用頻度が高い。しかし、相対頻度から見ると、『蜻蛉日記』における使用頻度が特に高い。

では具体的に用例を見る。(11)の「ものす(る)」は本動詞用法である。動作主の「むすめ」には移動の動作があり、「ものす(る)」が複合動詞の後項「-来」の代動詞として使われていることがわかる。(12)の「ものす(る)」は、「中将などでいらっしゃった時分」という状態を表している点から、補助動詞用法である。中古における「ものす(る)」の用例は、本動詞用法にしても、補助動詞用法にしても、敬語形「たまふ」や「侍り」などが伴う例がほとんどである(東辻(1960)、近藤(1995)、中村(1995))。この種の用例が、物語類に集まっている。

(11) さて、この心かけしむすめ、こと男して、京にのぼりたりければ、聞きて、兼盛、「のぼりものしたまふなるを告げたまはせで」といひたりければ、
(大和物語：291)

(12) まだ中将などにものしたまひし時は、内裏にのみさぶらひようしたまひて、大殿には絶え絶えまかだたまふ。
(源氏物語/帚木：53)

一方、敬語を伴わない用例も見られるが、ほぼ『蜻蛉日記』の用例である(13)。「蜻蛉日記」における「ものす(る)」には、他の中古和文作品同様に敬語を伴う用例も見られるが、他人の動作を代用する時の尊敬語用法に限られる。敬語を伴わない例は例えば、(14)のようなものである。この例では、作者の道綱母が自分自身の動作を描写する際に、「ものす(る)」は敬語を伴わず本動詞として用いられ、「入浴する」という動作を代用している。(15)の「ものす(る)」は、「按察使大納言」の移動の動作を代用する。このような他者の動作を表す時には、『蜻蛉日記』においても尊敬の補助動詞「たまふ」を伴っている。ただし、物語類や中世の王朝物語、近世の擬古文では、ほぼ後者の用法(他者の動作を臚化する表現)が継承され、自分の動作を臚化する表現としてはほとんど用いられない。

(13) さて、寺へものせしとき、とかう取り乱りしものども、つれづれなるままにしたたむれば、
(蜻蛉日記/上：134)

(14) 湯などものして御堂にと思ふほどに、里より心あわたたしげにて人走り来たり。
(蜻蛉日記/中：228)

- (15) 川のあなたには按察使大納言の領じたまふところありける、「このごろの網代御覧ずとて、ここになむものしたまふ」と言ふ人あれば、

(蜻蛉日記/下：283)

作品別に見ると、「物語」というジャンルでは、『源氏物語』の総語数が圧倒的に多いため、「ものす(る)」の用例(相対頻度)が最も多いことはおかしくない。しかしその他の物語類にも一定数の用例が見られる。一方、「日記」というジャンルの合計 238 例の内訳を見ると、『土佐日記』1 例、『和泉式部日記』1 例、『紫式部日記』2 例、『更級日記』1 例、『讃岐典侍日記』1 例であり、残りの 231 例は全て『蜻蛉日記』での用例である。『蜻蛉日記』の作品名には「日記」という語が含まれ、ジャンルの観点では、『日本語学大辞典』に示されているように「日記」に分類される。しかし、文学史的な評価においては「上巻(私家集的)・中巻(日記的)・下巻(物語的)」とも言われるように、多様な内容・文体を包含する「作品」と言われている(『日本語学研究事典』:681、『蜻蛉日記』項目、執筆者：石坂妙子)。下巻は上巻・中巻に比べると、最も著しい特色の一つとして、はなはだしく物語的に描かれていることが指摘されている(木村 1967:10)。『蜻蛉日記』のこのような叙述は『源氏物語』をはじめとする平安の文学に多大な影響を与えたという(石坂妙子『日本語学研究事典』)。実際に『蜻蛉日記』における「ものす(る)」の用例を見ても、上巻は 35 例、中巻は 89 例、下巻は 107 例であり、物語的な文体とされる下巻の用例が最も多い³²。

つまり中古における「ものす(る)」の使用は仮名文学作品の中でも、「日記」というジャンルより、「物語」、特に漢文の影響が少ない典型的な和文物語のジャンルに偏っていると言えよう。

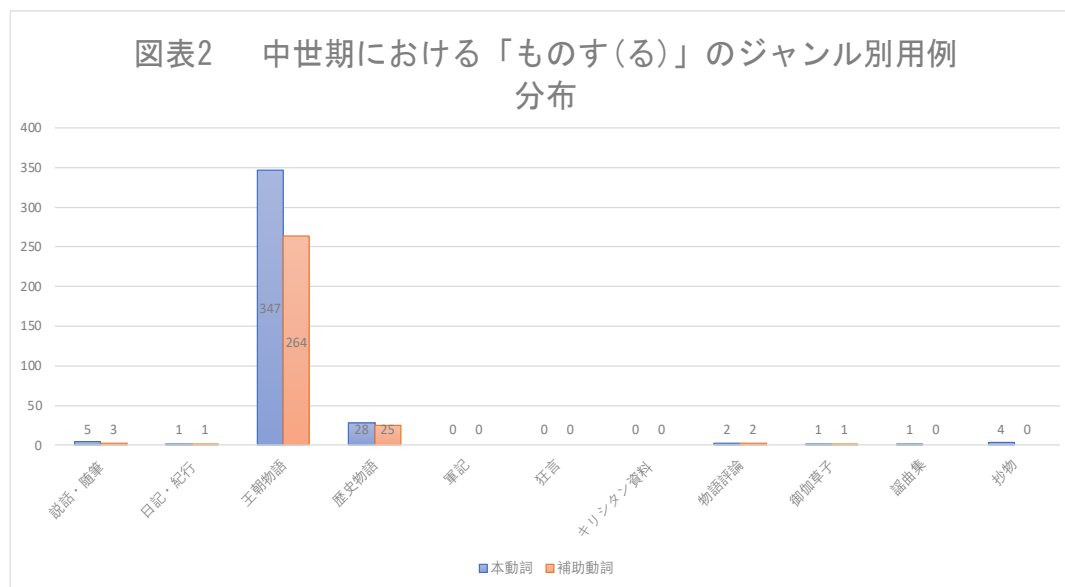
4. 中世の王朝物語と歴史物語における「ものす(る)」

4.1 ジャンルによる使用

中世における「ものす(る)」のジャンル分布にも大きな偏りが認められる。図表 2 に中世期における「ものす(る)」をジャンル別に用例の分布を示す。図表 2 に表したように、ほとんどの用例は王朝物語と歴史物語に現れている。

³² 『日本語歴史コーパス』(CHJ)における『蜻蛉日記』の総語数は、上巻 12174 語、中巻 17769 語、下巻 15852 語、巻末歌集 1469 語である。

図表2 中世期における「ものす(る)」のジャンル別用例分布



また、一方、軍記・狂言・キリシタン資料というジャンルには「ものす(る)」の用例が一切見られない。では、王朝物語・歴史物語以外で「ものす(る)」の用例が見られるジャンル(物語評論、御伽草子、謡曲集、抄物など)、あるいは見られないジャンル(軍記・狂言・キリシタン資料など)の文体的特徴の違いはどのようなものであろうか。

まず、王朝物語と歴史物語に「ものす(る)」の用例が偏在する点について考える。一つの大きな原因としては、大多数の中世王朝物語と歴史物語が、中古の物語類、特に『源氏物語』に影響を受けている(藤井 2010)という点が挙げられる。説話・随筆、物語評論、御伽草子や、謡曲集、抄物といったジャンルにも若干の用例が見られる。このうち用例の見られる説話・随筆(『宇治拾遺物語』『十訓抄』『徒然草』)、物語評論(『無名草子』)、御伽草子(『福富長者物語』)、『謡曲集』(『古作の能 浮舟』)は、それぞれ多かれ少なかれ中古の和文物語の影響が認められている。やはりこの点が要因となって「ものす(る)」の用例が見られると考える。

一方、抄物にごく僅かに見られた用例は、(16)や(17)のようなものである。

(16) 詩案ニノセテ 神宗へ王呂ノ黨カ 説ソ 神宗ノ其ハ詩人ノモノスル立意
ソ (古文真宝桂林抄・乾/前赤壁賦: 42)

(17) 「君ハ似タリ不ルニ及」モノシタル辞ソ (漢書抄・一/蕭曹第九: 42)

(16)は、北宋の蘇軾の「烏台詩案」についての記述である。蘇軾の詩文が神宗皇帝

を誹謗したと告発され、投獄されて処刑されようとした時、「王呂ノ黨」（王安石、呂惠卿の派閥）が神宗皇帝に翻意するよう（処刑を思いとどまるよう）請願する場面である。「神宗ノ其（朝廷の政を誹謗した詩案）ハ詩人ノモノスル立意（蘇軾の作り上げた詩（の主張）」であると述べている。皇帝に対する発話であるため、「誹謗を含む詩を作り上げた」というマイナスのことをわざとぼかして「ものす(る)」で表現していると考えられる。(17)は、漢の漢惠帝と丞相になったばかりの曹参の対話の場面に対する注である。曹参が漢惠帝に自分と前の丞相である蕭何を比較してどちらが賢いかと問い、漢惠帝は「君(曹参)ハ(蕭何に)似不及(及ばないようである)」と答えた。「モノシタル辞ソ」というのは、この句が皇帝の発話であるという意味で、皇帝の「言う」という動作を臚化する代動詞として用いられている。抄物はもともと室町時代の漢籍や仏典などを注釈した口語資料であり(来田 2018:90)、内容は漢籍や仏典に即しているが、注釈は当時の日本語、口語で与えられている。珍しい用例で当時の口語に保持されているとまでは言えないが、用法としては中古和文の「ものす(る)」の代動詞用法の範囲で理解できる。いずれも皇帝に対する発話場面や皇帝の動作を臚化する用例であって、「ものす(る)」は中古和文の貴族社会の用法を踏まえて用いられていると考えておく。また、この二例は皇帝に対する発話/皇帝の動作を表す用例にもかかわらず、「たまふ」や「はべり」などの敬語補助動詞が付いていない。中世後期の「ものす(る)」はそれ自体が敬語動詞として使われていると考えられ、雅の言葉として認められていた可能性を示すと考える。

次に「ものす(る)」の用例が現れないジャンルについて考えよう。まず、鎌倉時代以降の『平家物語』や『太平記』などの軍記物語の文体について確認したい。軍記物語の文体は和漢混淆文とされることが多い。『日本語学大辞典』では「和漢混淆文」を以下のように解説している。(棒線部は筆者による)

- (18) 従来用いられた概念は必ずしも明確でないが、和文と漢文(訓読)との混用の文の意に用いられ、表記の上からは多く漢字仮名交り文をさして、具体的には主として鎌倉時代以降の『平家物語』『太平記』等の軍記物語等の文体をいう。この種の文は、中古の和文と漢文訓読文の語法に基づき、漢語を多く加え、更に中世以降の俗語なども併用し、その中には変体漢文の要素も多いのが普通である。

(『日本語学大辞典』: 1028 「和漢混淆文」項目、執筆者: 築島裕)

ここで「漢語を多く加え」という特徴について着目する。『日本古典対照分類語彙表』によれば、『平家物語』の漢語の割合は『源氏物語』より高くなっている³³。佐藤(1966)によると、『平家物語』の漢語は平安時代の仮名文学作品に用いられるもの、記録語文に用いられるもの、日本漢詩文に用いられるものが受容されているという。前田(1972)にも、『平家物語』は場面に応じて俗語・古語・漢語を用い、文体を変えているものであるという指摘がある。また、増田(2002)は、『太平記』の場合は、多くの漢籍や仏典などの影響を受けていると述べている。この漢文体の特徴が、「ものす(る)」の出現/運用に対して制約となったと考える。

次に、狂言の場合は、当時の口語世界が再現され、俗語的な語彙が多く見られるという(小林(2020))。また、キリシタン資料は、全体として、当時(16、17世紀)都で話されていた標準的口語で書かれているものという(『日本語学大辞典』:225、「キリシタン資料」項目、執筆者: 丸山徹)。

以上のように、中世における「ものす(る)」は、漢文要素が強い物、俗語が多用されるものには使われないという特徴がある。

4. 2 作品別による使用

4.1 節から分かるように、中世における「ものす(る)」の用例はほとんど「王朝物語」と「歴史物語」に現れている。しかしその内訳にも使い分けがある。表2に作品別の総語数(凡そ)³⁴と「ものす(る)」の用例数を示す。

表2 中世作品の総語数と「ものす(る)」の使用頻度

作品名	総語数(凡そ)	「ものす(る)」	相対頻度×10,000
しら露	18382	64	34.81
八重葎	19100	47	24.60
とりかへばや	59792	92	15.38
苔の衣	50096	74	14.77

³³ 『平家物語』における漢語延べ語数は23831語であるのに対し、『源氏物語』における漢語延べ語数は10528語である。(『日本古典対照分類語彙表』:4)

³⁴ 凡その総語数は筆者によるものである。(1ページの語数×ページ数)

夢の通ひ路物語	91900	104	11.31
風につれなき	14544	14	9.62
海人の刈藻	37572	35	9.31
石清水物語	46864	42	8.96
木幡の時雨	12726	11	8.64
御伽草子/福富長者物語	2452	2	8.15
謡曲集(上)/古作の能 浮舟	1283	1	7.79
増鏡	82942	49	5.90
いはでしのぶ	67064	35	5.21
夜寝覚物語	69690	37	5.30
我が身にたどる姫君	68034	28	4.11
山路の露	10100	4	3.96
風に紅葉	20504	6	2.92
別本八重葎	3434	1	2.91
無名草子	20832	4	1.92
松陰中納言	32522	6	1.84
小夜衣	38178	5	1.30
恋路ゆかしき大将	36360	3	0.82
物語絵巻集	27674	2	0.72
徒然草	33751	2	0.59
松浦宮物語	20604	1	0.48
今鏡	86612	4	0.46
とはずかたり	65472	2	0.30
十訓抄	73507	2	0.27
宇治拾遺物語	101252	2	0.19
古今著聞集	138530	2	0.14
漢書抄	269756	3	0.11
古文真宝桂林抄	135150	1	0.07

中古の物語類の影響を受けた作品には「ものす(る)」の用例が多く見られる。例え

ば、中世王朝物語類の『とりかへばや』『石清水物語』『とはずがたり』や歴史物語の『増鏡』『今鏡』などがこれに該当する。それぞれ研究事典において、次のように中古の物語類との影響関係について記述されている。

(19) 表現上は先行する平安物語、特に『源氏物語』『夜の寝覚』を強く受けている。

(『日本語学研究事典』: 792、『とりかへばや物語』項目、執筆者: 染谷裕子)

(20) 主人公が武士である点、合戦の記述を含む点など、平安期の王朝物語には見られない特徴を持つものの、『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』『夜の寝覚』等、先行物語からの影響は著しい。

(『日本語学研究事典』: 793、『石清水物語』項目、執筆者: 田淵福子)

(21) 『源氏物語』『伊勢物語』等の平安物語の引用が多く認められる一方、漢籍・仏典も引用され、『平家物語』等と共通する表現も見られる。全体としては平安時代の和文の系統に連なる文章であるが、鎌倉時代の言語資料としての確かな特徴をも持つ。

(『日本語学研究事典』: 799、『とはずがたり』項目、執筆者: 染谷裕子)

(22) 文章は『源氏物語』『栄花物語』『大鏡』『とはずがたり』など、とりわけ『源氏物語』の影響が著しい。

(『日本語学研究事典』: 822、『増鏡』項目、執筆者: 村上雅孝)

(23) 客観的で淡白な叙述であるが、風流な逸話を多く載せる。平明な和文脈の中に「見参」「焼亡」「御製」や「させる」「さしたる」「れう」(料)「べちの」(別)、引用を受ける「由」など記録語が見える。

(『日本語学研究事典』: 821、『今鏡』項目、執筆者: 遠藤好英)

これらの作品における「ものす(る)」の用法は中古の用法によく類似する。(24)は、王朝物語の用例であり、「ものす(る)」に敬語の補助動詞「たまふ」が付いて移動を表す。(25)は、歴史物語の用例で、「ものす(る)」に敬語の補助動詞「たまふ」が付き、複合動詞の後項「-来」の代用として使用されている。(26)で「ものす(る)」が使われている『徒然草』は、擬古文的な和文の部分がある一方、和漢混淆文の部分もあると言われる(安部(2020))。しかし、「ものす(る)」の使用は中古期と同様である。(26)の「ものす(る)」の用法はの補助動詞用法であり、「薄情なお心でいらっしゃる」とい

う状態を表す。御伽草子および物語評論(『無名草子』)も同様である。(27)と(28)は、「たまふ」を伴う補助動詞用法である。

(24) 「いづくよりものし給へるぞ。しばしも見奉らぬは、苦しう」とて、涙を浮けて、
(石清水物語：23)

(25) 九月の供花には、新院さへわたりものし給へば、いよ / \ 女房の袖口心ことに用意加へ給ふ。
(増鏡：659)

(26) 「(略)情なき御心にぞものし給ふらんと、いとおそろし。(略)」と言ひたりし、さもありぬべき事なり。
(徒然草：197)

(27) ほゝ笑みて、「さても / \ ありがたき御よしみにぞものし給へ。(略)」と手をつきて居る。
(御伽草子/福富長者物語：386)

(28) 「(略)むげに若きほどに、慈悲深くものしたまひけるも、かかる仏の御あたりにもものせさせたまふ御ゆゑにやはべらむ」など言ひはじめて、
(無名草子：177)

このように、中世における「ものす(る)」の使用は、中古の和文作品、特に物語類の影響を受けたものに集約していると言える。一方、同じく中世の歴史物語である『水鏡』には、「ものす(る)」の用例が確認できない。『日本語学研究事典』によれば『水鏡』の文体的特徴は、(29)のように述べられている。同じ歴史物語、和漢混淆文でも、中古の和文作品の影響ではなく、漢語・仏語、訓読語・記録語の使用が特徴的である点で、「ものす(る)」の出現に制約があると考えられる。

(29) 文章は、平明簡潔、漢語・仏語を多用し、訓読語や記録語をも用いた和漢混淆文。(『日本語学研究事典』：821、『水鏡』項目、執筆者：小久保崇明)

神谷(1982)によれば、中古において、『源氏物語』の頃の言文一致に近づいた和文は、中世になるとまた言文二途になり、中古の話し言葉が徐々に文語化していくと指摘されている。文語調で古典を学び、作品を書こうとしても、ベースは文語であるが、純粋な古典的な文語とはなっていないという。また、西田(1982)によると、平安後期に現れ始めた和漢混淆文は、中世の『平家物語』などの軍記物語において形成され、鎌倉時代から江戸時代に至るまで、文章語の主流となっていると述べられている。また、漢文は外交文書として地位を保ち、日本国内の文書は変体漢文(和化漢文)や記録

体など擬似漢文が用いられたという。それに対し、和文は「完全な擬古文の世界のものとなり、和歌、連歌や歌論書、連歌論書、擬古物語などの文芸の雅の世界のものとなった」（西田 1982 : 205）という。

中古の和文の物語から生まれた「ものす(る)」も、中世になると、中古の用法を受け継ぎつつ、中古の和文物語類の影響を受けた「王朝物語」と一部の擬古的な「歴史物語」の中にのみ生き続けることとなった。それに対して、キリシタン資料や狂言など、中世の話し言葉が現れる資料では、「ものす(る)」の用例は見られない。

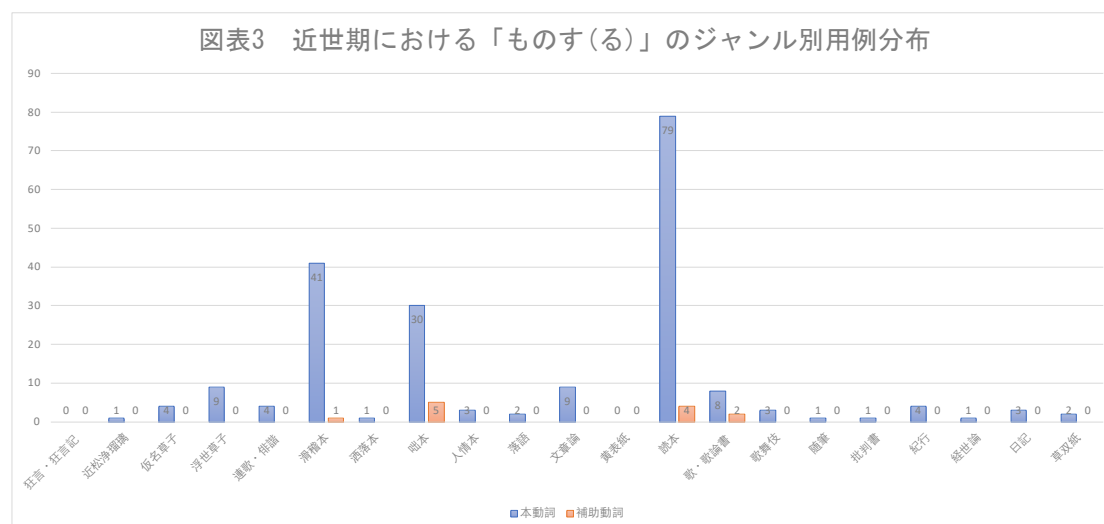
且つ歌語ではないため、和歌や連歌などのジャンルには姿が現れていない。中世において、「ものす(る)」は和文体散文に出現することが条件付けられた、「(擬古)文語」の語彙となった。つまり、散文専用の「雅語」としての位置づけを確立していたといえる。

5. 近世の江戸文学における「ものす(る)」

5.1 ジャンルによる使用

近世に入ると、「ジャンルの多様化、著作層・読者層の広がりにより、さらに多くの文体を生じてゆく。国学者の擬古文や俳人の俳文、仮名草子・浮世草子等々」（神谷 1979 : 121）が現れるという。「ものす(る)」の出現ジャンルも変化し、意味用法にも変化が見られる。中世後期から近世前期にかけて徐々に使われなくなっていった「ものす(る)」が、再び擬古文を用いる多様なジャンルの作品に登場するようになるのである。

図表 3 近世期における「ものす(る)」のジャンル別用例分布



図表3を見ると、近世期の「ものす(る)」の用例は「滑稽本」・「咄本」・「読本」の用例数が目立ち、全体の7割を占める。そのほか「仮名草子」・「浮世草子」や「文章論」・「歌・歌論書」・「連歌・俳諧」・「洒落本」・「人情本」など、幅広いジャンルでも用例が見られることがわかる。まず「滑稽本」・「咄本」・「読本」での用例を概観する。

「滑稽本」について、久保田(2004)は(30)のように述べている。(30)でも示されている『東海道中膝栗毛』の表現描写は、概して卑俗猥雑と言われる。作品中に現れる「ものす(る)」の用例も、(31)のような隠語的な用法である。台詞の中での用例であり、「盗む」というマイナスの意味として用いられる。「盗む」というマイナスの意味を表す言葉を直接言わずに婉曲的に(この場では符丁として)表すために「ものす(る)」を選んだと考える。敬意を表すという点では中古の「ものす(る)」と異なるが、臙化して表現するという点は共通する。

(30) 広義には、談義本を「前期滑稽本」として含めて用いる場合もあるが、ここでは、おもに十返舎一九の『東海道中膝栗毛』以降の、滑稽を内容とする中本型の小説類をいうものとして用いる。 (久保田 2004 : 167)

(31) 目が見へるものを(北八)「そんならおいらがものしたものも、ものしやアがつたにちげへはねへ」 (東海道中膝栗毛:447)

「咄本」は、『日本語学研究事典』によれば、四期の変遷がある。第一期は和漢の故事や巷談が中心である。第二期の作品は遊興の座による座敷咄及び盛り場や大道での辻咄であるとされ、第三期と区別するため、「噺本」の表記も用いるという。また、第二期は読む笑話から聞く笑話へ変化している時期であるという。第三期は江戸を中心とした咄本が出現する時期であると述べられている。第四期は咄本から落語本へ転化し、小咄が一般化・大衆化した時期であり、漢文体笑話も多く見られるという。それらの表現について、『日本語学研究事典』では(32)のように説明されている。(33)は咄本による用例である。咄本における用例においては9例が(33)のように、本文中ではなく、序文や跋文に現れ、「(版木に刻んで)作品を書く」「広く刊行する」という意味を表す用例である。これは、本来、中古の用法としては文語でも口語でも使えた「ものす(る)」が、徐々に文語のみで使用されるようになり、中世期の「擬古散文専用語」との位置づけを経てさらに「文語専用」の性格を強めていくことの反映であろう。近世前期では、いまだ(31)のように隠語として用いられる形で口語の用例が見られるが、

近世後期になると口語の用例の使用頻度が減少していくと考える。また、(32)で述べられるように、「咄本」は「洒落本や人情本に比べて文語的性格の強い」ものである。そのために、「ものす(る)」の使用は「洒落本」「人情本」より「咄本」のほうが多いと考えられる。

(32) 咄本の表現は、多少の差はあれ、全体的に言えば話しことばを基盤にしており、(略)洒落本や人情本に比べて文語的性格の強いことも指摘されており、こういう面の配慮も必要とされよい。なお、漢文体笑話のルビには当時の俗語が豊富に使用されており、

(『日本語学研究事典』：950、「咄本」項目、執筆者：蜂谷清人)

(33) その中にさる事也とおもふを撰み、山王の桜木に物して、世に広ふせんとや。
(会席噺袋/序：320)

「読本」について、『日本語学研究事典』では(34)のように説明されている。

(34) 絵を見ることを主とした草紙類や浄瑠璃などの語り物に対して読むことを主とした小説。

(『日本語学研究事典』：959、『読本』項目、執筆者：鈴木丹士郎)

『日本語学研究事典』では、前期読本は、上方に起こった、唐話学の研究や中国白話小説の翻案・紹介が大きな影響を与えているという。例えば、古言を用い、雅文体で書かれた建部綾足の『西山物語』や、和漢に典拠を有する翻案小説である上田秋成の『雨月物語』などはそうである。これらの作品には「ものす(る)」の用例も見られる。5.2節で具体的に述べる。また、後期読本は、『日本語学研究事典』によれば、江戸に行われ、儒教思想に基づく勸善懲悪を主題としたものである。代表的な読本としてよく挙げられるのが馬琴の読本である。その文体は、(35)のように評価されている。一方、古言を用い雅文体で作品を書くという前期読本の傾向は、江戸に読本の中心が移ってからも、国学者の石川雅望(『雅言集覧』の著者)の作品に見られるといい、『近江県物語』『天羽衣』『飛驒匠物語』などには平安時代の古語が豊富に見られるという。

(35) ひたすらの雅文に傾くことなく、通俗のためには種々の要素を取りこむことの必要性を説くが、馬琴の読本の基調はやはり漢字漢語の豊富な漢文脈にあり、秋成などの手法と対照的である。総じて、馬琴には本来の和と漢の要素

を基に、これに雅と俗が加わり、典型的な読本のスタイルの形成が見てとれる。
(『日本語学研究事典』: 960、「読本」項目、執筆者: 鈴木丹士郎)

次に、「仮名草子」は、『日本語学研究事典』では、(36)のように説明されている。

(36) 仮名または漢字仮名交りで書かれた小説をさしていい、室町時代の御伽草子の後をうけ、天和二年(1682)刊『好色一代男』の浮世草子へと連なる作品群の総称である。

(『日本語学研究事典』: 946、「仮名草子」項目、執筆者: 佐藤亨)

『日本語学研究事典』の解釈により、仮名草子の多くは、文語の俗文体で書かれているとされ、儒教や仏教の立場からの啓蒙教訓的なもの、古典を近世風にもじり滑稽を主とした擬物語などの娯楽的なもの、軍記や名所記などの見聞記などの実用本位のものがある。たとえば(37)の「ものす(る)」は、遊郭話を扱う『たきつけ草』という娯楽的なものの用例であり、「はべる」が付いて、中古に類似する補助動詞用法として使用されている。

(37) 神無月の比、桂川の西なる人のがり行き侍りし帰さに、朱雀野といふを過ぎて、九重の上さまへと心ざし、ゆくりなく物し侍るに、

(仮名草子集/たきつけ草: 367)

「浮世草子」は、『好色一代男』以降の約百年間の風俗小説について「仮名草子」と区別して立てられた区分である。代表的な西鶴の作品の文章・文体は、「俗語と雅語を自由に組み合わせた新文体の確立とその展開の様子を総合的に明らかにする」と評価されている(中村 1971)。(38)は西鶴の作品における「ものす(る)」の用例である。これも「たまふ」が伴って、貴族の動作を臙化する表現である。

(38) 都にて、大内の官女、楊弓ものし給ふさへ、替り過ぎたる慰みのやうにおもひしは、これはそも / \ 楊貴妃のもてあそび給へると伝へければ、今も女中の遊興に似あはしき事にぞ。
(好色一代女: 466)

一方、その他のジャンルに見られた例はいずれも「歌、詩」を「書く・作る」意での用例であった。例えば、「文章論」というジャンルで見られたのは、伴蒿蹊が国文や和文の研究について著した『国文世々の跡』『訳文童諭』『閑田文草』からの用例である。

(39)の「ものす(る)」は「歌、詩」を「書く・作る」意味として用いられている。「歌・歌論書」ジャンルでの用例も同様に、「歌」に現れるのではなく、歌の書き方について説明する用例である。(40)の「ものす(る)」は「歌を書く」という意味で使われる。近世期全体の様相として、文章語への偏りと「歌、詩、文芸作品など」を「書く・作る(出版する)」という意味での運用への偏りが認められる。

(39) さるに其夢見る人の歌をも詩をもつねにものせんは、是はた思ひねのゆゑともうたがいひ侍らんを、
(伴蒿蹊集/閑田文章：155)

(40) ひたすら書べき事として、猥にものするより、連なる玉に稜有ものを貫交へたらん心地して、調も詞もたぢろぎ、是なくばと思はるゝも少からず。

(歌学提要：161)

5. 2 作品別による使用

近世期の「ものす(る)」は、作品による差異や用法上の偏りなどが見られる。本節では、近世の「ものす(る)」の用法について、作品別の使用から考察する。表3に近世作品別の総語数および「ものす(る)」の用例数を示す。

表3 近世作品の総語数と「ものす(る)」の使用頻度

作品名	総語数(凡そ)	「ものす(る)」	相対頻度×10,000	
浄瑠璃 近松浄瑠璃/心中宵庚申	232597	1	0.04	
仮名草子 仮名草子集/たきつけ草(3例)、もえくる(1例)	123444	4	0.32	
浮世草子	好色一代男	39471	4	1.01
	浮世草子集/新色五巻書	24115	2	0.82
	好色五人女	19955	1	0.50
	好色一代女	26199	1	0.38
	男色大鑑	51504	1	0.19
俳文俳諧	近世俳文集/類柑子(1例)、新花摘(1例)	47996	2	0.41
	松尾芭蕉集/俳文篇	42224	1	0.23

	松尾芭蕉集/ 全発句	166980	1	0.05
滑稽本	白癡物語	14780	32	21.65
	根南志具佐	14373	1	0.69
	東海道中膝栗毛	141730	8(2例は序文)	0.56
	滑稽本集/和莊兵衛	134384	1(序文)	0.07
洒落本	嘘之川	204430	1	0.04
歌・歌論書	近世和歌集/橘曙覧	6836	4	5.85
	歌学提要	7353	3	4.08
	大隈言道	5800	2(1例は序文)	3.44
	近世和歌集/田安宗武	5869	1	1.70
歌舞伎	歌舞伎十八番集/助六	19108	1	0.52
	歌舞伎脚本集(上)/韓人漢文手管始	45896	2	0.43
人情本	春色江戸紫	31289	1	0.31
	春色梅兒譽美	44230	1	0.22
	人情本集/今様操文庫	102442	1(序文)	0.09
咄本	戯言養気集	11791	10	8.48
	狂哥咄	21819	9	4.12
	あごの掛金	3265	1(跋文)	3.06
	落嚙常々草	3774	1	2.64
	はなしのいけす	4682	1	2.13
	軽口新歳袋	5273	1(序文)	1.89
	会席嚙袋	6337	1(序文)	1.57
	千里の翅	7352	1(序文)	1.36
	軽口筆彦嚙	8406	1(序文)	1.18
	軽口星鉄炮	8969	1	1.11
	新選勸進話	9456	1	1.05
	臍の宿かえ	9512	1(序文)	1.05

	臍が茶	9932	1(跋文)	1.00
	宇喜蔵主古今咄揃	11640	1	0.85
	昨日は今日の物語(古活字 十行本)	15479	1	0.64
	杉楊子	31065	1	0.32
	初音草嚙大鑑	31168	1	0.32
	立春嚙大集	14115	1	0.07
落語	原典落語集/遊子戯語(1 例)、初昔茶番出花(1例)	46806	2(序文)	0.42
文章論	伴蒿蹊集/国文世々の跡(1 例)、訳文童喩(1例)、閑田 文草(7例)	89932	9	1.00
読本	西山物語	11814	4	3.38
	石川雅望集/近江県物語(10 例)、天羽衣(1例)、飛弾匠 物語(8例)、とはずがたり(5 例)	94862	24(1例は序文)	2.53
	森島中良集/鄙都言種	6192	1(序)	1.61
	近世説美少年録	352800	47	1.33
	雨月物語	29380	3	1.02
	小枝繁集/絵本壁落穂(1 例)、津摩加佐禰(1例)	84012	2	0.23
	椿説弓張月(下)	113014	2	0.17
随筆	折たく柴の記	88699	1	0.11
批判書	近世思想家文集/翁の文	4921	1	2.03
紀行	只野真葛集/いそづたひ	5460	1(跋)	1.83
	近世紀行集成/花見の日記	134646	3	0.22

経世論	只野真葛集/独考	68758	1(序)	0.14
日記	只野真葛集/真葛がはら	34710	3	0.86
草双紙	馬琴草双紙集/女護嶋恩愛 俊寛	26829	2	0.74

5.1 節で述べたように、近世における「ものす(る)」の用例は、「咄本」「洒落本」「読本」での使用が目立つ。表3では相対頻度においてもこの3ジャンルが高いことがわかる。その一方で、表3からは「仮名草子」「浮世草子」「人情本」「歌・歌論書」「連歌俳諧」など幅広いジャンルで用例が認められることもわかる。ただし、表4をみると、例えば「仮名草子」には僅か4例の出現であり、相対頻度も高くないことがわかる。また、「浮世草子」の場合はほとんどの用例が西鶴の作品に出現することも注目できる。堀切、小池(2007)によると、近世の江戸文学は、内容的に雅・俗が織り成している文学であり、文体から見ても、中世以来の和漢混淆文に重ね、雅・俗が時に対立し、時に混淆しているという。例えば、西鶴の『好色一代男』全体は、文体的には『伊勢物語』『源氏物語』の「雅」を備え、内容的には近世遊女遊びの「俗」と結びついているものであり、いわゆる雅俗折衷文で書かれているという(風間(2007))。西鶴は、擬古文の素養を持つ作者であると考えられ、その雅語に対する素養に基づく運用により「ものす(る)」が継承されていると考える。

しかし、仮名草子に区分される作品のうち、軍記や、名所記などの見聞記、遊里案内を目的とした評判記、また実用本位の仮名草子、例えば『東海道名所記』や『堪忍記』などには用例がない。近世期の「ものす(る)」の使用には、「古語」や「雅語」に対する知識があるという条件が必要であり、それを西鶴のような、擬古文、雅語の教養を持つ特定の書き手が担ったということが考えられる。

「滑稽本」の場合は、採取した42例のうち、32例が『白癡物語』からの用例である。この作品の序文には「其辭則古諺嫻雅一如讀宇治拾遺古今著聞等出是」との一文がある。つまりこの作品は、古言と優雅な表現が使用されることが特徴的であり、表現面でも宇治拾遺物語や古今著聞集などから取り入れられていることが明らかである。また、序文の中には「春香專攻國學遊本居大平之門又嗜狂歌師六樹園」とある。

つまり『白癡物語』の作者、遠藤春足は、本居大平の門下で国学を学び、加えて狂歌師六樹園(石川雅望)の狂歌を嗜んでいるということがわかる。長谷川(2014)も、『白癡物語』は雅文笑話集であり、「宇治拾遺体の雅文」として作られた作品であると指摘している。長谷川(2014)によれば、本居大平は石川雅望の編纂した辞書『雅言集覧』にも序文を寄せて、弟子の遠藤春足について言及している(41)。石川雅望も『白癡物語』を高く評価し、その序文を書いて推薦した(42)。このように、国学者である遠藤春足は、古語・雅語を勉強し、それを作品の中に運用できる人物であった。そのため、遠藤春足によって書かれた『白癡物語』では、滑稽本の中でも比較的高い頻度で「ものす(る)」が用いられたのである。『白癡物語』における「ものす(る)」の用例を(43)に挙げる。

(41) 此ふみ板にゑりて、試みにすりたるはじめのほど十ひらばかりを、見せにおこせて「己が一言を。」と取り伝へ言ひおこせたるは、此紀の国ちかき阿波の国人、遠藤春足なり
(『雅言集覧』序、本居大平)

(42) 此しれものゝ物語は、阿波国なる遠藤春足ぬし、童どもの乞へるまゝに書きてあたへたるものとなん。(略)げに此比の人の筆づかひにも似す、あてにおかしく、見どころありて
(『白癡物語』序、石川雅望)

(43) さてあるしのいふやう、おまへたち、たゞかくておハさんより、鳴門見にもものす給へ。
(白癡物語:227)

「咄本」の場合は、36例のうち、19例が仮名草子と共通する面を持つ初期咄本の用例である。例えば(44)は、仮名草子と同様、中古における「ものす(る)」と類似する用法の例である。近世期の噺本には、清代の中国笑話集『笑林広記』の抄訳本『笑林広記鈔』のような漢文体笑話があるが、「ものす(る)」の用例は見られない。漢文体笑話の影響を受けた可能性がある『鹿の子餅』のような噺本にも「ものす(る)」の用例が見られない。

(44) 右よきやうに物したまへとなり。
(戯言養気集:41)

その他の用例は、一作品に1例ずつしか見えず、うち7例は、(45)と(46)のような、作品の序文あるいは跋に現れ、「作成する」という意味で用いられるものである。咄本の用例は、特定の書き手に収斂しないが、ごく定型的な用法に偏っている。

(45) 初席より四十余の会席をかゝさず、作せる咄ハ口上におゝし。はた是を梓に
ものせんとす。 (臍が茶:111)

(46) 新ひかぎりを書付て、桜にわたし、新歳袋と云五冊物に絵をものし、朝腹透
腹酔ざめの遠慮のなきハ、笑ふ門に福きたると申が、此本の趣向で御座りま
す。 (軽口新歳袋:41)

次に、読本における「ものす(る)」の用例について検討する。風間(2007)によれば、西鶴の浮世草子は、「和文体」あるいは「物語」との連続性が認められるという。さらに風間(2007)は、西鶴以降で、「和文」と関わる最も重要な作者は上田秋成であるという。彼の作品には雅と俗の要素が共存し、前期読本がここに達成されたと風間(2007)は位置づける。また、長島(1989)によれば、18世紀には国学者の間で和文創作が盛んになり、賀茂真淵の門人になった建部綾足の作品も、和文体へ傾斜したという。前期読本の代表的な作品とされる上田秋成の『雨月物語』や建部綾足の『西山物語』は、和漢混淆文や雅文で書かれたものである。まさにこれらの作品に「ものす(る)」の用例が見られる((47)、(48))。一方、読本には中国の白話小説に基づく翻案小説も数多いが、そのような作品の中には「ものす(る)」の用例は確認できない。

(47) 十月ばかりさきになしき婦を亡なひたるが、世に残りて憑みなく侍れば、
ここに詣づることをこそ心放にものし侍るなれ。 (雨月物語:349)

(48) そはさまれ夫さもあはれ也心得もなきに、おしてかく物したまふこそいとに
くけれ。 (西山物語:247)

後期読本になると、漢文調が強いものが多く見られ、和文の出番がないとされる(風間(2007))。しかし、5.1節でも述べたように、古言を用い雅文体で作品を書くというこの傾向は、読本の中心が江戸板へ移ってからも、国学者の石川雅望に継承されている。具体的には、石川雅望の『近江県物語』『天羽衣』『飛驒匠物語』などの作品には平安時代の古語が豊富に見られるという。これらの作品には「ものす(る)」の用例が見られる。

(49) 「(略)つたへたる田楽の、ひとて、所望に候。品玉・輪鼓・八玉のたぐひ、
何にまれ、物し給へ。さらばいみじき見物ならん」と、そぞのかす。

(石川雅望集/近江県物語:29)

(50) 「そはいとやすかりなん。かの娘の部屋は持仏のかたはらなれば、おのれ一人だに、心を得て物せば、忍び入り給はんに、しる人あらじ」といふに、

(石川雅望集/天羽衣：183)

(51) 遠近をいはず、人これを慕ひて、調度玩物の具などあつらへ物する者、門前に市をなしける。

(石川雅望集/飛驒匠物語：216)

一方、「和と漢の要素を基に、これに雅と俗が加わ」((35)再掲)ったとされる馬琴の読本作品では、地の文にも会話文にも、「ものす(る)」の用例が確認できる。地の文にも会話文にも使われている。

(52) 「この処は琉球國、三十六嶋の内なりと、汝がいひつれど船もかよはず。浮世に遠き嶋守は、さる事ありともしらざりき」といと外しくものするに、翁はしばし得も回答ず、

(椿説弓張月：295)

(53) 「(略)窓井へ遣す消息を、ものし給へ」といそがせば、

(近世説美少年録(3)：488)

風間(1998)によれば、江戸の戯作者である大田南畝は幕府の命により『孝義録』を編むにあたって、さまざまな文体を模索した。南畝の開いた「和文の会」(寛政十一1799年)には、計25名の学者が集められ、その中に石川雅望や曲亭馬琴も含まれているという。このことから、馬琴は、和文・雅文の知識を相当に大きく持ち、その意味で特殊な書き手であると考えられる。

最後に、伴蒿蹊と只野真葛の作品について検討する。伴蒿蹊は和文と国学を唱導し、その『国文世々の跡』『訳文童諭』などの作品は賀茂真淵の強い影響で書かれた和文(擬古文)研究・唱導の著作と言われる(風間1999)。(54)は『国文世々の跡』の用例であり、「ものす(る)」は「(世に)見られる・広がっている」の意味である。また、只野真葛の文章は、賀茂真淵、本居宣長、馬琴などに影響され(雲岡2015、内田1985)、その日記は平安時代の女流日記を模倣している様相が見える(55)。

(54) げに其さまもいとふるめかしくはあらねど、またちかき世にもものせるともみえぬものから、こゝにあげて例とす。

(伴蒿蹊集/国文世々の跡：41)

(55) やう / \ あたゝかにも成りて侍り。御いたはりいかにものし給ふらん。

(只野真葛集/真葛がはら：489)

以上、近世期における「ものす(る)」は、前期には文語性の高い作品や雅文体で書かれる作品、あるいは古文・雅文に関する知識を持つ作者の作品にしか出現せず、漢文体や俗文体の作品には用例が見られないことがわかった。また、後期になると、全体的に「ものす(る)」の使用が減少し、使用が見られる多くの作品では本文中では用いられず、序文や跋文の中で「梓にものする」など「上梓する・作品として作り上げる・出版する」の意で使われているということも確認された。これは、作者自身が作品の本文を書く時にはほとんど使わない「ものす(る)」という表現が、著作の序文では常套的な表現として多用されるということであり、定型的・慣用の知識として共有されていたことの現れと考える。ただしそれも、擬古文を提唱する国学者の間で使われていることが特徴的である。

ではなぜ「ものす(る)」はこのような文体上の偏り、特性を備えることになったのだろうか。

西田(1982)によれば、江戸時代は、幕府の漢学奨励により、漢文が全盛時代になり、漢文とその訓読の文章が盛行したとされる。また、漢学者の手によって和漢混淆文が文体の指標とされたと述べられている。法令・公文書などは中世と同じく、変体漢文が用いられたが、一般の文章(実用書、文学、読物、教訓書など)では和漢混淆文が使用されていたという。またその中で、江戸時代の国学者の間では、平安時代の「雅の世界」を仰ぎ見て、漢字音を排除した擬古的な和文が用いられたという。

近世には雅と俗の概念が一般化し、雅語と俗語の差異が明確になり、その考察も盛んになっていた(第一章)。また、古言や雅語を用いる雅文体の文章が作られていた。

「ものす(る)」はまさしく平安時代の「雅の世界」でしか使われない語であったのであり、近世では雅文体を提唱する国学者の文章で特徴的に活用されていた。これは近世において「ものす(る)」の用例が一部の紀行文に現れる、その事実にも説明を与える。例えば「花見の日記」という紀行には、(56)～(58)の用例が見られる。

(56) 十一日。けふは、たちらぬのうせ給ひし日なれば、(略)さるは、こぞの秋より、そこにをかしき家居しつらひはじめたるが、此ほど皆とゞのひぬれば、まらうどよびむかふるまどいに、われをたぐへんとて、ものする也。何くれと事しげくて、夕つけてみはかにもうでぬ。

(近世紀行集成/花見の日記：380)

(57) ありし煙の比もなにくれととふらはれしに、わたくしのいとまなくて、うち過。「よきついでなれば、かしこにものせん」とて、まかる。

(近世紀行集成/花見の日記：382)

(58) 十二日。ひたかう、おきいでゝ帰らんとす。名残さすがにつきせず。此ちかきわたりに、しそくの中、西氏なるものすめり。

(近世紀行集成/花見の日記：384)

この作品は、作者の津村淙庵が、友人と江戸の桜の最も美しい場所はどこかと議論し、桜が咲き始めた後、日々花見をすることを描写したものである。津村淙庵は、江戸中期の国学者であり、石川雅望の師である。板坂(1991)は、その事実を踏まえ、この作品の特異性を(59)のように評価している。『近世紀行集成』に収録されている六つの紀行文のうち、その他の五つの紀行文は、庶民の旅の実態を表現し、娯楽性の強いものであるが、「花見の日記」だけは特殊であるという。

(59) 当時の国民の多数を占めた農民の生活にはふれていない。また都市生活といっても、卑俗な面は描かれない。その意味では、庶民的なものとはいえない。(略)宣長門下の大平やその他の国学者たちには、いくつかの花見紀行の作がある。それらを見ると、たとえ地方が舞台でも、花を見て回るのどかな日々が、友人たちとの交流をまじえて、さほど緊張感のない、優雅で平明な和文で綴られる形式は、「花見の日記」とかわらない。(略)旅という状況のもたらす緊張感をあえて排し、他の部分と異和感を生ずるような過度な美文もなるべく避けて、奇をてらわぬ、おだやかな優雅さを保つことが、おそらくは、宣長などを中心とした国学者たちが、紀行文の制作を通じて追求していった一つの和文のかたちであった。

(近世紀行集成/花見の日記：解題)

一方、一部の雅俗折衷体で文章を書く作者(西鶴、馬琴、芭蕉など)の作品にも「ものす(る)」の例が見えた。しかしその使用は、頻度としては高くない。つまり、近世の「ものす(る)」はさらに口語から離れて、国学者と一部の知識人のみが知る存在となっていたといえる。ただ、この雅語「ものす(る)」の運用がこれらの国学者と知識人によって維持されていたことは重要である。

6. 近代以降における「ものす(る)」

本節は、近代以降における「ものす(る)」の使用について述べる。図表4に近現代における「ものす(る)」のジャンル別用例分布を示す。

図表4 近代以降における「ものす(る)」のジャンル別用例分布

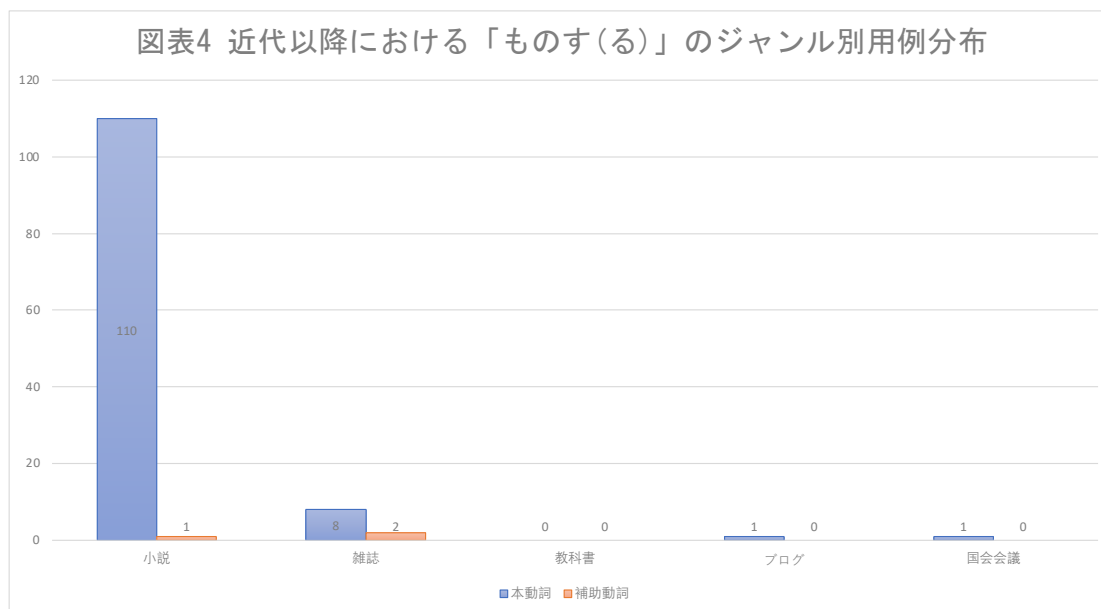


表4からわかるように、近代以降の「ものす(る)」の用例は、ほとんどが小説というジャンルの中で見出される。中には、(60)のように序文・跋文で用いられるという近世期の用法が、近代以降も見られる。ごく一部の擬古的な作品における用例を除き((61)、(62))、小説にしても、雑誌や国会会議録というジャンルにしても、「ものす(る)」はもっぱら「詩や文章・絵画などを作成する」の意味として定型的に使用され((63)、(64))、日常会話ではほぼ使われない書き言葉として残っていることがわかる。

(60) この巻をものするにつき中村利謙氏材料を与えられしこと多し、名を記して好意を謝す。
(俳人一茶/補記、1897)

(61) 嬉しく心の異しく跳るばかりにてござ候ひき、おん旅のをりをりにものしたまへる敷多きスケッチは、貴郎が旺なる御精力のほども窺はれ。
(小説紅き雲、女学世界 1909-8 : 181)

(62) 「(省略)隊長。一曲、この妓と物しとうなりました。いいでがしょう。来い。女。あっちの部屋へ参ろう！」
(流行暗殺節、中央公論十月号 1932)

(63) 十六歳の春より人に代筆せしめ稽古日記を物し始めたが、
(盲人独笑、1975)

- (64) ちなみに、江戸時代の良寛というお坊さん、俳句を物する有名なお坊さんがおりました。(国会会議録、1998)

近代以降では、まず蘭学者の漢字批判や前島密の『漢字御廃止之議』により、言文一致活動が展開していた(山本 1965、佐藤 1966、山本 1971)。その結果、漢文が排斥され、法令・公文書などは変体漢文から漢字カタカナ交じり文へ転換した(西田 1982)。次に、国学者流の擬古文としての和文は、雅文として時代に相応しくないため退けられた。それに対し、和漢混淆文は、言文一致運動の展開に伴い、文章語の標準文体の地位となり、「普通文」という名称で一般化されていた(山本 1971、西田 1982)。

このような趨勢の中で、小説界の言文一致活動に注目したい。まず代表されるのは坪内逍遙の小説文体改良論である。「文体論」では、古来小説に用いて来た文体を「要するに雅と俗と雅俗折衷の三体の外にはあらじ」として、その優劣を論じている。まず「雅文体」について、「雅文体はすなはち倭文なり。其質優柔にして閑雅なれば、婉曲富麗の文をなすにはおのづから適ひたりといへども、惜いかな活潑豪石の気なし」と評している。次に「俗文体」について、「俗文体は通俗の言語をもてそのまゝに文をなしたるものなり。故に文字の意味平易にして、音に解しやすき徳あるのみは、別に活動の力あるから…」と評する。最後に「雅俗折衷文」について、「稗史(よみほん)体」と「臭双紙(くさぞうし)体」の二種類に大別し、その中の「臭双紙体」の改良を以って新俗文体を提唱した。また、山本(1965)によれば、坪内逍遙は「無用の雅言を廃すべき事」をも提唱している。しかし、(65)のように、坪内逍遙本人が「ものす(る)」を使用している。坪内逍遙のような当時の知識人にとって、「ものす(る)」は坪内の言う「無用の雅言」とは位置づけられていなかったと考えられる。

- (65) 臭双紙体ハ概ね京坂の俗語を斟酌し間々雅言をまじえて詞を綴り俗言八分の雅俗折衷文もて地をものしたるものにて体裁やと浄瑠璃の文體に似ておのづから雅なる所あり其質、雅文體よりハ野にして俗文體よりハ優なり
(国立国会図書館デジタルコレクション「明治協会雑誌」二十八号)

一方、明治末期になると、典型的な和文体、典型的な漢文体という文体差は、明確でなくなり文体は自由になっていった。個人差が大きくなり、和語と漢語の使用程度によって、優雅にもなり、散文的にもなり、詩的にもなっているという(安本 1982)。

(66)、(67)のような小説のなかでの運用は、「ものす(る)」が、文章語として認められ、運用の自由度が増していくなかで、擬古文専用語としての性格により、「優雅な」「教養ある」文章表現を支える語彙として命脈を保ったことの現れと考えられる。

(66) こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子をまだ白紙のまゝなるは、独逸にて物学びせし間に、(森鷗外/舞姫)

(67) あのひとが、あんな恐るべき手紙をものするとは、全く、神か魔かと疑ってみたくなるくらいだ。(太宰治/パンドラの匣)

7. おわりに

以上のように、文体という観点から「ものす(る)」の歴史的変化を考察した。以下のようにまとめる。

「ものす(る)」は平安時代の和文に発し、物語類の中で多用されたが、歌語ではなかった。『源氏物語』の頃の言文一致に近い和文は、中世になるとまた言文二途になった。中古の話し言葉が徐々に文語化していくなかで、文芸から古典を学び、作品を書く場合の書き言葉は、ベースは古典語にありながら、純粋な古典文語とは異なっていた。中世では、平安後期に現れ始めた和漢混淆文が文章語の主流となっていくのに対し、和文は完全な擬古文の世界のものとなった。「ものす(る)」は、中世文語において、中古の用法を受け継ぎ、中古の和文物語類の影響を受けた「王朝物語」と一部の擬古的「歴史物語」の中で使われ続けた。且つ歌語ではないため、和歌や連歌などのジャンルには例が現れず、擬古文における雅語としての位置づけが確立した。

近世になると、一般の文章では和漢混淆文が使用されているようになった。しかし、江戸時代の国学者の間では、平安時代の「雅の世界」に憧れ、漢字音を排除した擬古的な和文を作ろうとする傾向があり、事実それが自覚的に行われた。近世には雅と俗の概念が一般化し、雅語と俗語の対立が明確化して、その考察も盛んになった。その考察を支えたのも国学者であり、主として国学者によって古言を用いた雅文体の文章が作られていた。「ものす(る)」も、この趨勢のなかで、雅文体を提唱する国学者の文章で活用されていた。一方、一部の雅俗折衷体で書く文章の中にも「ものす(る)」の例が見えたが、使用頻度としては高くない。つまり、中世において事実上、擬古文専用語となった「ものす(る)」は、近世には、国学者と一部の知識人の運用によって自覚的に運用、保持されて「雅文語」となっていったということである。典型的には「上

梓する」「作品を作り上げる」という意味で継承されている。

近代以降、和漢混淆文が文章語の標準文体の地位となり、「普通文」という名称で一般化した。明治末期になると、言文一致により口語体書き言葉が確立して文体の自由度は増し、典型的な和文体や典型的な漢文体という使い分けはなされなくなっていく。しかし、その中で、「ものす(る)」は文章語として認められ、小説をメインとした書き言葉の中で、主に文芸作品を「作る、完成する」の意味用法で使われ続けている。

参考文献

- 安部清哉(2020)「連語から見た『徒然草』—連語型文末表現と文体」『シリーズ〈日本語の語彙〉3 中世の語彙』朝倉書店
- 安本美典(1982)「文章様式論」『講座日本語学8 文体史Ⅱ』明治書院
- 内田保広(1985)「江戸の女流日記」『国文学：解釈と鑑賞』50(8), pp. 46-53
- 小野正弘編(2020)『シリーズ〈日本語の語彙〉4 近世の語彙』朝倉書店
- 風間誠史(1998)『近世和文の世界—蒿蹊・綾足・秋成』森話社
- 風間誠史(1999)「擬古文体の創造—国学者たちの「平安文学」」『叢書 想像する平安文学 第1巻〈平安文学〉というイデオロギー』pp. 200-217, 勉誠出版
- 風間誠史(2007)「前期読本の和文体—『雨月物語』をめぐって—」『江戸文学37 【特集】江戸の文体—その生成と文彩』pp. 97-104, ベリかん社
- 神谷かをる(1982)「和文の文体史」『講座日本語学7 文体史Ⅰ』明治書院
- 加美宏(2000)「『将門記』研究史の考察—太平洋戦争終結以前—」『軍記文学研究叢書 2 軍記文学の始発—初期軍記』汲古書院
- 木村正中(1967)「蜻蛉日記下巻における物語性の文体論的考察」『文学・語学』(45), pp. 9-15
- 久保田篤(2004)「特集：近代日本語研究—〈近代語研究資料と研究〉滑稽本を資料として日本語研究について」『日本語学』23(12), pp. 167-181
- 雲岡梓(2015)「只野真葛と本居宣長」『国語論集』(12), pp. 28-38
- 近藤明日子(1995)「「ものす(る)」攷」『学習院大学国語国文学会誌』(38), pp. 12-29
- 小林千草(2020)「狂言集の語彙」『シリーズ〈日本語の語彙〉3 中世の語彙』朝倉書店
- 佐藤喜代治(1966)『日本文学史の研究』明治書院
- 佐藤喜代治編(1972)『講座国語史 第6巻 文体史・言語生活史』大修図書館

- 佐藤武義編(2021)『シリーズ〈日本語の語彙〉2 古代の語彙』朝倉書店
- 高山利弘(2000)「『陸奥話記』作者の考察—敗者へのまなざし—」『軍記文学研究叢書 2 軍記文学の始発—初期軍記』汲古書院
- 中村幸弘(1995)『補助用言に関する研究』右文書院, pp. 37-49
- 長島弘明(1989)「綾足の和文」『武蔵野文学』(36), pp. 13-18
- 西田直敏(1982)「和漢混淆文の文体史」『講座日本語学 7 文体史 I』明治書院
- 東辻保和(1960)「「ものす」考」『論究日本文学』(12) pp28-35
- 長谷川奈央(2014)「『宇治拾遺物語』と『白癡物語』:「宇治拾遺体」の発見」『立教大学日本文学』(111), pp. 226-237
- 藤井由紀子(2010)「『源氏物語』と中世王朝物語の距離—「わららか」・「寝くられ」の表現史」『詞林』(48), pp18-33
- 堀切実、小池清治監修(2007)『江戸文学 37 【特集】江戸の文体—その生成と文彩』ペリかん社
- 前田富祺(1972)「古代の文体」『講座国語史 第6巻 文体史・言語生活史』大修館書店
- 増田欣(2002)『中世文藝比較文学論考』汲古書院
- 三角洋一(2017)『中世文学研究叢書 15 中世文学の達成—和漢混淆文の成立を中心に—』若草書房
- 宮島達夫 [ほか] 編(2014)『日本古典対照分類語彙表』笠間書院.
- 山本正秀(1965)『近代文体発生の史的研究』岩波書店
- 山本正秀(1971)『言文一致の歴史論考』桜楓社

辞書類と検索アプリケーション

- 『日本語学大辞典』(2018)日本語学会編, 東京堂出版
- 『日本語学研究事典』(2007)飛田良文主編, 明治書院
- JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com/library/>)
- 国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2022. 10, 中納言バージョン 2. 7. 0)
- 国立国会図書館デジタルコレクション(<https://dl.ndl.go.jp>)
- 全文検索システム『ひまわり』日本語用例検索・青空文庫所収文学作品

(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/>)

日本古典文学大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>)

新日本古典籍総合データベース (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/?ln=ja>)

嘶本大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon>)

見出し語検索 NINJAL-LWP for BCCWJ (<http://nlb.ninjal.ac.jp/search>)

使用テキスト

【中古】『新編日本古典文学全集』(小学館)：竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記

【中世】『新編日本古典文学全集』(小学館)：宇治拾遺物語、徒然草、十訓抄／『日本古典文学大系』(旧版)(岩波書店)古今著聞集、御伽草子／『中世王朝物語全集』(笠間書院)：あきぎり・浅茅が露、海人の刈藻、いはでしのぶ、石清水物語、木幡の時雨・風につれなき、苔の衣、恋路ゆかしき大将・山路の露、小夜衣、しのびね・しら露、雫ににごる・住吉物語、とりかへばや、八重葎・別本八重葎、松浦宮物語、風に紅葉・むぐら、松陰中納言、夜寝覚物語、我が身にたどる姫君(上)・(下)、夢の通ひ路物語(上)・(下)、物語絵巻集／『水鏡大鏡今鏡増鏡』(国民文庫刊行會)／『續抄物資料集成』(清文堂)

【近世】『洒落本大成』(中央公論社)／『新編日本古典文学全集』(小学館)：好色一代男、好色一代女、好色五人女、男色大鑑、近世俳句集、松尾芭蕉集、近世俳文集、仮名草子集、東海道中膝栗毛、近世説美少年録、西山物語、雨月物語『日本古典文学大系』(旧版)(岩波書店)：芭蕉文集、歌舞伎脚本集、風来山人集、近世文学論集、川柳狂歌集、近世和歌集、浮世草子集、春色梅兒譽美、折たく柴の記、近世思想家文集、歌舞伎十八番集／『嘶本大系』(東京堂出版)：昨日は今日の物語、狂哥咄、千里の翅、白癡物語、立春嘶大集、戯言養気集、軽口筆彦嘶、会席嘶袋、宇喜蔵主古今咄揃、正直咄大鑑、軽口星鉄炮、あごの掛金、落嘶顛懸鎖、杉楊子、初音草嘶大鑑、臍が茶、新撰勧進話、臍の宿かえ、はなしのいけす、落嘶常々草／『叢書江戸文庫』(国書刊行會)：漂流奇談集成、百物語怪談集成、前太平記(上)・(下)、前々太平記、都の錦集、伴藁蹊集、八文字屋集、馬場文耕集、佚斎樗山集、近松半二浄瑠璃集、江戸作者浄瑠璃集、仏教説話集成、近世紀行集成、山東京伝集、滑稽本集、式亭三馬集、近世説美

少年録(上)・(下)、文化二年十一月江戸三芝居顔見世狂言集、役者合巻集、中本型読本集、近世奇談集成、石川雅望集、浅井了意集、浮世草子時事小説集、森島中良集、馬琴草双紙集、浮世草子怪談集、柳亭種彦合集、人情本集、小枝繁集、多田南嶺集、十返舎一九集、竹本座浄瑠璃集(一)・(二)・(三)、豊竹座浄瑠璃集(一)・(二)・(三)、只野真葛集、東海道名所記、原典落語集、福森久助脚本集、西沢一風集、新局玉石童子訓(上)・(下)

終章 まとめと今後の課題

1. 本研究のまとめ

第一章では雅語に関する研究と「ものす(る)」の記述を検討した。検討の結果、近世には「雅」と「俗」の概念が普遍的になり、古典・文語に用いられる語(雅語)と現実に用いられる口語との差が明確に意識され、議論が深まっていることが確認された。先行研究でも指摘があるように、代表的な考察として、『雅言集覧』『俚言集覧』『倭訓栞』『雅語訳解』などのような、雅語と俗語という意識が書名にも明確に表れた資料群が書かれるようになったことがその表れとして挙げられる。一方で、それらの文献を参照すると、多くの資料では雅語について明確な定義が示されておらず、漢籍・和歌の雅語を中心とした資料には「ものす(る)」が立項自体されていない。ただし、そのような資料でも序文の中で著者自身が「ものす(る)」を運用している例が複数見られる。雅語や俗語について書かれた資料の中で、鈴木胤の『雅語訳解』、石川雅望の『雅言集覧』、臼井憲成の『雅言畧解』、佐々木弘綱の『雅言小解』という四つの資料には、「ものす(る)」の立項が確認できた。『雅語訳解』と『雅語畧解』では、「ものす(る)」の意味記述が「する」もしくは「何する」に留まっている。まとまった記述は、『雅言集覧』のみである。解説は少ないが、具体的な用法が多く挙げられ、その使用の実態が示されている。一方、『雅言小解』では、「何スル」以外に、「コシラヘル」「ツクル」「ユク」のような具体的な動作の解説が示され、注目できる。これは、近世以降の「ものす(る)」の用例が何らかの物に対して具体的な動作をするという用法に収斂した事実を反映している可能性を示唆するものであると考える。

第二章では、「ものす(る)」における本動詞用法の変化とその他動詞化の過程を考察した。自動詞としての「ものす(る)」は、主に「移動」「存在」「その他(懐妊、結婚など)」の意味で用いられる。「移動」を表す「ものす(る)」は「達成性」「意志性」という性質を持っているといえ、その用法は近代以降にも存続する。「存在」を表す場合は、中世後期以降用例の減少が顕著であり、近代以降には用例が見られない。「その他」の意を表す「ものす(る)」は、中古から中世にかけて一定数の用例が見られ、「結果物がある」という特性が認められる。

一方、他動詞としての「ものす(る)」は、中古、中世には他動性が弱い他動詞用法

がほとんどである。近世に入ると、「AをBにV」という他動詞の構造を備えた用例が現われ、「盗む」「手に入れる」「作る」のような、動作が動作対象に及んでおり、動作対象の状態・位置変化が見られる用例が増える。また「世に広ふ」などの意図を伴い、「作品とする」「版木に刻む」など、他動性が強い用例が増えている。近代以降になると、ほとんどの用例は「AをBにV」という直接目的語・間接目的語を備えた他動詞用法で使用されている。このような変化が見出される一方で、中古の他動詞用法に特徴的な「言う」動作は「発話」という結果物を伴い、自動詞用法でも到達という結果を伴う例が顕著であり、「出産する」動作にも「子供」という結果物を伴う。このような、「ものす(る)」の「達成する」「結果物がある」という特性には歴史的に一貫性が見え、むしろ近世以降はさらに明確化している。

第三章では、存在を表す「ものす(る)」が中世後期から減少し、近世期以降ほとんど見られなくなる現象について考察した。その減少の原因について、先行論では軍記物語で多用される「わたらせたまふ」に注目する。その一方、中世期には、中古期以来存在を表す「おはす・おはします」も多用されている。この三語における用法の違いは、それぞれの語彙項目の独自性を反映しているだけでなく、ジャンルの制約で対立的に用いられたものと考えられる。

存在を表す「おはす・おはします」は、「いる・ある」の尊敬語である。用例の状況については、作品ジャンルの制約もなく、「空間的存在文」と「限量的存在文」における全ての種類で網羅的に使用されている。

「ものしたまふ」の場合は、「所在文」と「所有文」で全体の80%以上に占めることが特徴的である。また、和文・雅文体での運用に限られるという制約を持ち、軍記物語というジャンルには用例が見られない。加えて、「空間的存在文」には「所在文」「生死文」、「限量的存在文」には「所有文」「部分集合文」という四つの下位分類のみに用例が見られる。これは、「ものす(る)」自体に「結果(物)が伴い」「人間のリアルな動作を描写する」「特定の人や集合の存在を表す」などの特性があることから説明づけられる。

「わたらせたまふ」の場合は、「空間的存在文」が用例の75%以上を占めることが特徴的である。その存在用法は、本来の移動動詞「わたる」が持つ「空間的移動の結果の存続」という性質から生じたものであると考えられる。運用面では60%近くの用

例が軍記物語に用いられているが、その軍記物語で存在を表す3語の運用では「おはす・おはします」のほうが圧倒的に多い。したがって、存在を表す「ものす(る)」の減少の要因について、「わたらせたまふ」と交替したとする見方には再検討の余地があると考えられる。

第四章では、「ものす(る)」における補助動詞用法の衰退を考察した。その衰退した原因として、三点を指摘した。まず、「ものす(る)」が断定の助動詞「なり」の連用形「に」に接続助詞「て」等を介して後続する補助動詞「あり」を代用し、かつ「ものしたまふ」の形で、敬語形をなしたものに注目する。しかし、補助動詞「-あり」の変化の衰退、機能語の一部への変化により、補助動詞「ものす(る)」が衰退したと考えられる。

次に、補助動詞としての「ものす(る)」の用例が、動作主の動作の持続、あるいは状態・属性の持続を表し、ほぼ「物語」というジャンルに大きく偏っていることに着目した。「物語」以外の使用はごく少なく、中世以降は擬古的な文の中に稀に見られる程度である。中世以降、貴人の生活が描写される物語類が少なくなり、補助動詞としての「ものす(る)」は、貴人の動作や状態の持続を表す環境を失ったといえる。

最後に、補助動詞としての「ものす(る)」の用例は、ほとんどが「たまふ」や「はべり」など、敬語とともに使われる用例である点に注目した。尊敬の補助動詞「たまふ」は、平安時代には貴族社会の女性を中心に多用されたが、中世末期には、「たまふ」の衰弱が一般化し、それとあいまって、「ものしたまふ」という表現の使用も衰退したと考える。

第五章では、文体史の観点から「ものす(る)」の変化を考察した。「ものす(る)」は平安時代の和文に発したが、歌語ではなく、和文物語類の中に多用されていた。中世には、『源氏物語』の頃の言文一致に近い和文は、中世になるとまた言文二途になる。中古の話し言葉が徐々に文語化していくなかで、文芸から古典を学び、作品を書こうとするとき、ベースは文語でありながら、純粋な古典文語とは異なる運用が行われていく。中世では、平安後期に現れ始めた和漢混淆文が文章語の主流となっていくのに対し、和文は完全な擬古文の世界のものとなった。「ものす(る)」は、中世文語において、中古の用法を受け継ぎ、中古の和文物語類の影響を受けた「王朝物語」と一部の

擬古的「歴史物語」の中で使用され続けた。且つ歌語ではないため、和歌や連歌などのジャンルには例が現れず、擬古文のための雅語としての位置づけが確立した。

近世になると、一般の文章では和漢混淆文が使用されているようになった。しかし、江戸時代の国学者の間では、平安時代の「雅の世界」に憧れ、漢字音を排除した擬古的な和文を作ろうとして、国学運動を行う者もいた。そのため、近世には雅と俗の概念が普遍的になり、雅語と俗語の対立が明確化され、その考察も盛んになった。主として国学者によって古言を用いた雅文体の文章が作られていた。「ものす(る)」も、この趨勢のなかで、雅文体を提唱する国学者の文章に活用されていた。一方、一部の知識人の書く、雅俗折衷体の文章の中にも「ものす(る)」の例が見えたが、使用頻度としては高くない。つまり、近世の「ものす(る)」はさらに話し言葉から離れる一方、国学者と一部の知識人の運用によって保持される雅文語となっていくということである。典型的には「上梓する」、「作品を作り上げる」という意味で継承されている。

近代以降、和漢混淆文が文章語の標準文体の地位となり、「普通文」という名称で一般化した。明治末期になると、文体の自由度は増し、純粋な和文体や純粋な漢文体という使い分けが明確にしなくなっていく。しかし、その中で、「ものす(る)」は文章語として認められた。小説をメインとした書き言葉の文章の中で、主に文芸作品を「作る、完成する」の意味用法で使用され続けている。

2. 雅語「ものす(る)」が保持された要因

本研究を通じて、雅語「ものす(る)」が現代語に至るまで保持された過程と要因を以下のように考える。平安時代の和文物語に発した「ものす(る)」は、中古から中世にかけて、貴人の動作を直接いわずに、ぼかしていう代動詞として用いられた。この用法において、事実上「雅語」という位置づけを得たことは重要であった。特に、中世後期の抄物における「ものす(る)」の用例は、「たまふ」、「はべり」などの敬語補助動詞を伴わずに、それ自体が皇帝に対する発話に用いられる、あるいは皇帝の動作をぼかして代用する。「雅語」という位置づけを得たことに加え、上位者との対話という条件で動作をぼかして表したい時、「ものす(る)」が要求されたと考える。

近世には、「ものす(る)」の補助動詞用法が衰退する一方に対し、本動詞用法には、従来の「ものす(る)」のぼかしていう婉曲的な用法と、結果物が伴う性質が継承され、隠語として「盗む」や「横領する」などの意味で用いられることが擬古文に反映され

ている。しかしそれは近世の作品全般に使われているのではなく、西鶴・馬琴のような和文に対する知識を持つ書き手に用いられたものである。また、咄本における序文・跋文の中に「作品とする」「版木に刻む」という用法が現れ始め、定型的・常套的な運用として一般化していく。この用法も単に作品を書き切るのではなく、心を込めて一つの作品を作り上げたということを表現したいため、「ものす(る)」が選ばれているのだろう。この点も後の文章語での保持に強く影響したと考えられる。

近世には「ものす(る)」の補助動詞用法も、「存在」を表す本動詞用法も衰退している。しかし、近世後期になると、国学者を中心に、平安時代の「雅の世界」に憧れ、和文で文章を書こうとする活動が盛んに行われて、「ものす(る)」も「雅語」の一語として認められた。国学者における文章作りや辞書作りの作業によって、加えて和文に詳しい知識人(馬琴、只野真葛など)の文章作りにより、「ものす(る)」は使用され保持されることとなった。そのため、「ものす(る)」の補助動詞用法が一時比較的に増加し、本動詞用法も「作品とする」以外に、「存在」や「移動」の意を代用する中古・中世の用法が見られる。それに対し、国学者以外の文章では、本文の中に「ものす(る)」の使用が見られない。しかし、「作品とする」という他動詞用法は、中古から継続して使用されており、近世後期に広く一般化し、序文・跋文の中に幅広く見られる。後に、この「作品とする」用法が定型的になり、近代以降にも残っていく。こうして「詩や小説などを書く・作る」という雅なこと、且つ「作り上げた」という成果を伴うことを表したい時、「ものす(る)」が要求され、文章語として定着を果たしたと考えられる。

3. 今後の課題

本研究の調査では、雅語の一語としての「ものす(る)」の史的変遷を明らかにした。しかしながら、課題として残っていることはまだ多くある。

まずは雅語に関する資料の調査が不十分な点である。雅語に関する資料 77 件のうち、本研究では 20 件を調査したが、残りの 57 件も調査する必要があると考える。

また、第四章では、「ものす(る)」における補助動詞用法の衰退について、補助動詞「あり」の衰退と尊敬の補助動詞「たまふ」の衰退を要因として指摘したが、この見方には様々な角度から検証の余地が大きい。「あり」の歴史との関係や、「たまふ」の衰退過程と、「ものす(る)」の関わりについて、より精密に考察する必要があると考

える。

次に、近世の国学者における雅語の研究と雅語の運用の状況は包括的な調査の余地がある。他の雅語の運用状況も併せて、さらに詳しい調査が必要であると考えられる。

最後に、雅語の一語としての「ものす(る)」の歴史的展開を考察したが、それは雅語全般において当てはまる見方かどうか、検証する必要がある。「ものす(る)」一語の運用からの見通しを検証するためには、「ものす(る)」以外の雅語をさらに取り上げた語誌のケーススタディの蓄積が欠かせない。古代日本語から現代日本語まで保持された「雅語」群に対し、それらがなぜ生きながらえたのか、どのような用法がなくなったのか、なぜなくなったのか、運用・用法の上でどの部分が変わったのか、どの部分が保持されてきたのかなどの観点から精密に観察したい。それらの課題に取り組みながら、日本語史上の雅語の展開を包括的に考察していくことを今後の課題とする。

初出一覧

本研究には、これまでに発表してきた論文の部分的、あるいは修正・加筆したものも含まれている。以下、本研究と既発論文との関係を記す。

序章 書き下ろし

第一章 書き下ろし

第二章 余飛洋(2021b)「モノスの自・他用法と他動詞用法の拡大について」『名古屋言語研究』15

余飛洋(2021a)「モノスにおける実質動詞用法と補助動詞用法の歴史的変化」『名古屋大学人文学フォーラム』4(一部)

第三章 全国大学国語国文学会第一二三回大会 口頭発表 「中世における存在を表す「ものす」「おはす・おはします」「わたる」

余飛洋(2022)「中世における存在を表す「ものしたまふ」—「おはす・おはします」「わたらせたまふ」と比較して」『名古屋大学人文学フォーラム』

6

第四章 名古屋大学国語国文学会令和3年度大会 口頭発表 「「ものす」の補助動詞用法について」

余飛洋(2021a)「モノスにおける実質動詞用法と補助動詞用法の歴史的変化」『名古屋大学人文学フォーラム』4(一部)

第五章 書き下ろし

終章 書き下ろし